

一般国道 322 号香春大任バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第 5 集

宮 原 金 山 遺 跡

－ 遺構・土器篇 －

福岡県田川郡香春町大字採銅所所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第 235 集

2 0 1 2

九州歴史資料館





宮原金山遺跡

－ 遺構・土器篇 －

福岡県田川郡香春町大字採銅所所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第235集



1. 調査地遠景
(東から)



2. 調査地遠景
(西から)





1. 調査区全景
(南から)



1. 調査区全景
(上が北)

序

本書は、平成 20 年度に一般国道 322 号香春大任バイパスの建設工事に先立ち福岡県教育委員会が実施した、香春町大字採銅所に所在する宮原金山遺跡の発掘調査報告書です。

香春町の中央にそびえる香春岳は、南から一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳と連なり、その異貌から古くから信仰の対象となってきました。現在では一ノ岳で石灰岩の採掘が行われていますが、香春岳とその周辺からは金・銅・鉄など多彩な鉱物資源が産出され、現在に「採銅所」の地名を伝えています。

今回、発掘調査を行った宮原金山遺跡は香春岳の東側に位置し、平安時代中期から鎌倉時代にかけての鉄生産遺跡の存在が明らかとなりました。町内をはじめ田川郡内では初となる大規模な製鉄遺跡で、製鉄炉の操業時に生じる鉄滓や炉壁などが調査範囲だけでも 10 t を超える膨大な量が出土しました。今まで香春岳周辺の生産遺跡の実態はほとんど分かっていませんでしたが、ようやくこの遺跡の調査によってその片鱗を垣間見ることができ、九州に限らず列島の製鉄史を明らかにする上でも非常に重要な発見となりました。

こうして得られた成果が長く活用されるとともに、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及・定着、学術研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査や報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元宮原地区の皆様にも多大なるご協力とご理解をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 24 年 3 月 31 日

九州歴史資料館
館長 西 谷 正

例 言

- 1 本書は、福岡県教育委員会が一般国道 322 号香春大任バイパス建設事業に伴い、平成 20 年度に実施した宮原金山遺跡の発掘調査報告書である。製鉄関連遺物については現在整理中であるため、本書では遺構と土器について報告を行う。
- 2 本書に掲載した宮原金山遺跡は、福岡県田川郡香春町大字採銅所字金山 4863－3 の一部、6443 の一部、6445－4 の一部に所在する。
- 3 発掘調査および整理作業は、福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。調査の担当は文化財保護課調査第一係（調査当時）下原幸裕である。なお、報告書作成は組織改変に伴い、平成 23 年度から九州歴史資料館が行った。
- 4 本書に掲載した遺構図は、木下修・海出淳平・城戸富士子・楠木益子の助力を得て、下原が作成した。出土遺物の実測図は、下原・坂田順子・田中典子・棚町陽子・寺岡和子・中村洋子が作成した。また、製図は豊福弥生・江上佳子・山田智子が行った。
- 5 本書に掲載した遺構写真は下原が撮影し、空中写真は㈱九州航空に委託しラジコンヘリによる撮影を行った。また、遺物写真は北岡伸一が撮影した。
- 6 本書で使用した座標は国土調査法第Ⅱ座標系に拠っている。
- 7 本書で使用した方位はいずれも磁北を示し、座標北からは西偏 6°40′ である。
- 8 本書で使用した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。
- 9 遺跡分布図（第 2 図）で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の 1／50,000 地形図「行橋」および「田川」を使用した。
- 10 本書に掲載した図面・写真・出土遺物は、全て九州歴史資料館で保管・管理している。
- 11 本書の執筆・編集は、下原が行った。

目 次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
3	調査・整理の体制	3
II	立地と環境	6
1	遺跡周辺の地理的環境	6
2	香春町を中心とした歴史的環境	6
III	調査の内容	11
1	調査の概要	11
2	遺構と遺物	17
	（1）上段の遺構と出土土器	17
	（2）中段の遺構と出土土器	30
	（3）下段・谷部の遺構と出土土器	39
3	その他の出土土器および石器	54
IV	小 結	57
1	出土土器の年代的位置	57
2	出土土器からみた遺跡の形成過程	59
3	宮原金山遺跡における土器相	61
4	おわりに	62

図版目次

- 巻頭図版 1 1. 調査地遠景（東から） 2. 調査地遠景（西から）
- 巻頭図版 2 1. 調査区全景（南から） 2. 調査区全景（上が北）
- 図版 1 1. 調査区全景（南から） 2. 調査区北側全景（南から）
3. 中段土層検出時（南から）
- 図版 2 1. 横断トレンチ土層①（南から） 2. 横断トレンチ土層②（南から）
3. 谷部掘削状況①（南西から）
- 図版 3 1. 谷部掘削状況②（南西から） 2. 調査区東壁土層（西から）
3. 上段トレンチ土層（南東から）
- 図版 4 1. 上段テラス完掘状況（西から） 2. 1号土坑土層（南から）
3. 1号土坑完掘状況（南から）
- 図版 5 1. 6号土坑掘削状況（西から） 2. 2号テラス表土掘削状況（南から）
3. 3号土坑検出状況（南から）
- 図版 6 1. 3号土坑完掘状況（南から） 2. 7号土坑半截状況（東から）
3. 2号テラス東壁土層（西から）
- 図版 7 1. 7号土坑完掘状況（西から） 2. 6・7号炉検出状況（東から）
3. 6・7号炉掘削状況（南東から）
- 図版 8 1. 1号炉・ピット6・7検出時（南から） 2. 1号炉完掘状況（南から）
3. 5号土坑完掘状況（南から）
- 図版 9 1. 10号土坑完掘状況（西から） 2. 2号溝掘削状況（南から）
3. 2号溝土層（南から）
- 図版 10 1. 2号土坑完掘状況（東から） 2. 1号溝土層（南西から）
3. 3・4号炉検出状況（東から）
- 図版 11 1. 3号炉土層（西から） 2. 3号炉完掘状況（西から）
3. 4号炉土層（南西から）
- 図版 12 1. 3・4号炉完掘状況（南から） 2. 5号炉検出状況（西から）
3. 5号炉土層（東から）
- 図版 13 1. 5号炉完掘状況（南から） 2. 中段斜面検出状況（南から）
3. 8号土坑完掘状況（北西から）
- 図版 14 出土遺物①
- 図版 15 出土遺物②
- 図版 16 出土遺物③

Fig. 目次

- Fig. 1 発掘調査風景（谷部掘削開始時）

挿図目次

第1図	宮原金山遺跡の位置	1
第2図	宮原金山遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	7
第3図	調査地周辺地形図 (1/1,500)	12
第4図	宮原金山遺跡地形測量図 (1/200)	13・14
第5図	宮原金山遺跡遺構配置図 (1/200)	15・16
第6図	上段1・3号テラス実測図 (1/60)	18
第7図	1・6号土坑実測図 (1/30)	19
第8図	上段・中段出土土器実測図 (1/3)	20
第9図	上段2号テラス実測図 (1/30)	22
第10図	1・6・7号炉実測図 (1/30)	23
第11図	3・9号土坑実測図 (1/30)	24
第12図	7号土坑実測図 (1/40)	25
第13図	4号土坑実測図 (1/30)	27
第14図	5・10号土坑実測図 (1/30)	28
第15図	2号溝実測図 (1/60)	29
第16図	中段実測図 (1/60)	31
第17図	3号炉実測図 (1/30)	32
第18図	4号炉実測図 (1/30)	33
第19図	5号炉実測図 (1/30)	35
第20図	8号炉実測図 (1/30)	36
第21図	2・8号土坑実測図 (1/30)	37
第22図	1号溝実測図 (1/60)	38
第23図	中段土層および調査区東壁土層実測図 (1/60)	40
第24図	横断トレンチ土層実測図 (1/60)	41
第25図	谷部出土土器実測図① (1/3)	43
第26図	谷部出土土器実測図② (1/3)	46
第27図	谷部出土土器実測図③ (1/3・1/4)	47
第28図	谷部出土土器実測図④ (1/3)	51
第29図	谷部出土土器実測図⑤ (1/3)	53
第30図	その他の出土土器・石器実測図 (1/1・1/3)	55
第31図	出土土器からみた廃滓層の区分 (1/100)	60

表目次

表1	宮原金山遺跡出土土器観察表	63～65
表2	宮原金山遺跡遺構一覧	66



I はじめに

1 調査に至る経緯

一般国道 322 号は、福岡県北九州市から香春町や大任町、嘉麻市など筑豊地域を抜けて朝倉市へ至る、福岡県中央部を貫く主要道の 1 つである。また、筑豊地域は我が国の近代化を支えた代表的な産炭地域であり、一方で香春岳のように石灰を産出する地域もあることから昭和に至るまで産業が隆盛した。そのため、交通量が多いうえに大型車が市街地を走り抜けることから、既存の国道に加えて新たに市街地を迂回する「一般国道 322 号香春大任バイパス」（総延長 10.5km）の建設が計画された。

香春大任バイパス建設事業は平成 9 年度から進められ、これまで陣山屋敷遺跡、浦松遺跡、湯無田遺跡、古坊遺跡、高野ムカエ遺跡が発掘調査され、その成果については『福岡県文化財調査報告書』として順次刊行されている。

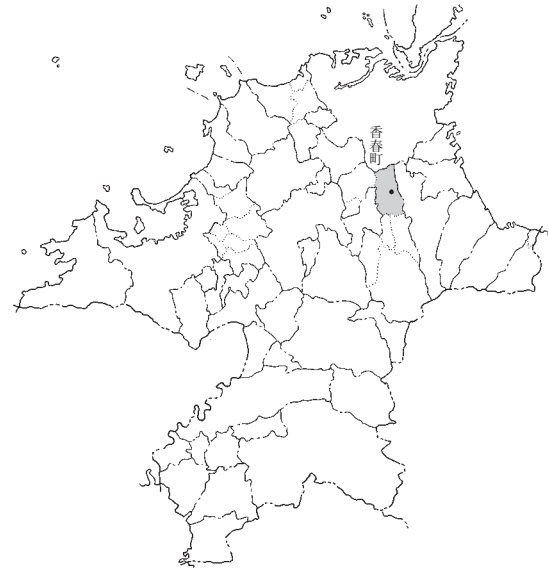
宮原金山遺跡の所在する香春町大字採銅所字金山周辺では、事業の進捗状況にあわせて平成 19 年から埋蔵文化財への対応がはじまり、当時の田川土木事務所（平成 22 年より田川県土整備事務所）との協議のうえで、平成 19 年 12 月に試掘調査を実施した。その結果、土師器片や瓦器片、鉄滓、炉壁などが多数発見され、生産に関わる遺跡の存在が明らかとなった。かねてより香春岳周辺での銅生産については多分野において注目されていたため、現地の保存についても議題になった。ただ、現地が既に後世の激しい改変を受けていること、路線工事が調査区際まで進行していたことなどから、田川土木事務所との協議により平成 20 年度において発掘調査による記録保存調査を実施することで合意した。

平成 20 年 7 月に福岡県土木部道路管理課と教育庁総務部文化財保護課との間で執行委任手続きを行い、同月より調査を開始した。その結果、製鉄炉を 3 基確認したが、現地保存が困難であることから、比較的遺存状況が良好な 4 号炉については遺構を切り取って事務所で保管している。

なお、遺跡名については、大字採銅所内の地区名「宮原」と小字名「金山」から「宮原金山遺跡」（みやばるかなやまいせき）とし、あわせて埋蔵文化財包蔵地の登録を行った。

2 調査の経過

現地調査の着手は田川土木事務所（当時）との協議により平成 20 年 6 月上旬に予定されていた。しかし、協議段階で現地に繁茂する樹木等の伐採を文化財保護課が実施することになり、諸々の手続きに期間を要すること、さらに調査担当者が県営伊良原ダム建設事業に関わる発掘調査を先行して進めていたことなどから、実際の調査に着手したのは平成 20 年 7 月後半に入った 22 日のことである。



第 1 図 宮原金山遺跡の位置

梅雨明け後の暑い盛りであったが、22日から試掘結果をもとに遺構の広がりが見定される範囲に限ってチェーンソーによる樹木の伐採・解体・搬出を開始した。27日には伐採を終えた樹木の移動を重機（バックホウ・0.25）で行うための足場作りが必要であったため、下段部分の表土剥ぎを行い、その排土により足場を確保した。そして29日は重機が中段まで上がり、樹木の移動を開始し、2tトラックにより現場から搬出を行った。

なお、伐採後の樹根についてはバックホウによって抜根する予定であったが、斜面地と段造成により重機が旋回・走行する空間の確保が困難で、なおかつ樹根が相当数の遺物類を抱き込んでいたこともあって、重機での抜根は断念した。ただ、後述するように3基確認された製鉄炉の全てに樹根が大きく入り込んでいたことから、結果的には抜根を中止したことで遺構の破壊を最小限にとどめることができた。

さて、7月31日には中段に上がった重機によって、上段の一部と中段について可能な範囲の表土剥ぎを実施した。これと併行して8月4日にハウス・建機類を搬入し、調査道具類の搬入を行った。表土剥ぎ作業は8月8日に完了し、9日に重機・トラック等は撤収した。

発掘調査前の現況地形の平板測量については8月5日に行い、同日完了した。また11日に測量杭を打設し、発掘調査の事前作業を終えた。

そして12日から掘削作業を開始した。まず重機による表土剥ぎが不可能であった上段から作業員による表土剥ぎを開始した。しかし、折からの酷暑と縦横無尽にのびている樹根が障害となり、抜根作業に多くの日数を費やすこととなった。同時に中段の表土剥ぎと抜根作業を進めたが、全体の表土剥ぎが完了したのは21日である。

8月26日ようやく遺構の検出を開始することができ、下段西半は段造成で遺構が削平され失われていることが判明し、残土置き場とした。また、下段東半は地山の中でもより下層にあるはずの灰白色系の粘質土が散見され、後世の攪乱が激しいと考えられたことから調査を先送りし、中段・上段の遺構検出を実施した。その結果、上段には小さな段状地形（テラス）が存在することが判明し、中段には炭を多く含む長楕円形の炉跡が複数存在することを確認した。この時点で上段に相当する斜面地の伐採範囲を拡張する必要性が生じ、9月2日から検出作業と併行して伐採作業と表土剥ぎを人力によって行った。18日には拡張部で溝を確認したが、これより西側に遺構・遺物を認めることができなかったため、拡張作業を終えた。

一方、下段についても9月9日から再度遺構検出を実施し、谷部にまで遺物が堆積していることが判明し、堆積状況と掘削土量を把握するためのトレンチ（下段トレンチ）を設定し掘り下げを行った。17日には谷底に達し、最低でも1m程度の堆積層が存在することを確認した。予想を大幅に上回る掘削量と遺物量であることが判明し、調査予定の変更を余儀なくされた。この時点で既に当初設定されていた調査期間の半分程度を消化していたこともあり、再度田川土木事務所と協議を行い、調査期間の延長を決定した。

下段については概ね堆積遺物を回収する作業に終始することが予想されることから、製鉄炉を含む遺構群が分布する上段・中段を優先的に調査することとし、9月18日から上段の各テラスの掘削と中段の炉跡の掘削作業を開始した。試掘調査の段階では滓類を確認し、「採銅所」・「金山」等の地名から銅製錬の遺跡ではないかと推測されていたが、実際に各段の遺構や炉の掘削が進むにつれて鉄鉱石が多量に出土するようになり、鉄製錬の遺跡の可能性が浮上し始めた。ただ、緑青が付着する鉱石も数点みられたことから、この段階ではどちらとも決しがたい

状況であった。

10月2日ごろには炉跡を残して各遺構の掘削がほぼ終わったことから、谷部の堆積層を掘削することとなった。そこで、谷部全体の堆積状況を把握するため、谷全体を横断するトレンチ（横断トレンチ）を設けて分層を行い、これを標準堆積と位置付け、層単位に掘削することとした。しかし、谷部の堆積層は永年の自重や土圧、鉄分の再結合などにより「鋼の床」と化しており、従来使用していた唐鍬や手鍬をはじめとする発掘調査道具の大半が破損するという事態に陥った。一方で、コンクリートを打割するための鉄製鑿の使用が大いに効果を挙げた。この頃からはパンケースも200箱を超え、到底谷部全体の遺物を収めるためのパンケースを準備することが不可能であったので、土嚢袋に入れて層単位に管理する方針を決めた。また、これらの遺物を全て整理事務所に持ち帰り洗浄することも不可能であったので、10月9日からは現地にて高圧洗浄機による洗浄を開始し、遺構の埋土についても可能な限り現地で洗浄することとした。

そして、11月18日にほとんどの掘削が完了したことから、21日に時折降る雨の中で清掃を行いラジコンヘリによる空中撮影を実施した。また、一般市民を対象とした現地説明会は日程等の都合から実現できなかったが、11月19日に地元宮原地区の住民に対する現地見学会を調査中に実施し、遺構と遺物についての解説を行った。

発掘調査そのものは12月12日には完了したが、当遺跡が国内の製鉄史を考える上で貴重な遺跡であると判断されることから、12月3日から8日までの間、当時の九州歴史資料館職員の協力のもと谷部東壁の土層剥ぎ取りと、4号炉の遺構切り取りを実施した。

12月15日には現地における全ての作業を終え、同日ハウス・建機類を撤去し、旧田川土木事務所に調査完了の旨を伝え、現地を引き渡した。

なお、その後工事の進捗により西側と北側の隣接地の試掘調査を実施したが、遺構・遺物等は認められず、今回の調査地は遺跡の西半部に相当する可能性が高いことを確認した。

3 調査・整理の体制

発掘調査および報告書作成に係る組織体制は下記のとおりである。平成23年度からは機構改革により、調査・整理・契約業務は福岡県教育庁総務部文化財保護課から九州歴史資料館に移管している。

	平成20年度 (調査)	平成21年度 (整理)	平成22年度 (整理)	平成23年度 (整理・報告書)
福岡県教育庁				
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	杉光 誠	
教育次長	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻 俊彦	
総務部長	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦	今田 義雄	
文化財保護課長	磯村 幸男	平川 昌弘	平川 昌弘	
副課長	池邊 元明	池邊 元明	伊崎 俊秋	
参事	新原 正典	伊崎 俊秋		
参事兼課長技術補佐	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲	

課長補佐	前原 俊史	前原 俊史	日高 公德
庶務			
管理係長	富永 育夫	富永 育夫	富永 育夫
主任技師	小宮 辰之	野田 雅	仲野 洋輔
調査・整理・報告書作成			
調査第一係長	小田 和利	吉村 靖徳	吉村 靖徳
技術主査(地域担当)	岸本 圭		
主任技師(地域担当)		小沢 佳憲	宮地聡一郎
主任技師	下原 幸裕(調査)		
調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
参事補佐	濱田 信也(整理)	新原 正典(整理)	新原 正典(整理)
主任技師		下原 幸裕(整理)	下原 幸裕(整理)
企画係長			吉村 靖徳
主任技師(地域担当)			宮地聡一郎

九州歴史資料館

総括

館長	西谷 正
副館長	南里 正美

庶務

総務室長	圓城寺紀子
主任主事	近藤 一崇

整理・報告書作成

文化財調査室長	飛野 博文
文化財調査班長	小川 泰樹
学芸調査室長	小田 和利
保存管理班長	加藤 和歳
参事補佐	小池 史哲
調査研究班長	杉原 敏之
主任技師	下原 幸裕(報告書)

調査に参加したのは次の方々である（敬称略・五十音順）。

石川謙二・大谷睦美・奥治・奥徳子・小田本正美・加来敏夫・川上洋利・城戸富士子・清川昭広・楠木益子・国田清司・白川留美子・進洋好・田口国夫・田中賢咲・棚田美千子・長尾フサ子・中村勝昭・中山三千生・呑山晴美・桧皮時子・松本綏江・松山ツキ子・村上和行・森渕アツ子・吉川朋幸・渡辺節子・渡辺ヒユキ・渡辺万里子

なお、現地での発掘調査および整理作業では香春大任バイパス建設対策委員長の奥治氏をはじめ、地元宮原区の住民の方々や香春郷土史会、香春町役場各課にも十分な御理解と御支援をいただいた。記して感謝の意を表します。

また、次の方々にも調査・整理中に格別の御指導・御助言を賜わった。あわせて感謝の意を表します（敬称略・調査当時の所属・順不同）。

野村憲一（香春町教育委員会）、高尾栄市（築上町教育委員会）、長家伸・菅波正人（福岡市教育委員会）、宇野慎敏（北九州市教育文化振興財団）、小田富士雄（福岡大学名誉教授）、亀田修一（岡山理科大学）、井澤英二（九州大学名誉教授）、中西哲也（九州大学総合研究博物館）、桃崎祐輔（福岡大学）、小嶋篤（福岡大学大学院、現九州歴史資料館）、穴澤義功（たたら研究会）、大澤正己（JFE九州テクノリサーチ）、中村修身



fig. 1 発掘調査風景（谷部掘削開始時）

Ⅱ 立地と環境

1 遺跡周辺の地理的環境

宮原金山遺跡は、田川郡香春町大字採銅所字金山に所在する。

香春町は、福岡県中央部のやや東寄りに位置し、古代には豊前国田河郡に属し、現在の田川郡でも東北端に位置する。町域は東西約 6.5km、南北約 10.8km と南北に長く、北は竜ヶ鼻（標高 680m）、東は障子ヶ岳（427m）・飯岳山〔大坂山〕（573m）、西は牛斬山（580m）に囲まれ、南は標高 50 ～ 70 m 程度の低い台地が広がり田川盆地の北東部を形成する。これらの山並みに囲まれた中央には『豊前国風土記』香春郷の記事にもみえる香春岳三山（一ノ岳〔平成 23 年現在 298 m〕、二ノ岳 468 m、三ノ岳 511 m）が南北に並んで屹立する。町の中央には金辺川が貫流し、五徳川・呉川・御祓川が合流して彦山川に流れ込む。宮原金山遺跡は金辺川の一支流となる谷沿いに位置する。

金辺川が流れる狭長な地溝帯（谷地形）は「小倉―田川断層」と呼ばれる大規模な断層である。町内の地質はこの断層により大きく分けられ、東側の東山・宮原・高野などの地区には古生代・中生代の深成岩・変成岩・堆積岩などからなる田川変成岩類が南北に広く分布する。宮原金山遺跡においても造成による削平を受けている箇所では軟質の頁岩の岩盤が露出しており、田川変成岩帯に位置することを示している。なお、この東側のみやこ町側（旧勝山町側）には勝山花崗岩（黒雲母花崗岩）、南側の柿下地区には真崎花崗岩（黒雲母花崗岩）が分布する。

一方、断層の西側に位置する香春岳三山の大半は古生代の石灰岩であるが、これは西側の五徳地区に広がる中生代の香春花崗岩〔牛斬山花崗岩体〕（花崗閃緑岩）の貫入により晶質石灰岩化したものである。この石灰岩の採掘は現在も続いている。ところで、香春花崗岩と石灰岩との接触部では接触交代鉱床が形成され、この鉱床帯に磁鉄鉱・磁硫鉄鉱・硫砒鉄鉱・褐鉄鉱・黄鉄鉱・黄銅鉱・藍銅鉱・赤銅鉱・斑銅鉱・輝水鉛鉱・閃亜鉛鉱・方鉛鉱・珪灰石・輝石・石榴石・孔雀石など様々なスカルン鉱物が生成される。そのため、香春岳の三ノ岳や二ノ岳の山麓部には多数の鉱山が開かれている。なお、金辺川より南側の中津原地区周辺の台地は新生代の古第三紀層が分布し、一部に狭炭層が形成されていることから後に炭鉱が開かれた。

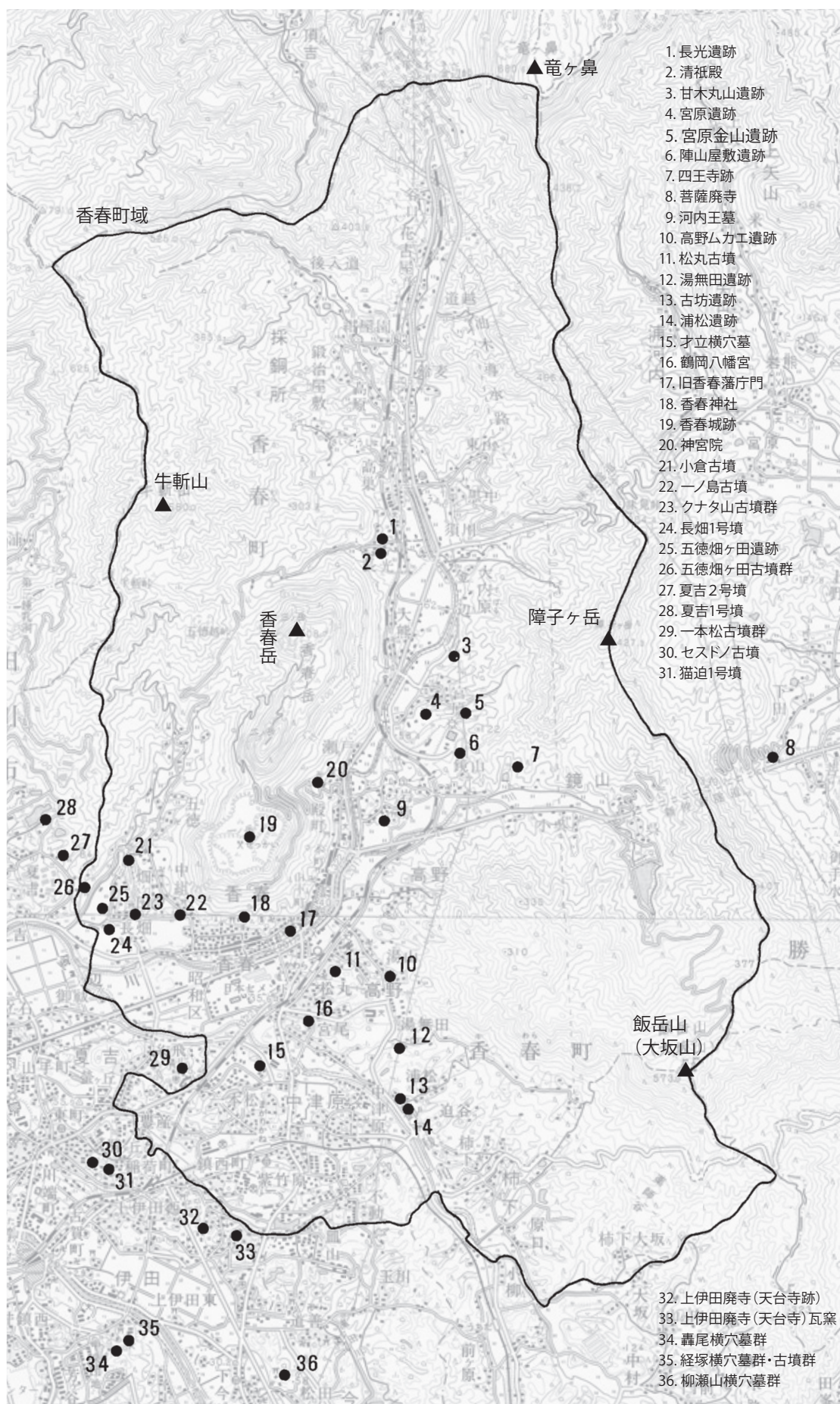
ちなみに、町内の資源開発は基本的に「小倉―田川断層」より西側のスカルン鉱物が主たる採掘の対象となっていたが、これより東側にも坑道跡が多数発見されていることから、必ずしも上記にまとめられる地質・岩石学的分布には限らない状況もあったと思われる。

2 香春町を中心とした歴史的環境

次に、宮原金山遺跡周辺の歴史的環境について町内の遺跡を中心に概観してみよう。

旧石器時代 これまで香春町内で発見された遺跡のうち最も古く遡るのは旧石器時代で、湯無田遺跡から後世の遺構に混じって針尾島産黒曜石製細石刃が 1 点出土している。この他、田川市の寺ノ上遺跡（ナイフ形石器）や猫迫 1 号墳（サヌカイト製ナイフ形石器剥片）などでも石器が発見されており、今後も散発的に発見されると思われる。

縄文時代 従来、二ノ岳遺跡の黒曜石製石鏃 1 点が知られる程度であったが、近年の発掘調査で湯無田遺跡、五徳畑ヶ田遺跡などで当該期の資料が得られている。湯無田遺跡では早期前半の無文土器、前期の轟 B 式土器、中期の船元式土器、後期の北久根山式土器などが石器を伴っ



第2図 宮原金山遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

て出土し、とくに船元式土器は出土した縄文土器のうち約6割を占める点で注目される。五徳畑ヶ田遺跡では、晩期に位置付けられる土偶も出土している。

弥生時代 集落遺跡や墓地などが多く確認されるようになる。五徳畑ヶ田遺跡で前期後半から中期中頃を主体として一部後期から終末期にも展開する集落跡が発見され、太型蛤刃石斧の製品・未製品のほか扁平打製石斧・石包丁・石剣・石戈なども多量に出土し、石器製作遺跡として注目される。

高野ムカエ遺跡では、包含層中より中期後半から後期にかけての土器群と紡錘車1点が出土している。また、才立横穴墓の付近からも中期後半ごろの土器が出土しており、周辺に当該期の集落が広がると考えられる。

古坊遺跡では終末期に位置付けられる箱式石棺墓12基、石蓋土壙墓7基、土壙墓1基の合計20基の墓が発見され、鉄鏃・鉋・刀子などの鉄製品もわずかながら出土した。

長畑遺跡では弥生時代中期の小児用甕棺墓2基・土壙墓2基が発見された。

宮原遺跡Ⅱ地点では中期の竪穴住居跡（円形、径11.7m）と小児用甕棺墓2基、土壙墓の可能性のある土坑などが発見された。さらにⅢ地点では中期前半の貯蔵穴1基も確認されている。Ⅳ地点では中期の貯蔵穴2基や土坑などが調査されている。この他、宮原遺跡では石蓋土壙墓2基が確認され、出土遺物はないが後期～終末期の所産と考えられている。

古墳時代 町内で発掘された集落遺跡は限られるが、土器の散布地は多く、本来は低丘陵や微高地にはそれぞれ集落が展開していたとみられる。

五徳畑ヶ田遺跡では、前期と後・終末期の竪穴住居跡が発見されているが、詳細は未報告である。浦松遺跡では後期の竪穴住居跡と流路が確認されたが、ここでは須恵器に対する須恵器模倣土器の割合が5割近い点や、流路からミニチュア手捏ね土器が多数出土している点が注目される。さらに、流路からは鉄鏃・刀子などの鉄製品のほか鍛冶羽口や鉄滓、砥石などが出土しており、鍛錬鍛冶を行っていた可能性がある。

次に墓制をみてみよう。長畑遺跡では前期の箱式石棺墓5基が確認され、とくに近接する1～4号墓は低墳丘墓であった可能性も推測されている。鉄製鋤先・鉄鎌・鉄刀子などの鉄器の副葬もみられる。箱式石棺を営む点に弥生時代からの継続性が窺える。

町内の高塚古墳はほとんどが香春岳の西から南に分布する。クナタ山古墳は詳細不明であるが、西に開口する単室構造の横穴式石室で、玄室平面形は羽子板状をなし、腰石から上部は小口積みである。遺物の出土はないが概ね5世紀後半から6世紀初頭ごろの時期幅で理解できよう。この付近に所在する小倉古墳は径9.2mの円墳で、西に開口する単室構造の横穴式石室を主体部とする。わずかに出土した須恵器から5世紀末～6世紀前半の築造と推定され、クナタ山古墳に連なる小首長墳であろう。また、長畑遺跡1号墳は径11～14m程度の円墳で、横穴式石室を主体部とし、6世紀前半ごろの築造とみられる。玄室内から出土した金製垂飾付耳飾は、新羅系の渡来遺物として知られる。

長畑遺跡1号墓にみられた半島色は、同時期の田川市域の古墳でもみられる。5世紀後半の築造とみられる田川市セスドノ古墳（円墳、径37m）からは大伽耶系とされる金銅製垂飾付耳飾が出土しており、大伽耶圏に属する韓国大邱市達西古墳群に類似した石室構造が存在することも早くから指摘されている。さらにセスドノ古墳の近傍に築かれた猫迫1号墳（円墳、径27.2m）も5世紀後半の築造で、セスドノ古墳に似た石室構造である。両古墳とも長畑遺跡

と直線にして2kmしか離れておらず、渡来系文化の流入を考える上で興味深い。

町内で最も新しい時期と考えられる石室墳は、現在宮内庁により河内王墓として管理されている小規模な古墳で、かつては横穴式石室の一部が開口していたという。現在も石室石材の一部が露出しているが、立地などから6世紀ごろと推定される。

才立横穴墓は町内で唯一発掘調査が実施された横穴墓で、方形の玄室に短い羨道が付く。天井は屋根形に割り込み、床面には排水溝を有する。出土遺物は6世紀末前後の時期と推定される。才立横穴墓のある一帯は中津原横穴墓群が存在していたが鉱害復旧に伴う土取りによって大半は失われたようである。周辺では田川市の経塚横穴墓群・轟尾横穴墓群・柳瀬山横穴墓群、福智町の西金田城山横穴墓群・野添横穴墓群をはじめとして非常に多くの横穴墓群が展開しており、町内にも本来は多数の横穴墓が造営されていたと推察される。

ちなみに、経塚横穴墓群からは須恵器の頸基部突帯付壺が出土しており、新羅の陶質土器との関連性も指摘されている資料である。

古代 確認されている遺跡はそれほど多くはない。浦松遺跡では7世紀第4四半期から8世紀第1四半期ごろの掘立柱建物群が発見され、少なくとも4時期の変遷が確認されている。建物群と同時期の遺物は一般的な器種で構成される土師器や須恵器などで直接官衙的な様相は見出し難いが、古代の田河郡から仲津郡へ抜ける道筋に面し、注意を要する遺跡である。

古代の田河郡内の寺院跡は、上伊田廃寺（天台寺跡）が知られるのみである。『應永戦覧記』に「勾金の天台寺」とあり、最澄創建の伝承も残る。出土瓦には百済系・高句麗系・新羅系などがあり、とくに頸部に塼の図文に倣って珠文で区画する中に唐草文を配する新羅系の軒丸瓦・軒平瓦は、当寺院の代名詞的存在で量的にも多く創建瓦とされる。ちなみに、呉川を溯り東に山を越えると菩提廃寺がある。菩提廃寺は出土遺物から8世紀後半から9世紀にかけて栄えた山岳寺院とされ、やはり新羅系古瓦を用いるなど渡来系要素を見出すこともできる。

なお、香春岳の一ノ岳南麓にある香春神社には、天台宗の開祖である最澄が渡唐する際に航海の安全を新羅神に祈念したことが伝えられており、古代になっても渡来人あるいは渡来文化との関わりが深かったことを窺うことができる。また、二ノ岳東麓にある神宮院内には梵字を刻んだ石があり、平安期の所産とされている。

信仰に関わる遺跡としては、古坊遺跡で発見された平安時代後期の経塚3基がある。3基のうちSX01では青白磁製四耳壺、SX02では褐釉陶器壺が経筒容器として使用され、後者には青白磁合子が副葬されていた。

なお、古代には豊前国府から大宰府へと通じる官道が、みやこ町側（東側）から山を越えて鏡山地区に至り、金辺川の南岸を下伊田方面へと直線的に抜けていたと推定されている。ちょうど現在の国道201号に似たルートが想定される。宮原金山遺跡が所在する金辺川中・上流域は官道の本線（駅路）から外れるが、当然金辺峠を抜けて北九州方面（旧豊前国企求郡）へ向かう道が存在したはずで、近世には長崎街道が整備される。

中世 これまで田川郡内ではこの時期の遺跡はほとんど知られておらず、発掘調査も糸田町松ヶ迫遺跡や添田町英彦山修験道遺跡など非常に限られていた。しかし、近年圃場整備等で調査が進展し中世期の遺跡数も増加してきており、川崎町七反坪遺跡、添田町枳田遺跡・宮の前遺跡・観音寺遺跡、赤村数珠丸赤松遺跡・数珠丸茶屋屋敷遺跡などが挙げられる。

町内では陣山屋敷遺跡・湯無田遺跡・長光遺跡などが知られるに過ぎない。

陣山屋敷遺跡では、13世紀後半ごろの集石墓とみられる集石遺構2基が確認され、白磁四耳壺や褐釉壺などの出土がみられ、丘陵尾根上に墓地が展開している。宮原金山遺跡でも土壙墓とみられる遺構を確認しており、時期的にも近い。香春町周辺における鎌倉期の埋葬地のあり方を考える上で興味深い状況といえる。

湯無田遺跡では、掘立柱建物9棟・柵3条・土坑等からなる中世後期の集落が発見されているが、出土遺物が少なくその性格は不明確である。

なお、長光遺跡では時期判断に苦しむが、中世期に遡る可能性がある銅製鍊遺物や銅鉍石（酸化銅鉍）などがまとまって出土しており、周辺に銅生産・鑄銅遺跡が存在するとみられる。

近世以降 殿町山ノ方遺跡では江戸時代初期ごろの石組み区画溝や焼土のひろがり確認され、銅滓も出土している。鑄銅遺構等は未確認ではあるが、細川藩の鑄銭場が香春に置かれたことと関連して、今後の調査が期待される。とくに香春岳の東側には秋月街道（小倉街道）の宿駅が置かれ、明治二（1869）年まで小倉小笠原藩の中心地として栄えた経緯もあり、町並みの下に隠れた歴史の掘り起しも今後の課題といえる。

なお、陣山屋敷遺跡では10基を超える近世墓が調査され、蔵骨器を有する火葬墓と釘付木棺を用いる木棺墓とが確認されている。

以上のように、香春町を中心に各時代の遺跡が発見されているが、町内だけで歴史的な展開が追究できるほどの資料は得られていない。田川郡域を対象としても調査事例が少なく、徐々に調査成果が蓄積されているとはいえ、やはり資料不足の感は否めない。そうした点においても、今回の宮原金山遺跡の発見は地域の歴史を解明する糸口として重要である。

参考文献〔主要なものに限る〕

- 香春町教育委員会 1992『香春岳 香春岳の総合調査』
- 香春町教育委員会 1995『才立横穴』香春町文化財調査報告書第9集
- 香春町教育委員会 1998『長畑遺跡・宮原遺跡・小倉古墳・才立横穴墓』香春町文化財調査報告書第10集
- 香春町教育委員会 2001『香春町内遺跡等詳細分布調査報告書』香春町文化財調査報告書第12集
- 香春町教育委員会 2002『五徳畑ヶ谷遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（概報）』香春町文化財調査報告書第13集
- 香春町教育委員会 2003『宮原遺跡Ⅱ・Ⅲ地点』香春町文化財調査報告書第14集
- 香春町教育委員会 2003『三井筒井遺跡』香春町文化財調査報告書第15集
- 香春町教育委員会 2007『宮原遺跡Ⅳ地点・宮原遺跡（石棺墓群）』香春町文化財調査報告書第16集
- 香春町教育委員会 2009『長光遺跡・殿町山ノ方遺跡』香春町文化財調査報告書第17集
- 香春町史編纂委員会 2001『香春町史』上・下巻
- 田川市教育委員会 1990『天台寺跡（上伊田廃寺）』田川市文化財調査報告書第6集
- 田川市教育委員会 2004『猫迫1号墳』田川市文化財調査報告書第11集
- 福岡県教育委員会 2000『陣山屋敷遺跡』福岡県文化財調査報告書第145集
- 福岡県教育委員会 2003『湯無田遺跡』福岡県文化財調査報告書第180集
- 福岡県教育委員会 2006『古坊遺跡・高野ムカエ遺跡』福岡県文化財調査報告書第206集
- 福岡県教育委員会 2007『浦松遺跡』福岡県文化財調査報告書第211集

Ⅲ 調査の内容

1 調査の概要

調査地は東西にのびる丘陵の南斜面から、その前面に広がる谷部に及ぶ。既に谷部の南半は道路工事が及んでいたことから、試掘調査で遺構が存在しないことを確認している場所を排土置き場とし、調査を開始した。

現地の斜面地は現代になってからの植林が行われており、地元住民からは少なくとも戦後には植林を行っていたことを伝え聞いている。また、平地部分については狭隘な谷部を造成して田畑を形成しているが、調査地から東（上流）側に 100 m ほどで耕作地の広がり終わる。

現在の谷川は調査区の南端付近を流れているが、後述するように本来はもう少し北側を流れており、耕作地の造成時に流れを改変したものと考えられる。

なお、調査を行った丘陵の頂部や北側の斜面あるいは遺跡と面する南側の丘陵でも試掘調査を実施したが、遺構・遺物等は確認できず、土層観察からも地山を形成するものであった。したがって、遺跡は調査対象となった丘陵の南斜面のみに広がっているものと考えられ、仮に関連する建物等が存在するのであれば、より東側の耕作地等に広がっている可能性が高い。

調査地は便宜上、斜面部を「上段」、造成による段地形の場所を「中段」、耕作地が広がっていた平坦地を「下段」あるいは「谷部」として区分した。後述するように、各段はそれぞれ異なる役割を持って有機的に機能していたと考えられ、製鉄遺跡における空間利用の一端をみることができる。

基本層序（第 6・23・24 図）

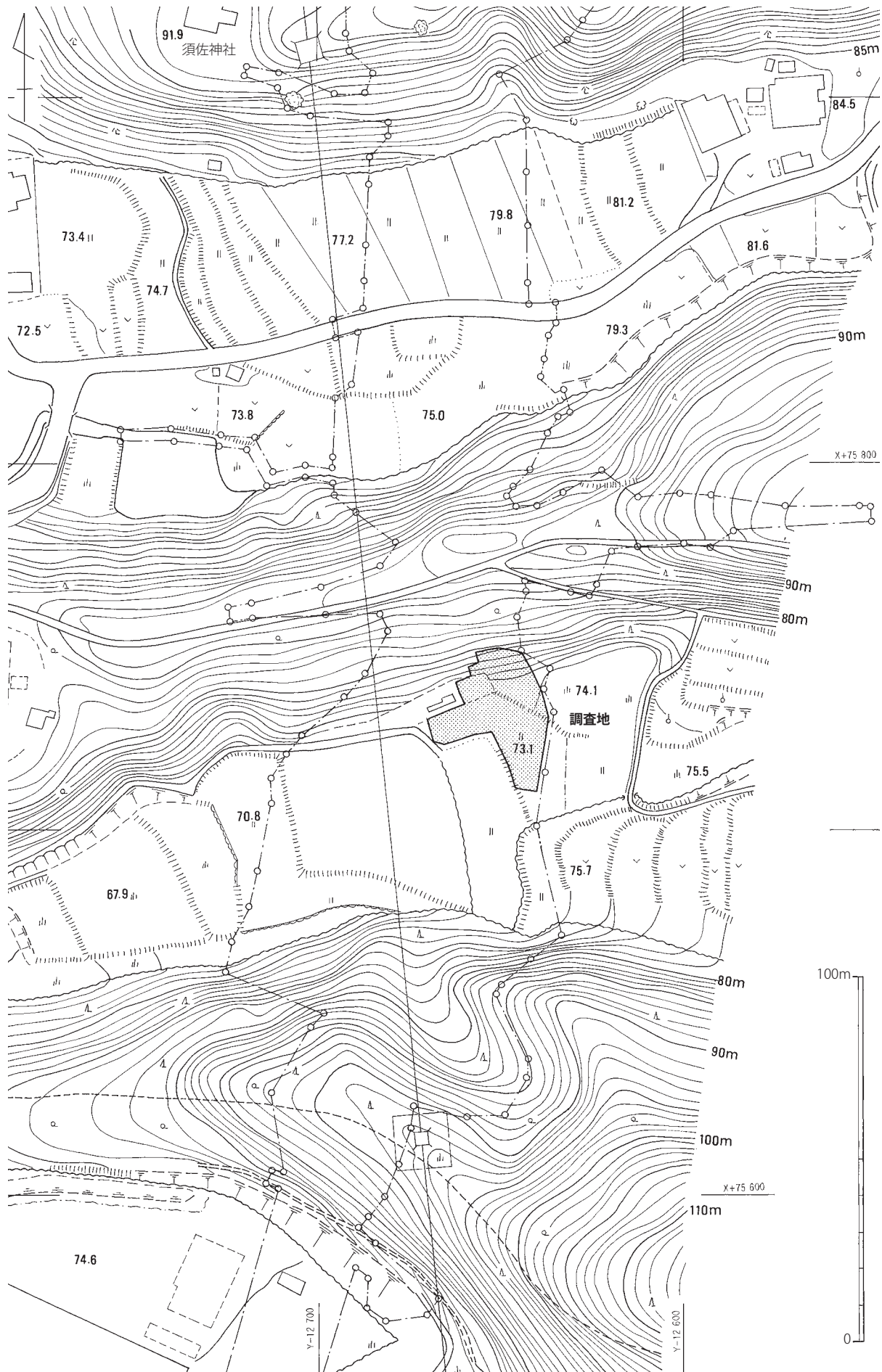
遺跡の広がりが斜面から平地までであるため、統一的な層序ではないが、基本的な堆積状況は以下に記すとおりである。

斜面部では厚さ 0.1 m ほどの表土を除去すると、灰褐色～褐灰色土となる。この層は後世の堆積層で、これを除去すると遺構が展開するテラス面となる。このテラス面は基本的に明黄橙色土の地山土であるが、少し掘り下げるとにぶい黄白色～灰白色の地山土へと変化する。

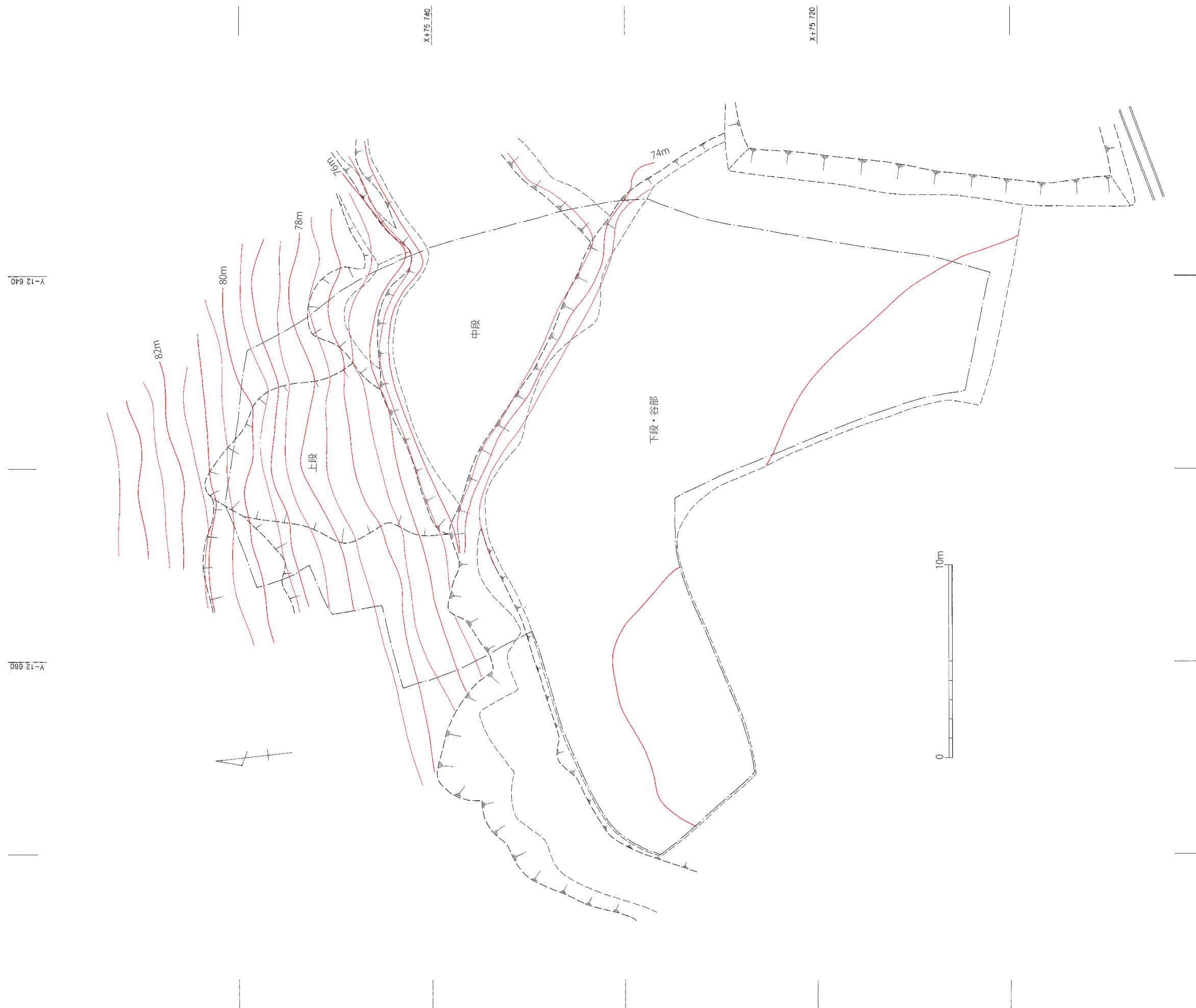
中段部分では表土（厚さ 0.1 m）の直下に暗褐色土（厚さ 0.15 ～ 0.2 m）が堆積しており、炉壁や滓類などを多数包含していたが、堆積状況から後世の耕作土であろう。この暗褐色土を剥ぐと中段の山側では地山土、谷側では谷部包含層（廃滓場）が確認できる。したがって、調査段階での遺構面は灰褐色土直下であるが、山側の地山土は黄白色を呈していることから、本来の遺構面は失われている。ただし、3・4・5 号炉の遺構上部は若干明黄橙色の地山土が残っており、とくに炉の前面側については削平の度合いが少ない可能性がある。

下段は調査前まで耕作地であったため、厚さ 20cm ほどの耕作土が表土である。ただ、耕作土の下位に床土はなく、耕作土直下に地山面や谷部包含層（廃滓場）が現われる。ここで現われる地山面は頁岩の岩盤層であり、本来の地山を 1 m 以上削り込んで地下げされていることが判明した。廃滓場の堆積層を全て除去すると、流水等で堆積したとみられる黄白色～灰白色の砂礫層が広がり、川岸としての景観となる。さらに下層は頁岩の岩盤層であり、最も深くなる流路部分はこの岩盤層が露出しており、岩盤が軟弱であるため流水で抉れている。

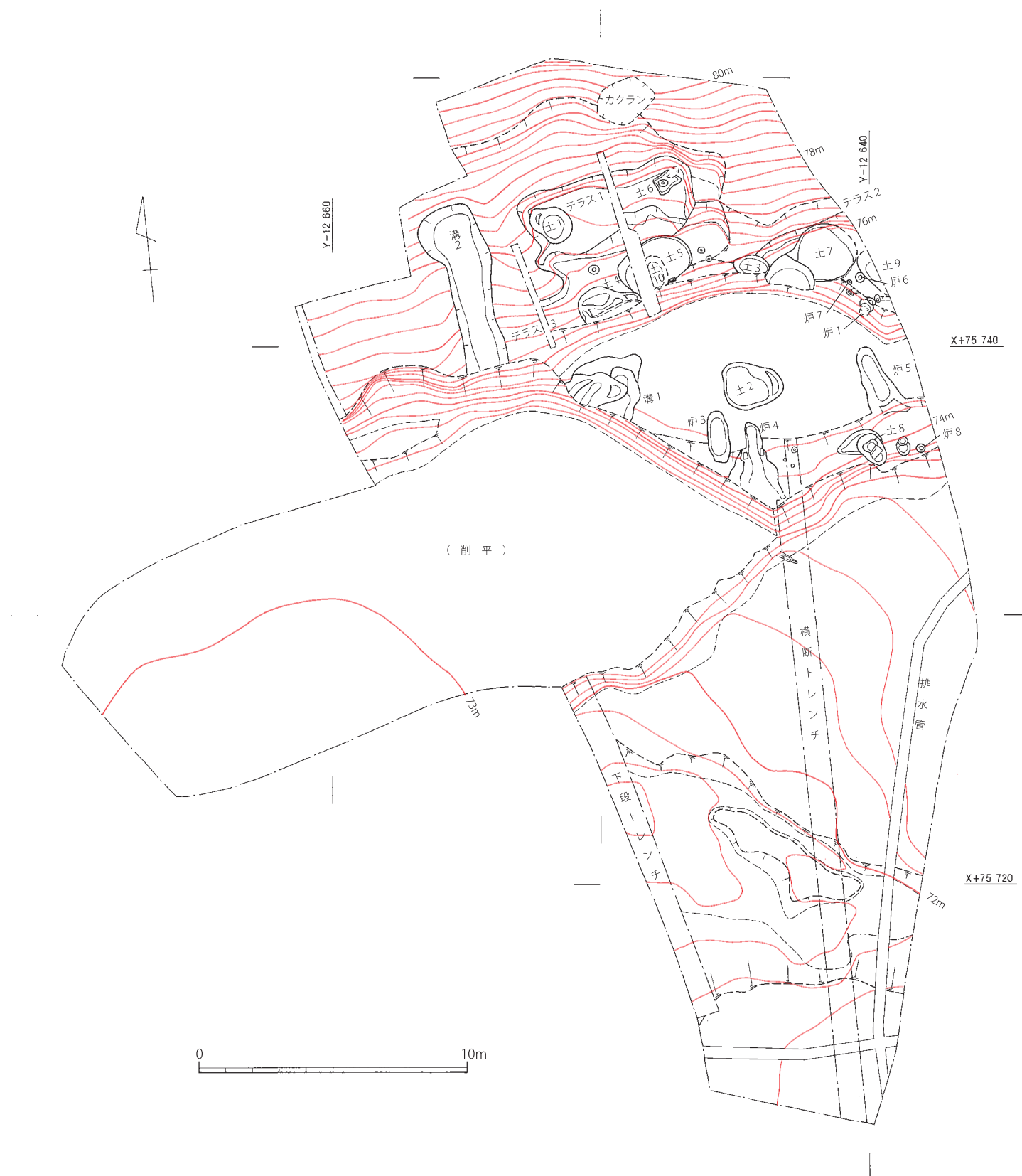
以上のように、宮原金山遺跡は斜面部に立地することもあるが基本的に後世の堆積層が薄く、基本的には表土直下に近い状況で遺構面を検出した。そのため、調査前から周辺に炉壁や



第3図 調査地周辺地形図 (1/1,500)



第4図 宮原金山遺跡地形測量図 (1/200)



第5図 宮原金山遺跡遺構配置図 (1/200)

滓類が散乱している状況で、調査対象地以外の場所、とくに東側はさらに遺跡そのものが広がっている可能性が濃厚である。

主要な遺構

今回の調査では、製鉄に関わる炉が3基、鍛冶に関わるとみられる炉が4基、土坑10基（うち土坑墓の可能性1基）、溝2条、ピット数個を発見した。さらに谷部には製鉄等で生じた鉄滓類の廃棄場が広がっており、最大で1.8 mほどの堆積層を形成していた。廃滓場から出土した滓類や炉壁の総重量は11 tを超え、調査区外に遺跡が広がることや、既に造成により一部失われている状況からすると、遺跡全体では少なくとも20～30 tであったと考えられる。

時期的には出土した土器類などから、10世紀後半には廃滓行為が始まっており、この頃が上限となる可能性がある。下限については堆積層の上層から13世紀前半ごろの土器が出土しており、14世紀前半ごろの土器が出土した3号土坑（土坑墓）の造営時期を考えると、13世紀の中頃には製鉄遺跡としての役目を終えていた可能性がある。

宮原金山遺跡は、以上から平安時代後期から鎌倉時代を中心に操業された製鉄遺跡であったと考えられるが、磁鉄鉱を原料としている点は特筆される。その意義については製鉄関連遺物を報告する予定の続刊にて触れることとしたいが、わが国における製鉄史の中で非常に重要な位置を占める遺跡であると考えられる。

なお、縄文・弥生時代に遡る土器・石器も数点出土しており、遺跡周辺の歴史を考える上でも貴重な資料を得ることができた。

2 遺構と遺物

（1）上段の遺構と出土土器

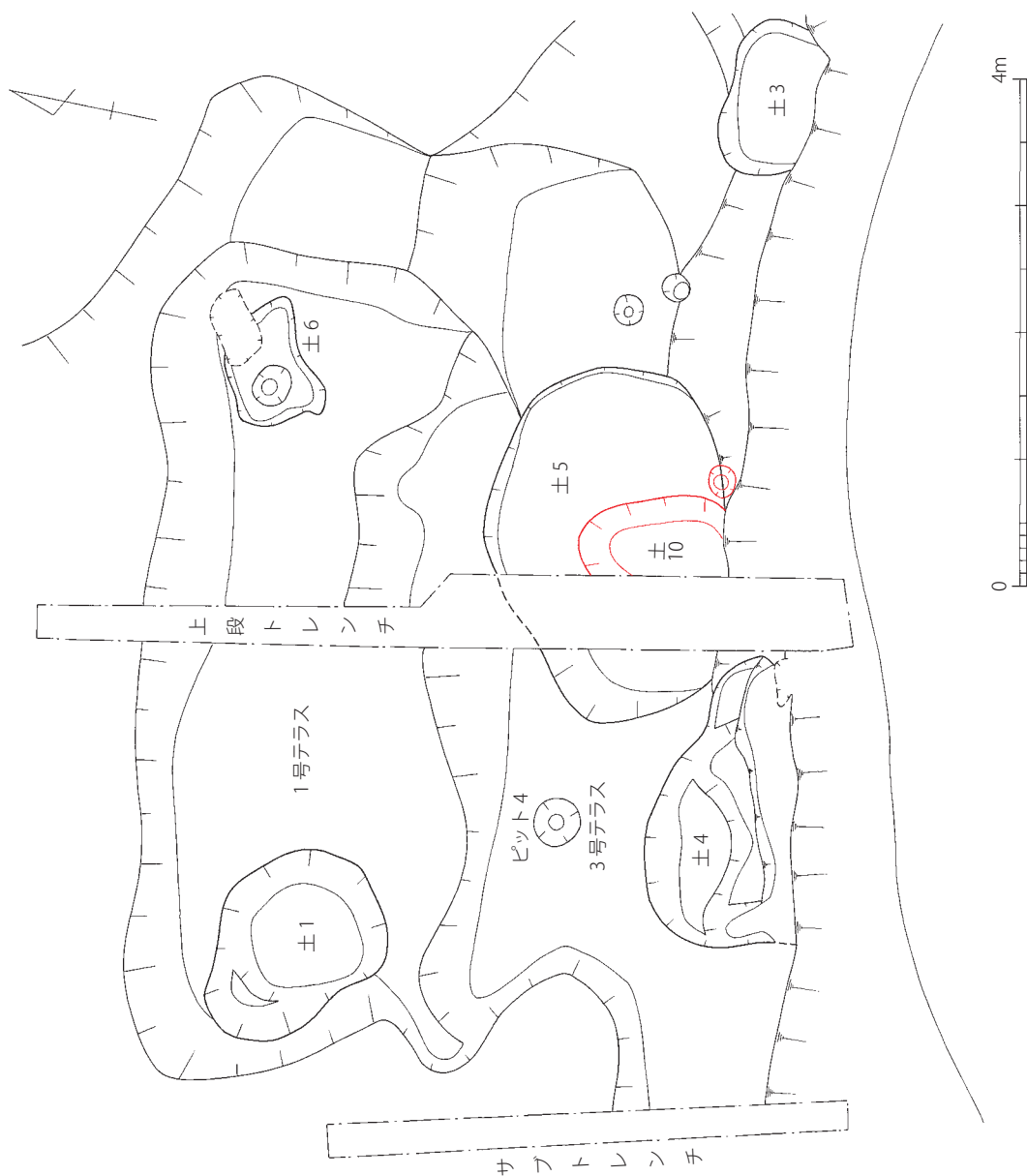
既述のとおり、宮原金山遺跡は平坦地から斜面地まで遺跡の広がりをみせるが、このうち最も上位に位置する斜面部を「上段」と設定した。上段は小規模なテラス（平坦面）を3カ所に設けており、その西側には南北溝が1条掘られている。3カ所のテラスには、土坑8基、鍛冶炉3基、ピット数基が営まれており、テラス以外の場所の遺構は南北溝の2号溝だけである。したがって、斜面部では基本的にそれぞれのテラスが遺構群の単位をなすと判断できる。そこで、以下にテラスごとの状況を述べていくこととする。

i. 上段トレンチ（第6図）

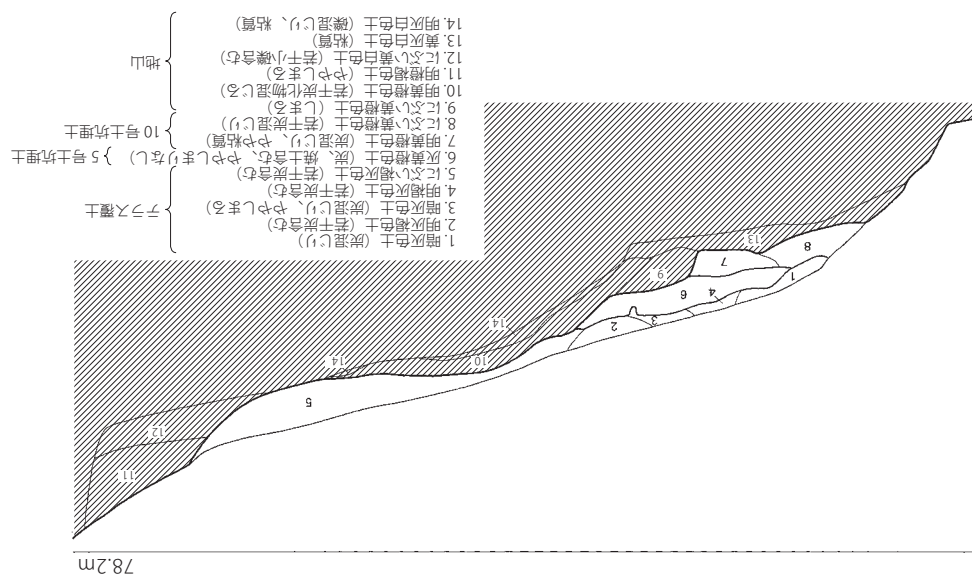
上段については表土掘削および抜根作業の段階から、小規模ながら緩やかな段地形が存在したため、何らかの遺構の存在が推測された。そこで、斜面部分の堆積状況と掘削土量の把握を行う目的で斜面に直交する方向で長さ6.5 m、幅0.5 mのトレンチを設定した。トレンチ北側についてはテラスの存在が確定的であったことからトレンチ幅を0.3 mに狭めている。

トレンチ調査の結果、1号テラスと3号テラスを確認し、土層観察から5号土坑の存在も明らかとなった。残念ながら斜面の下方部分は後世の段造成の際に削り取られており、3号テラスの上面も若干後世に削られたり、流失している状況も明らかとなった。しかし、基本的には表土直下で遺構の存在を確認することができ、多少後世に改変を受けているとはいえ、良好な状態で遺跡が残っていた。

上段については、このトレンチで得られた情報を元に掘削を行った。



第6図 上段1・3号テラス実測図 (1/60)

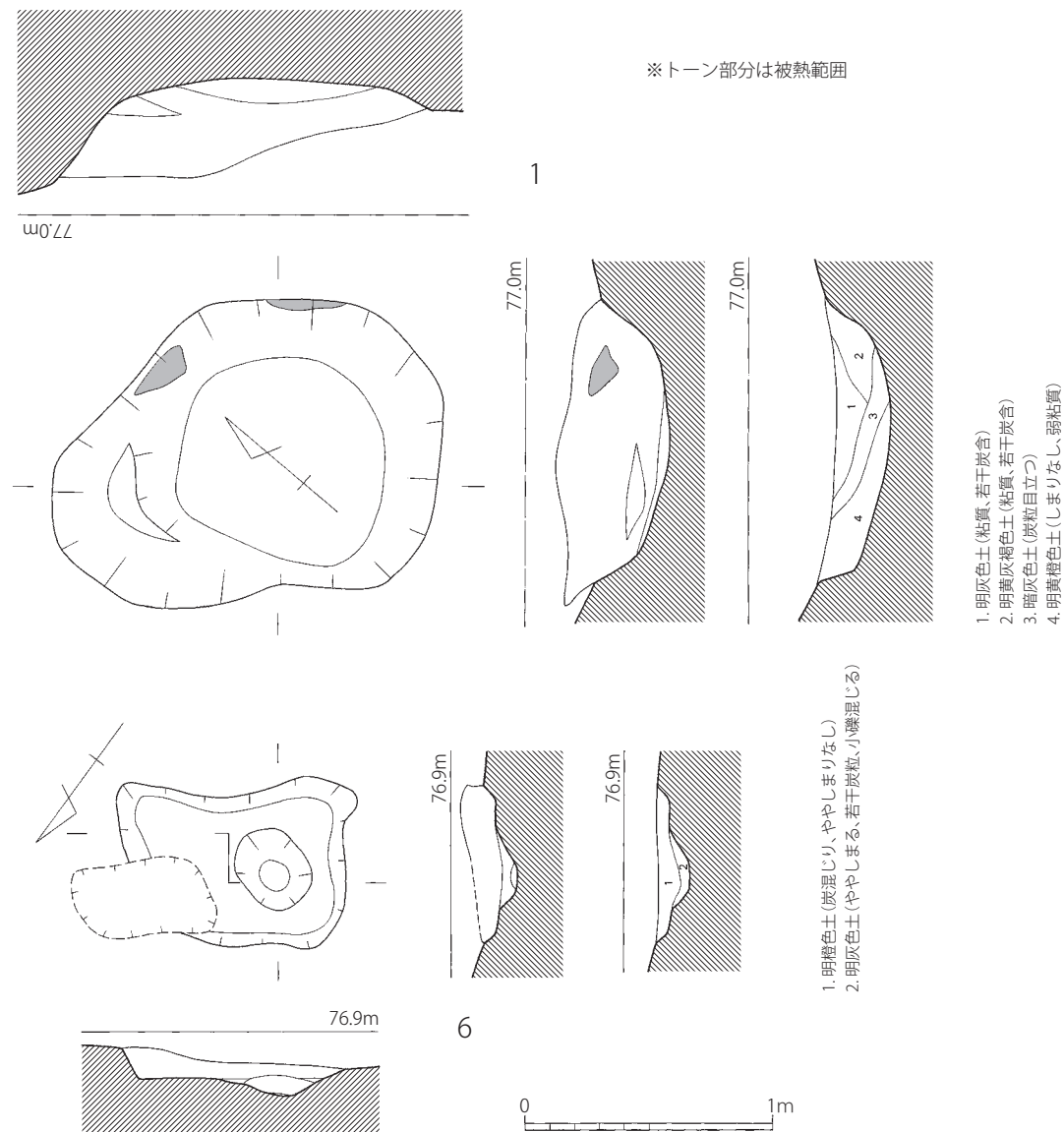


なお、2号溝とテラス群との間にも、長さ4.1 m、幅0.25 mのサブトレンチを掘削しているが、これは調査当初の排水溝の目的で掘削したもので、遺構のない箇所の地山面をさらに0.1 mほど掘り下げた。掘削状況から黄橙色粘質土が地山土であるということを追認できた。

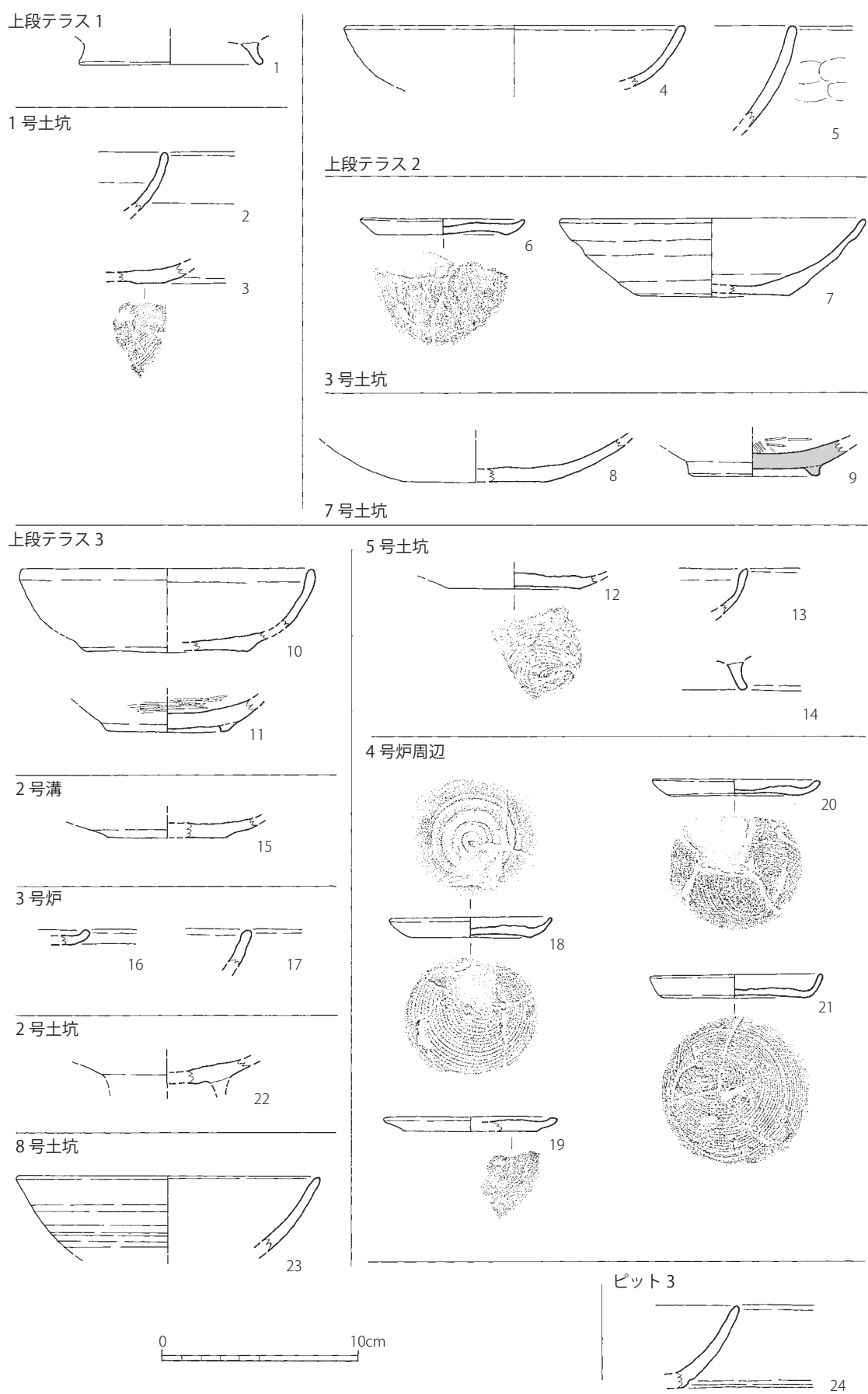
ii. 1号テラス（第6図）

斜面部の中でも最も標高が高い場所にあり、平面形は概ね東西6.55 m×南北2.55 mの不整形な長方形を呈する。床面の規模は東西5.9 m×南北2.3 mである。遺構面より上層は樹根による攪乱が激しく遺存状況はよくなかったが、黄褐色ないし灰白色の地山土を削り込んでテラス面を形成している。地山の削り込みは、後世の崩落なども多少想定する必要があるものの、テラス面から0.7 mほど高い位置から行っており、断面はやや傾斜するL字状を呈する。

なお、このテラスより上方についても表土を除去してみたが、急斜面が続くだけで、遺物の



第7図 1・6号土坑実測図 (1/30)



第 8 図 上段・中段出土土器実測図 (1/3)

出土もなく、さらなる遺構が存在する可能性は極めて低いと判断される。

遺物は、堆積土中から若干の土師器片や鉄滓、炉壁片などが出土しているが、明確な時期を特定できるほどの資料ではない。

出土土器（第8図）

1は土師器碗の高台小片である。坏部とは接合面で剥離している。残存高は1.1cmと比較的高めの高台で、端部はやや丸みのある方形状を呈する。

1号土坑（第7図）

1号テラスの西端に位置し、長径1.54m×短径1.15m×深さ0.46mの楕円形を呈する。堆積層中に炭を含む層（2層）がみられ、部分的に被熱を帯びて赤変している箇所も認められるが硬化するほどではない。掘削時には鍛冶炉の可能性も想定したが、被熱の程度が弱く、炉床土の存在も皆無で、鍛冶を裏付ける根拠が皆無であったことから、火を用いる何らかの作業を行ったと解釈したい。

出土土器（第8図）

2は土師器の坏ないし碗の口縁部である。内外とも回転ナデで仕上げ、厚さは均一である。胎土や焼成の状況から3と同一個体の可能性もある。3は土師器坏の底部小片である。底部は糸切り未調整で、口縁部にかけて回転ナデで仕上げ、内底面はナデである。

6号土坑（第7図）

1号テラスの北東隅に位置し、長径0.9m×短径0.7m×深さ0.12mの不整長方形を呈する。あまりしまりのない埋土で、若干焼土粒を含むが、被熱の痕跡は認められない。床面は岩盤（軟弱な頁岩）が露出している。土器の出土もなく、遺構の性格は不明である。

iii. 2号テラス（第9図）

調査区東端に位置し、現状では前面幅6m×奥行2m程度の三角形を呈するが、明らかに調査区外にまで及んでおり、さらに前面が後世の開発による段造成によって削平されている。調査区外の地形も造成で削平を受けているが、現地地形から判断すると少なくとも東西幅は9m以上であったと推測される。なお、テラス前面には5号炉（製鉄）が近接しており、2号土坑の位置からみても、テラス本来の奥行は最大で見積もっても現状から1.5m程度広がるとみるのが限界ではないだろうか。

2号テラス部分は、発掘調査前から鉄滓や炉壁が多数散布しており、製鉄炉本体が存在する可能性も考えられたが、結果的にこのテラスに製鉄炉はなかった。しかし、表土ないし覆土中に非常に多量の炉壁が含まれていることから、付近に炉が存在する可能性は大きいと考えられる。なお、調査区外に2mほど離れた箇所に滓や木炭などが地表に多く確認できる箇所があり、炉が存在する可能性も否定できない。

なお、このテラスでは3・7・9号土坑、1・6・7号鍛冶炉のほか、ピットが3基ほどみついている。テラス面では7号土坑の上面を中心に極少量の土器片が出土したが、鉄滓や炉壁の量からすれば皆無に等しい状況である。

出土土器（第8図）

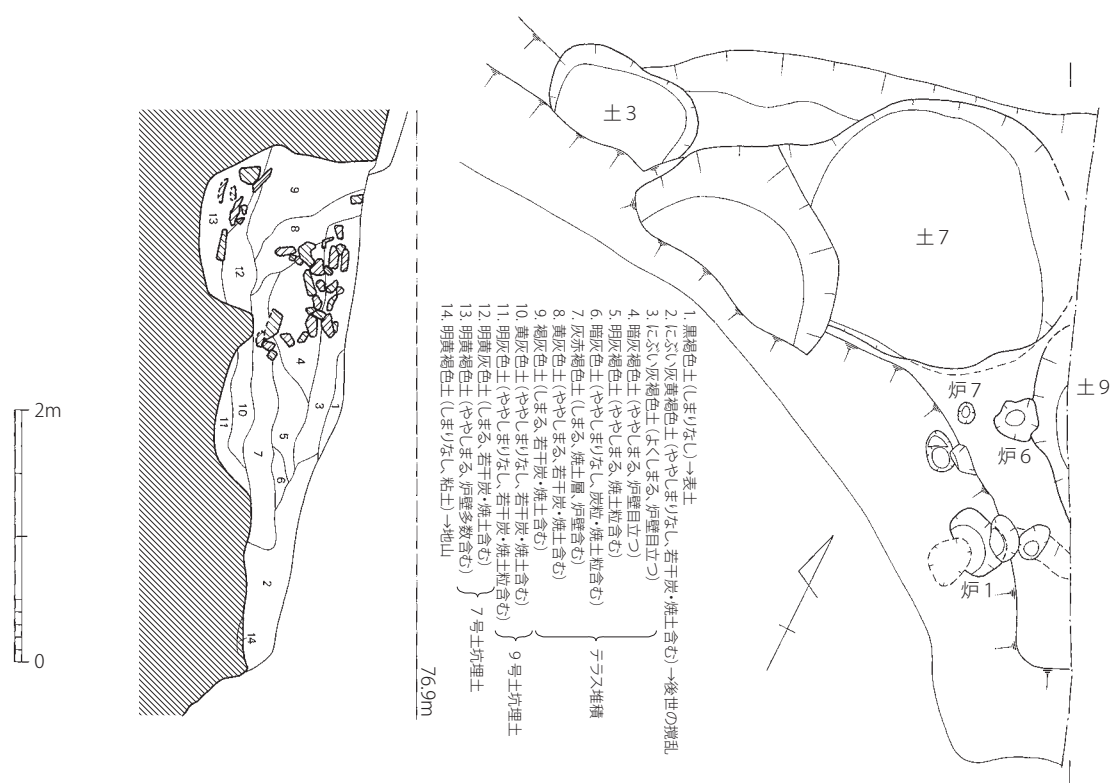
4は土師器杯の口縁部片である。小片であるため、口径復元に少し不安を残すが、緩やかに内湾しながら口縁端部へと開く形態をなす。内外とも少し磨滅している。5は土師器碗の口縁部小片である。内面は回転ナデ、外面はナデで仕上げる。外面の端部寄りには煤が付着している。

1号炉（第10図）

表土を掘削した段階で、後世の造成により削られた斜面に遺構の断面が露出していた。堆積状況の確認から、上下で異なる遺構であることが判明し、上位遺構を1-a号炉、下位遺構を1-b号炉として区別した。ともに被熱状況や規模などから炉跡と考えられ、両者の先後関係は遺構の切り合いから「1-b号炉→1-a号炉」の順である。

1-a号炉は、削平が激しく遺構形状を判断し難いが、復元径0.35 m程度の円形ないし楕円形を呈し、深さは0.24 mを測る。わずかであるが壁面の一部に被熱の痕跡が認められ、埋土下層には炭を多く含む層（2層）があり、埋土全体に鉄滓や焼土粒もみられた。このことから、鍛冶炉の基底部である可能性も考えたが、なお検討を要する。土器は出土していない。

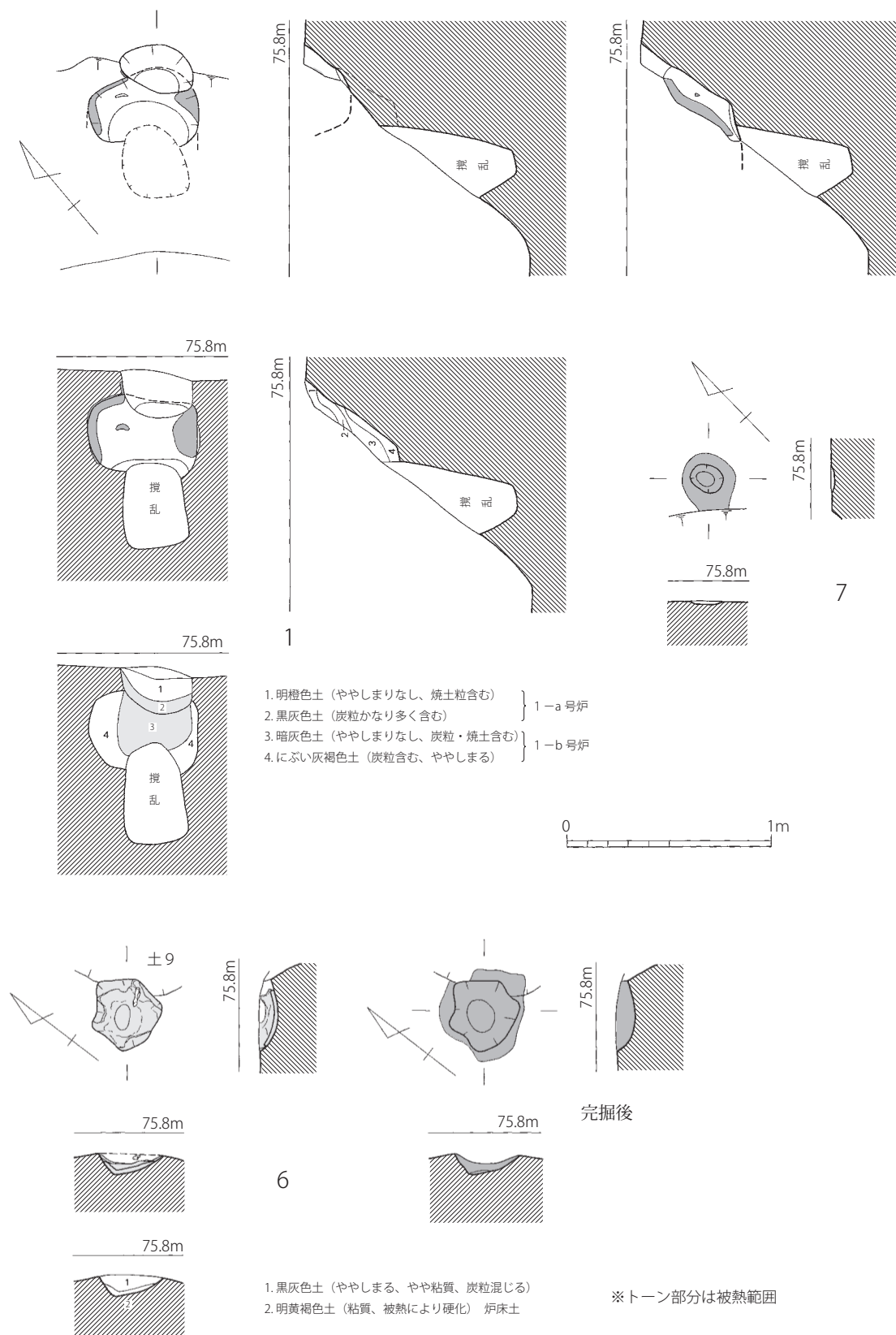
1-b号炉も遺存状況は良くないが、復元径0.54 m程度の円形ないし楕円形と推定され、深さは現状で0.42 mを測る。1-a号炉よりも壁面の被熱痕跡の範囲が広く、本来は全体が被熱していた可能性がある。やはり炭を多量に含む層（3層）が認められ、鍛冶炉の基底部である可能性を考えたが、検討を要する。少量の滓などが出土したが、土器は皆無である。



第9図 上段2号テラス実測図（1/30）

6号炉 (第10図)

テラス中央に位置し、長径 0.37 m×短径 0.32 m×深さ 0.07 mを測り、鍛冶炉と考えられる。



第 10 図 1・6・7 号炉実測図 (1/30)

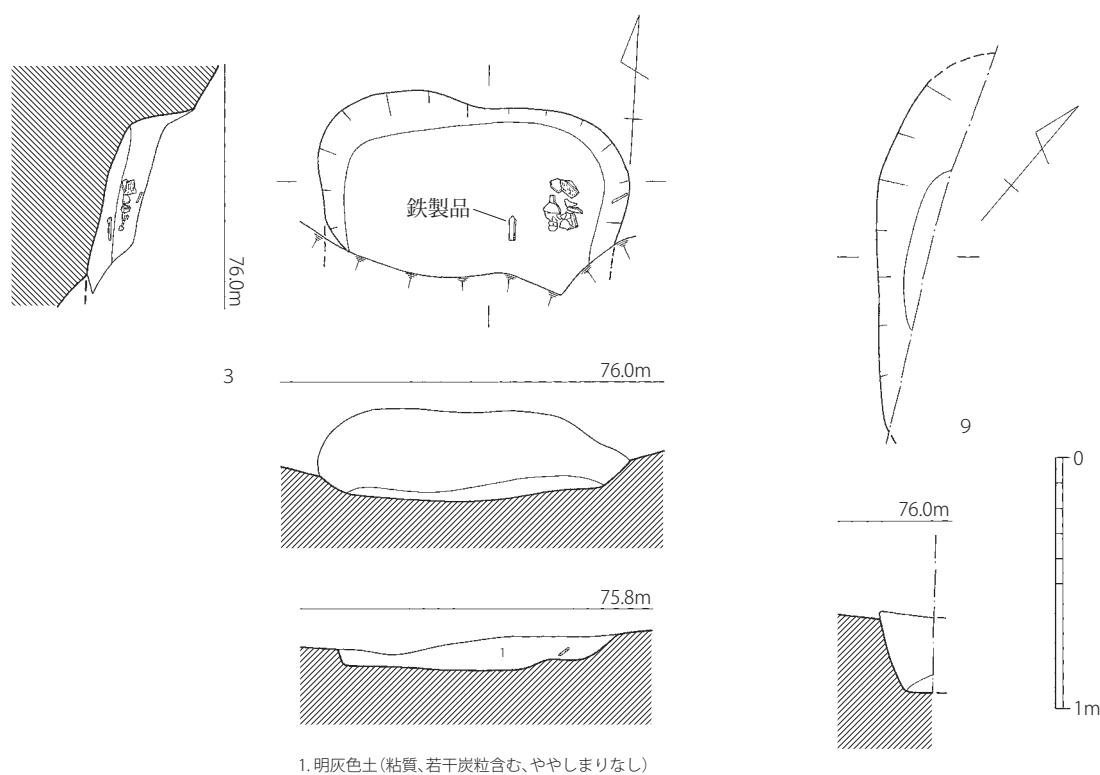
炭を多く含む黒灰色土を除去すると被熱により硬化している青灰色～黄灰色粘土が底部にみられた。これを除去すると直下で地山面となるが、底面は被熱により赤変しており、被熱範囲は遺構の外側にまで広がっている。こうした状況から鍛冶炉の基底部であると判断した。先述の青灰色粘土は炉床土と考えられ、本来その上に炭層が設けられていたものと考えられる。なお、遺構の東端を9号土坑に切られており、「6号炉→9号土坑」という先後関係が見出せる。土器の出土はない。

7号炉（第10図）

6号炉と同じくテラス中央付近に位置し、鍛冶炉と考えられる。削平が激しく、わずかに遺構の底部付近を残すのみで、径0.16 m×深さ0.02 m程度の浅い小円形を呈する。6号炉で説明したものと同一の青灰色粘土を遺構検出段階には確認していたが、作業員への指示の不手際で既に取り除かれていたため、遺構図には反映されていない。やはり被熱の痕跡が顕著で、底面のほか遺構の外側にまで赤変の範囲が広がる。復元される遺構の構造は6号炉と全く同じであろう。土器は出土していない。

3号土坑（第11図）

テラスの西端に位置し、現状で南北0.74 m以上×東西1.23 m×深さ0.35 mを測る。前面側が造成で削平されていることから南北長は倍以上にのびると予想される。2号テラス上は多量の滓や炉壁、焼土等が堆積しており、遺構の検出は容易ではなかったが、この3号土坑については表土除去後の段階から確認できた。埋土中からは炉壁片や鉄滓なども出土したが、東寄



第11図 3・9号土坑実測図 (1/30)

りの床面付近から土師器皿の破片が数点みつき、その傍らには南北に軸を向けた鉄製品が出土した。こうした状況から3号土坑は土壙墓と推定される。鉄製品については現在保存処理中であり、次年度刊行予定の続刊にて報告を行いたい。

なお、3号土坑は2号テラス上の堆積層を切り込んでおり、この堆積層下の7号土坑の一部を切っている。したがって、2号テラスの使用が終了するか、一定程度の堆積が進んだ段階で土壙墓が営まれたものと考えられる。

出土土器（第8図）

6は土師器皿である。全体的に低平なつくりで、底部は糸切り未調整で、板目痕がみられる。口縁部を回転ナデ、内底面はナデで仕上げる。7は土師器坏である。底部は糸切り未調整で、



第12図 7号土坑実測図(1/40)

口縁部は底部端から外上方へ直線的に開く。強い回転ナデによる調整のため、口縁部は少し波打つ。内面は工具による調整も行っているが、内底面は不定方向のナデで仕上げる。

7号土坑（第12図）

テラスの中央に位置し、現存長 3.4 m×幅 1.08 m×深さ 0.65 mを測る不整形な土坑である。テラスの斜面寄りに設けられ、一部調査区外まで広がるが、遺構形状からして東側への広がりとはそれほどではないと推測され、むしろ西側に大きく広がる可能性がある。西端は3号土坑に切られている。

埋土中には多量の炉壁や焼土がみられ、とくに炉壁は表裏関係なく折り重なって埋まっている状況であった。このため、当初は製鉄炉の可能性も考え、西端については「2号炉」として掘削を開始したが、多量の炉壁や焼土が存在する一方で、遺構壁面や底部に被熱を受けた痕跡が全くなく、炉とする根拠が乏しかった。その後、掘削を進めるうちに7号土坑と一連の遺構であることが判明し、「2号炉」は欠番とし7号土坑として調査を継続した。遺構埋土や遺物の堆積状況から、付近にあった炉を解体した際の廃材等を投棄した状況と推測されるが、不整形かつ壁面を挟り込む状況から採土遺構の可能性も考えられる。なお、埋土には若干の土器小片が含まれ、床面直上付近で瓦器碗の底部が出土している。

出土土器（第8図）

8は土師器坏の底部である。底部は糸切り未調整で、底端から大きく広がる口縁部を特徴とする。内外とも回転ナデで仕上げる。9は瓦器碗の底部である。内面は部分的にミガキの痕跡が確認できるが、外面は不明瞭である。底部は糸切り未調整である。土坑の床面に近い位置から出土している。

9号土坑（第11図）

調査区東壁からわずかに輪郭を覗かせる程度で、全体像は不明であるが、現存長 1.5 m×幅 0.2 m×深さ 0.3 mを測り、長楕円形を呈するものと考えられる。埋土中には炉壁片が含まれているが、被熱痕跡はみられない。なお、6号炉の一部を切っており、「9号土坑→6号炉」の先後関係が認められる。土器は出土していない。

iv. 3号テラス（第6図）

表土掘削当初は1号テラスと同一の平坦面をなすものとみられたが、全く異なる段を形成していることが判明したため、別遺構として分離した。現状で東西 7.0 m×南北 3.1 mの細長い平坦面をなし、前面は後世の開発に伴う段造成によって削平されており、南北幅は少なくとも 1 m程度は広がるとみられる。テラス上面は、後世の削平等により前面に向かって傾斜しており、現状ではテラスというより緩傾斜地にみえる。3号テラスでは、土坑3基、ピット数基を確認したが、出土遺物はそれほど多くはない。

出土土器（第8図）

10は土師器坏である。口縁部と底部の破片資料であったが、焼成・胎土あるいは復元される口径等から同一個体と判断できることから、一個体の図面としている。底部は糸切り未調整で、やや突出気味である。口縁部は底端から大きく内湾して立ち上がり、端部をわずかに肥厚

させる。11 は土師器碗の底部片である。高台はやや内側に傾く断面台形状を呈し、非常に低平である。底面は剥離により調整不明であるが、内外面にはミガキの痕跡が残る。

4号土坑（第13図）

テラスの中央から西寄りに位置し、東西 2.2 m×南北 1.15 m以上×深さ 0.15～0.2 mを測る。床面は他の遺構に比べて不整形である。部分的に炭を多く含む埋土が確認できたが、被熱の痕跡は確認できない。東側が5号土坑を切っており、「5号土坑→4号土坑」の先後関係が認められる。造成による削平が激しいこともあって性格は不明である。埋土中に若干の鉄滓類がみられたが、土器は出土していない。

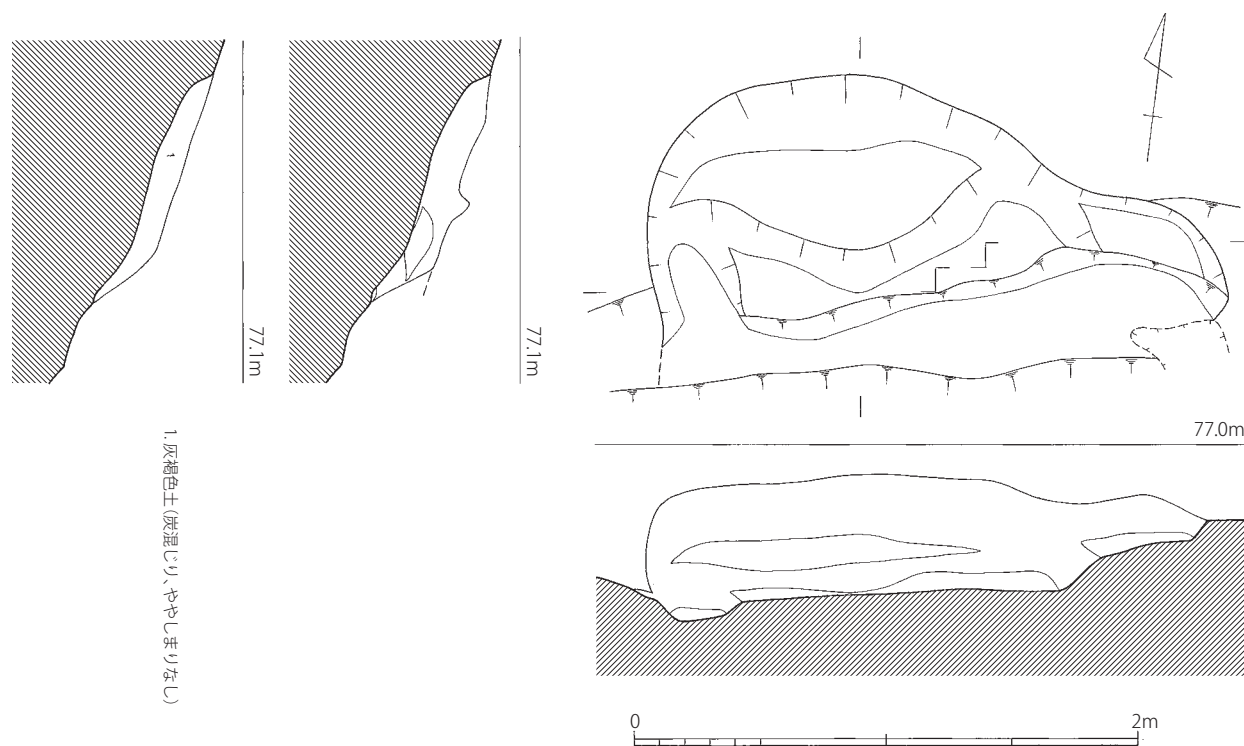
5号土坑（第14図）

テラスの東寄りに位置し、東西 2.8 m×南北 1.9 m以上×深さ 0.37 mを測り、長楕円形を呈する。埋土中に木炭や焼土を含む層があり、底面の北から東にかけて被熱による赤変部分が認められるが、硬化するほどではない。炉壁や鉄滓も少量出土しているが、床面から遊離しているため埋没時の混入と考えられる。

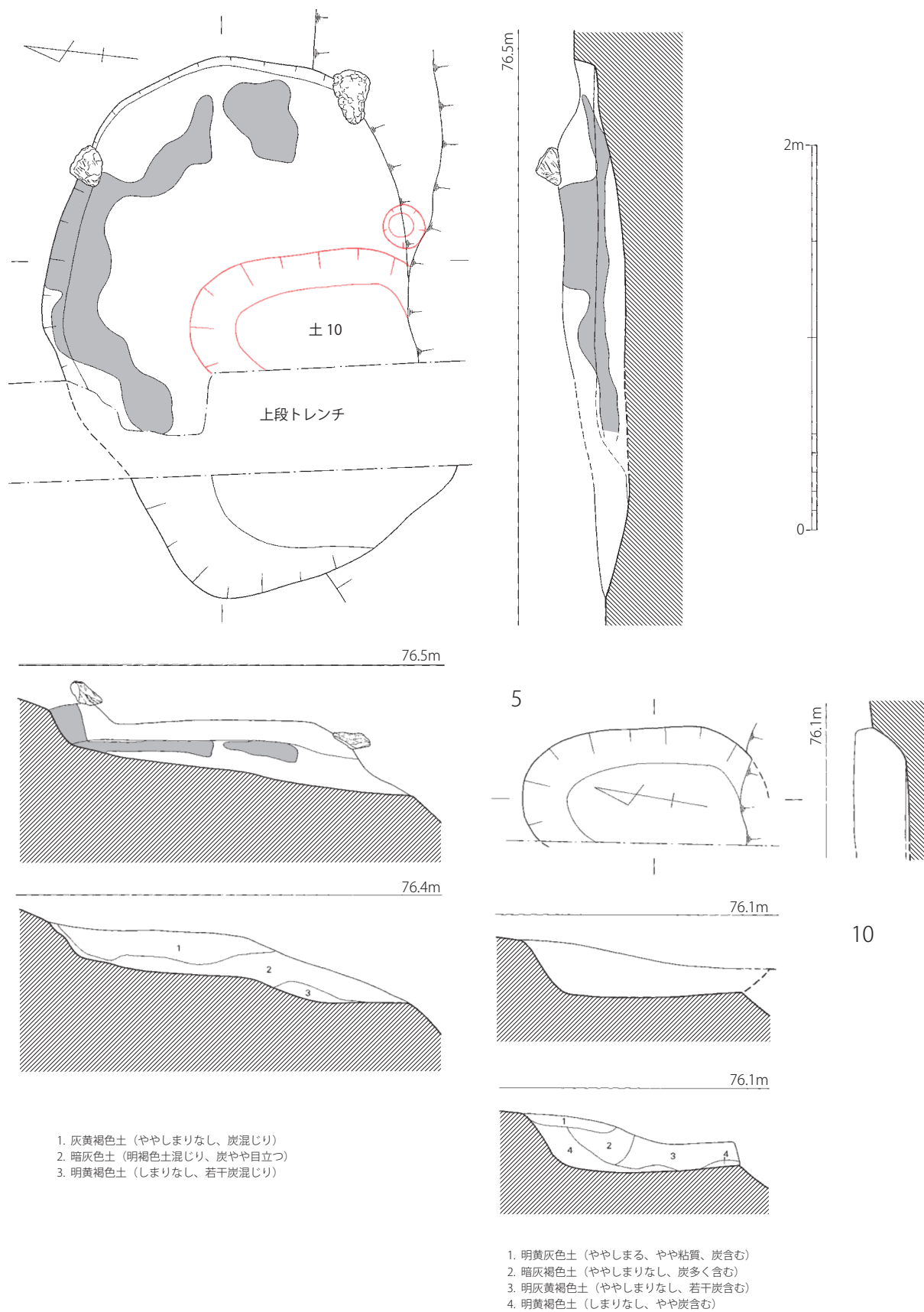
なお、下層に10号土坑があり、土層観察から5号土坑に先行することが判明し、西端を4号土坑に切られていることから「10号土坑→5号土坑→4号土坑」の先後関係が復元できる。

出土土器（第8図）

12 は土師器皿の底部で、口縁部を欠損する。底面は糸切り未調整で、内外とも回転ナデで整形し、内面はナデによる凹凸が顕著に残る。13 は土師器杯の口縁部片とみられる。内外とも回転ナデで整形し、口縁端部内面がわずかに肥厚する。14 は土師器碗の高台片で、高さ 1.5cm



第13図 4号土坑実測図 (1/30)

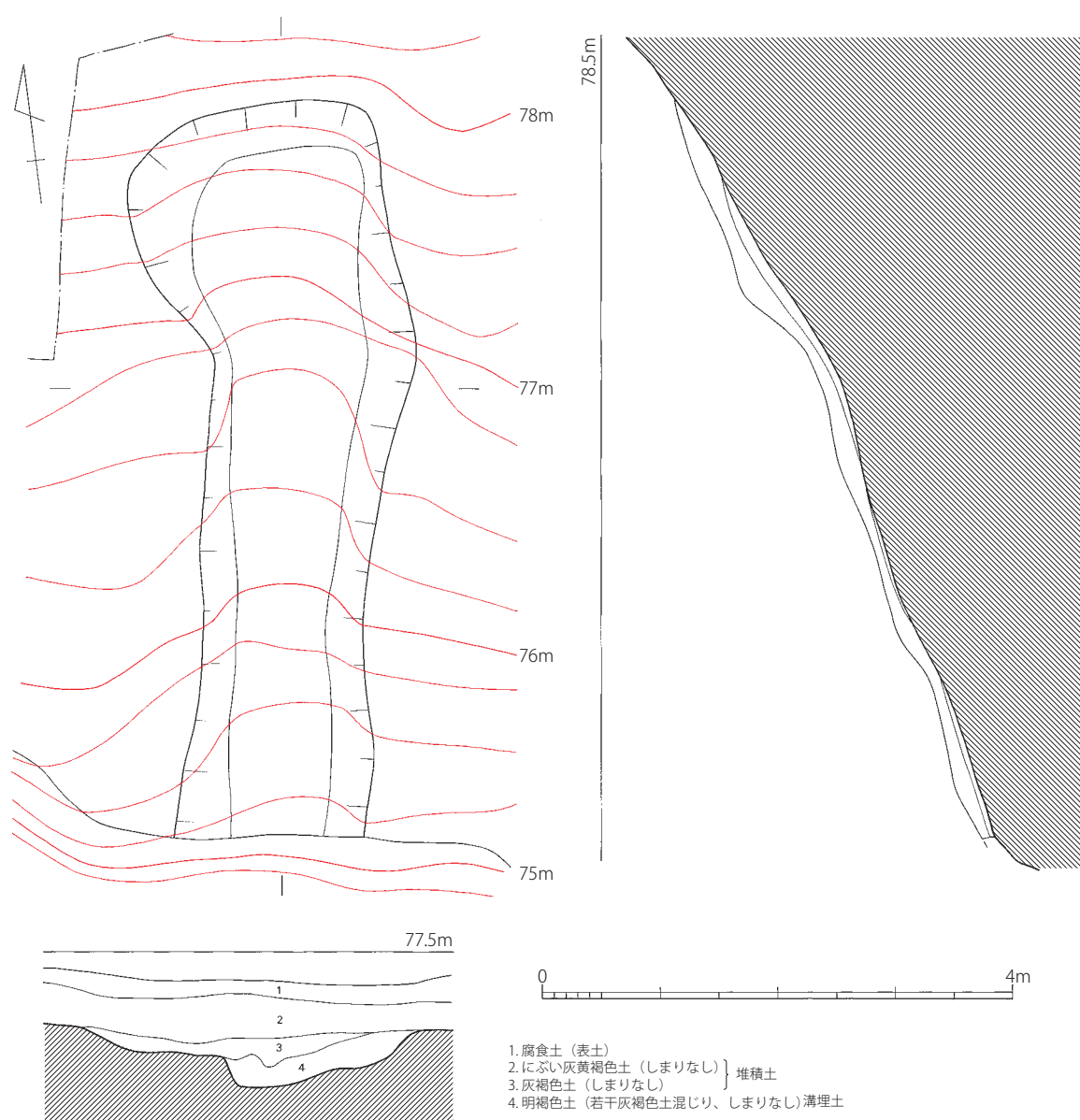


第 14 図 5・10 号土坑実測図 (1/30)

と比較的高めである。端部は少し丸みを帯びるが内接する四角形を呈する。

10号土坑（第14図）

5号土坑の下層で確認した土坑で、3号テラス中央付近に位置する。西側を上段トレンチ掘削時に削ってしまっているが、長径 1.18 m 以上×短径 0.64 m 以上×深さ 0.3 m の倒卵形を呈する。埋土には若干の炭粒がみられたが極めて少量で、遺構壁に被熱の痕跡もないことから、埋没段階あるいは埋め戻し段階における外部からの混入物であろう。なお、5号土坑の掘削時には遺構の存在が確認できず、土層観察からも5号土坑を切り込む痕跡がなかったことから、遺構の先後関係は「10号土坑→5号土坑」となる。



第15図 2号溝実測図 (1/60)

v. その他の遺構

2号溝（第15図）

当初上段のサブトレンチまでを調査区としていたが、表面に鉄滓が散見されたことから遺跡の広がりが西側に拡大することが予想された。そこで、人力掘削によって部分的に拡張を行ったところ、斜面と直行する方向で溝状の痕跡を検出し、2号溝の確認に至った。北側が調査区外に及ぶことから、さらに人力掘削を行い北端を確認した。

2号溝は、上段にある遺構の中では最も西側に位置し、前面は段造成により削平されているが、残存長6.2 m以上×幅1.4～2.2 m×深さ0.2 mを測る。掘り込みそのものは深くないが、斜面の傾斜に合わせて一定の角度で直線的に掘削されている。埋土の観察から流水等による堆積等は確認できない。埋土中にはわずかながら炉壁片や鉄滓なども含まれており、土器も若干出土している。

なお、この溝からさらに西側でもわずかに炉壁片などがみついているが、極めて希薄であり、遺跡自体の西限（あるいは上段遺構群の西限）はこの2号溝であると判断される。

出土土器（第8図）

15は土師器坏の底部である。底部は糸切り未調整で、内外とも回転ナデで整形する。口縁部は底端から低くのびはじめている。

（2）中段の遺構と出土土器

当初より造成による影響を想定していたが、特に西側の前面は1.2 mほどの地下げが行われ、軟弱な頁岩で形成される基盤層（岩盤）にまで達するほどの造成によって、旧地形を一切とどめていなかった。また、後背側も上段の前面がやはり基盤層が露出するまで削平されており、中段本来の奥行きは不明である。さらに中段の遺構面についても調査区東壁土層の観察から、後世に一定の削平を受けていることが明らかとなった。

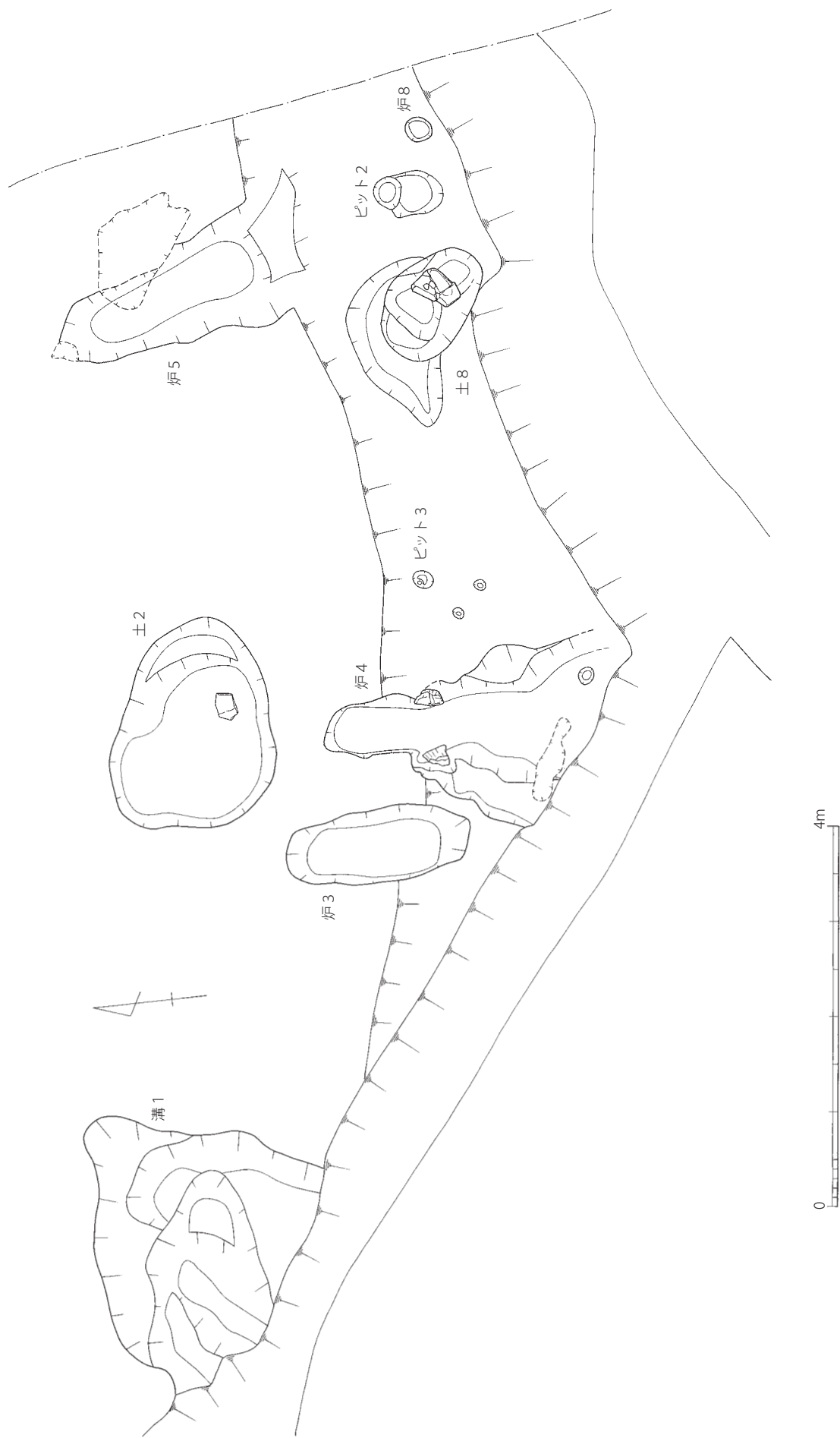
それでも、中段では製鉄炉3基、鍛冶炉1基、土坑1基、溝1条、ピット数基を発見し、当遺跡の中枢をなす遺構群を確認することができた（第16図）。以下、各遺構と出土土器について報告を行うことにする。

3号炉（第17図）

中段の中央部南端に位置し、主軸はほぼ南北にとり、長さ1.94 m・幅0.78 m・深さ0.37 mを測る。平面形は長楕円形で、断面形は船底状を呈する。両側面と北壁に被熱による赤変箇所が認められるが、被熱範囲は上半部に限定されている。被熱範囲の長さは約1.4 mである。埋土の大半に木炭を含むが、前述の上段の各遺構とは明らかに堆積状況が異なっており、上記の内容からも製鉄炉の可能性が高いと考える。炉の形式としては、規模等から竪型炉の可能性が高いと考えられる。

なお、遺構としては完結しているが、南側の地山面は若干であるが乱れている。そのため、南側についてはもう少し浅く広がる可能性があり、廃滓溝等が南向きに設けられていた可能性がある。また、炉壁や滓も出土しているが、いずれも内部に落ち込んでいる状況で、本来の位置を留めている資料はなかった。

さらに、3号炉の前面は後世の造成により大きく削りとられているため、流出溝等が存在し



第16図 中段実測図 (1/60)

ていたのか、谷部堆積のうちどの層が3号炉に関連するのかといった情報は得ることができなかった。

出土土器（第8図）

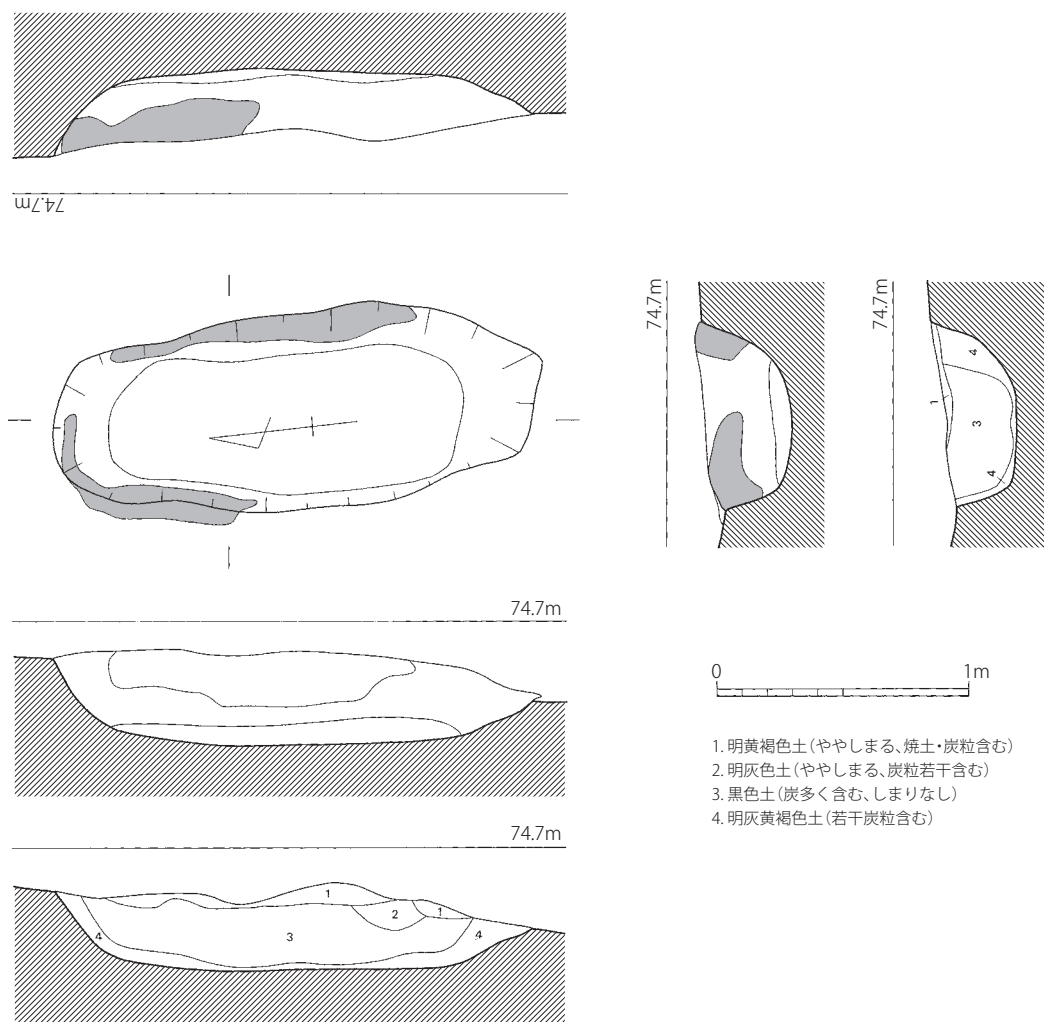
16は土師器皿の口縁部小片である。底部は糸切り未調整で、内外とも回転ナデで仕上げる。全体に磨滅気味である。17は土師器碗の口縁部小片とみられる。厚さはほぼ均一に仕上げられている。内外とも回転ナデによる。

4号炉（第18図）

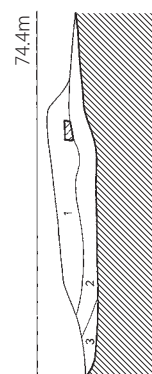
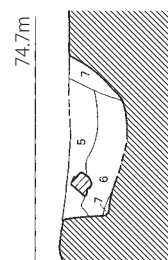
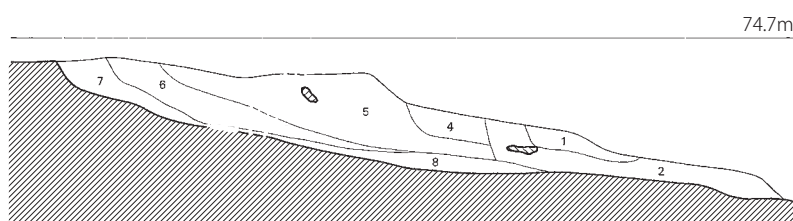
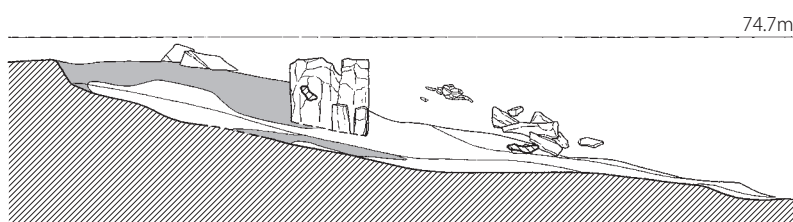
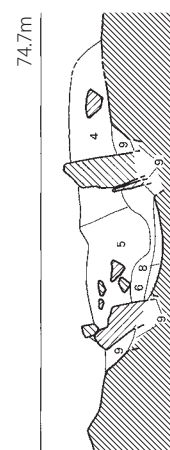
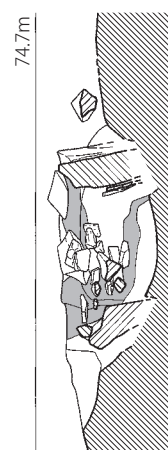
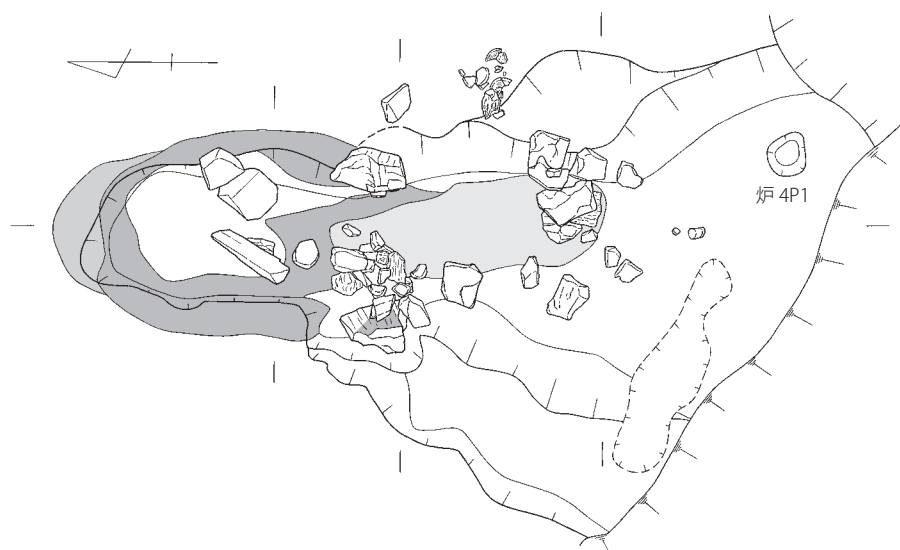
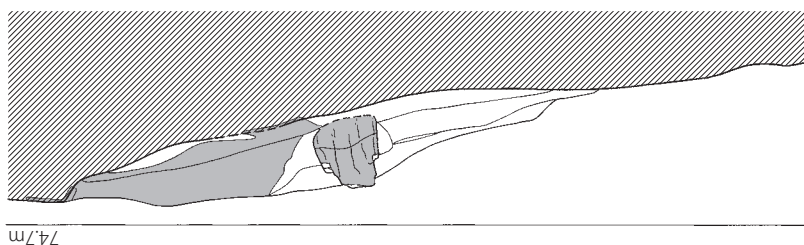
中段中央部の南端に位置し、3号炉と軸を揃えるように並ぶ。4号炉は今回発見した炉の中でも最も製鉄炉としての特徴を残す遺構で、明らかな竪型炉である。

炉門部には左右に石材を立ており、石材には付近で産出する良質な頁岩が用いられている。右門石は高さ0.3 m以上、幅0.3 m、厚さ0.15 m、左門石は高さ0.28 m以上、幅0.25 m、厚さ0.12 mを測り、土圧のためかいずれも向かって左に傾いている。左右の門石の間は0.42 mである。門石の奥側が炉内となり、炉内の規模は奥行き0.92 m、幅0.54 mを測るが、本来は炉壁や炉床土が存在するため、炉の内部はもう一回り狭くなるだろう。

炉床は手前側に向かって緩やかに傾斜しており、床面は炉内から炉外まで被熱により暗赤色



第17図 3号炉実測図(1/30)



1. 明灰褐色（ややしまる、炭粒含む）
2. 黒灰色土（きめ細かい、炭粒含む）
3. にぶい灰褐色土（ややしまりなし、焼土粒・炭粒含む）
4. 暗茶褐色土（ややしまる、鉄滓片目立つ）
5. 黒色土（しまりなし、炭・炉壁・鉄滓など若干含む）
6. 明褐色土（ややしまる、炉壁・鉄滓・焼土多く含む）
7. 明黄褐色土（ややしまりなし、炭粒含む、地山土由来）
8. 黒色土（ややしまる、上面が被熱により硬化）
9. 灰褐色土（ややしまる、粘質、若干炭粒含む）



第 18 図 4 号炉実測図（1/30）

を呈している。これとは別に炉門石を含めた壁が全体に被熱を受けて赤変しており、奥側はさらに外側が被熱により硬化し、黄白色を呈している箇所が認められる。この黄白色部分のみ硬化が顕著であることから、奥側に送風管が設置されてことを示す痕跡である可能性も考え得る。

4号炉の前面は谷部に向かって広がる形状をなし、中軸に沿った中央部分は一段深めに掘り下げられている。堆積状況の観察から炉内部の最終埋没層が前面にまで広がっており、周囲の埋没とともに炉内も最終的な埋没に至ったものと考えられる。谷への落ち際に近い場所には1基だけであるがピットを確認した。深さは0.06 m程度と浅いが、4号炉の東側でみつかった3基のピットを含めて、仮説的な覆い屋の支柱であった可能性も考えられる。ただ、規則的な配置ではない。

なお、炉に向かって右側には炉外において土師器皿が数点まとまって出土している。いずれも遺構面からは浮いており、谷部堆積層の24層に相当する位置にある。炉の操業時期とは直接の関係はないが、廃絶時期を考える上で興味深い出土状況を示す。第18図には炉内部に落ち込んだ滓類や炉壁、石材等を図示しているが、これ以外にも多数の炉壁等が堆積している状況であった。しかし、炉壁については本来の位置をとどめるものはなかった。

ところで、4号炉と3号炉については非常に近接した場所に営まれており、当然異なる時期に操業していたものと考えられる。ただ、直接的に遺構の切り合い関係がないため、先後関係については状況証拠から考えるほかに手立てがない。4号炉については上述のとおり炉の前面が裾広がりになっており、3号炉の前面にまで広がっているが、3号炉側からこれを改変するような掘り込みは確認できない。しかし、造成により削られた中段の土層をみると、3号炉を覆う土層堆積の状況からは3号炉側の堆積が4号炉側の堆積を切っている。以上から判断すると、4号炉が先行して営まれ、その廃絶後に3号炉が営まれた可能性があるといえる。

ちなみに、4号炉については遺構ごと切り取りを行っており、今後の資料としての活用に備えている。

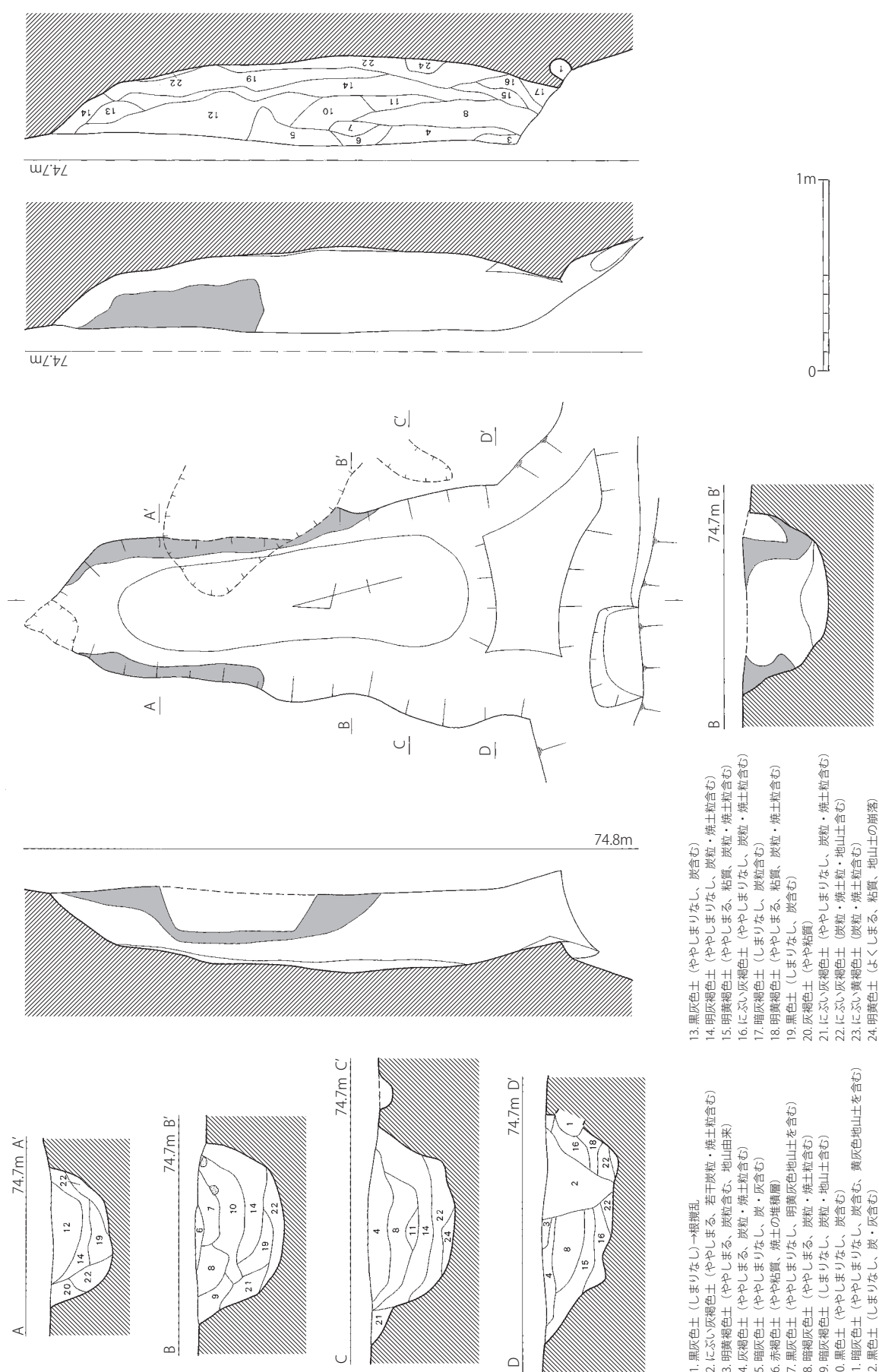
出土土器（第8図）

ここで挙げる土器は、4号炉のすぐ脇でまとまって出土したものであるが、層位的には4号炉の廃絶後の覆土に含まれ、谷部堆積層では24層に該当するものと考えている。したがって、直接的な4号炉との関連性は低いものと考えられるが、近接して出土した遺物で廃絶時期等を明らかにする上で重要な資料と考え、この項において報告する。

18～21は全て土師器皿である。18は概ね完形で、底部は糸切り未調整である。内面には回転ナデによる痕跡が明瞭に残る。19は非常に低平につくられており、底部はやや不鮮明ながら糸切り未調整である。内外とも回転ナデで仕上げる。20は4分の1ほど欠損する。底部は糸切り未調整で、口縁部は短く内湾して立ち上がる。21はおおよそ完形で、底部は糸切り未調整である。口縁部は比較的高めで、底端部から垂直気味に立ち上がる。

5号炉（第19図）

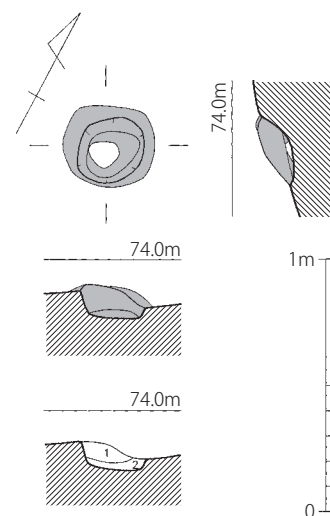
中段の東端に位置し、主軸はやや西に傾くが、遺跡のある斜面とは直交関係にある。中央東側を樹根により攪乱を受けており、北端部も同様に少し攪乱を受けている。全長は2.86 m、幅は北側（奥側）が0.72 m、南側（手前側）が1.2 m、深さは0.45 mを測る。平面形は徐々



第19図 5号炉実測図 (1/30)

に南側が広がる長楕円形に近いが、南側は斜面に開放されており、南側の入り口付近の床面は0.1 mほどの低いテラス状をなす。そのため遺構の中心部が最も深く、一度テラス状に高くなってから、再び谷部に向かって傾斜するようになる。埋土中には木炭を多く含む層も認められるが、遺構全体に広がる状況はなく、廃絶後の埋没によるものと考えられる。遺構の中央から北側にかけての側面には被熱により赤変部分が確認できる。被熱範囲は3・4号炉と同様に下半部には及ばず、上半部に限定され、被熱範囲だけの長さは1.64 mを測る。発掘状況から南に流出孔を有する竪型炉の可能性が考えられる。3号炉と同様に内部に炉壁も確認できたが、いずれも遺構から遊離しており、本来の位置を留めたものではない。

なお、谷部の掘削を急いだために、谷部の堆積土と5号炉の堆積土との関係を確認するための土層帯を残せなかったため、両者の関係については不明といわざるを得ない。ただ、中段の遺構面での確認の際には5号炉内部の堆積と谷部の堆積とは分離し得たことから、5号炉の廃絶後に谷部の堆積がはじまったものと考えられる。そのため、谷部斜面側の最上層に位置する24・25層などは5号炉の廃絶後の堆積層である可能性もある。しかし、この点についてもあくまで調査状況からの判断であり、確実性については少し不安が残る。次年度報告を行う製鉄関連遺物等を含めて検討課題としたい。



1. 明灰色土(粘質、ややしまる)
2. 黒色土(やや粘質、よくしまる、若干炭粒含む)

第20図 8号炉実測図
(1/30)

8号炉 (第20図)

8号土坑と同じく5号炉の前面の斜面地に位置する。調査時には「ピット1」として調査したが、遺構の性格が後述する内容から鍛冶炉と考えられるため、本書では「8号炉」に名称を変更して報告する。長径0.29 m、短径0.25 m、深さ0.13 mを測り、平面楕円形を呈する。床面中央部を除いて周囲の壁からその外側まで被熱により赤変している。埋土の下層には炭粒を含む黒色粘質土がみられ、炉床土の可能性も考えられる。

2号土坑 (第21図)

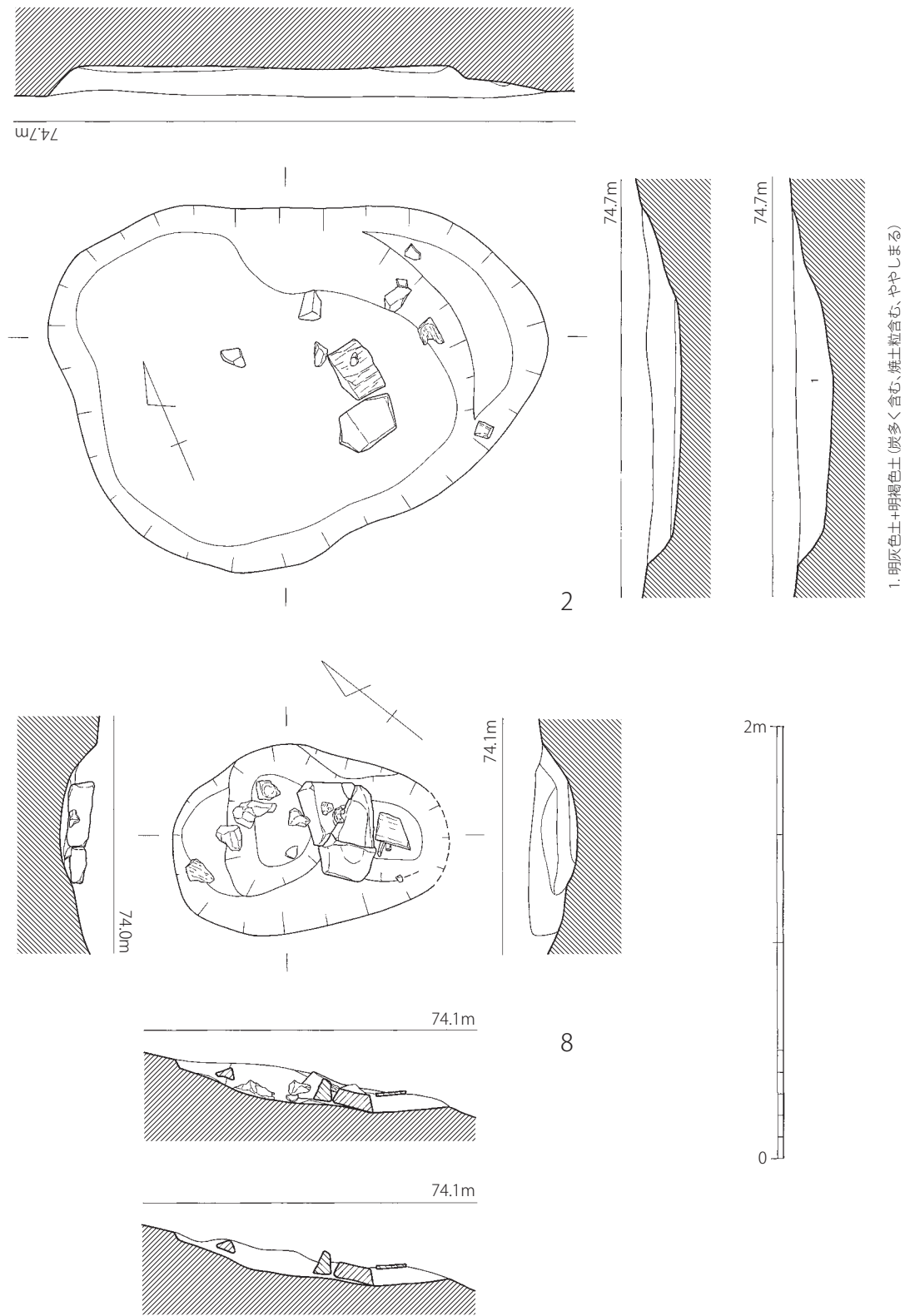
3・4号炉の背面側に位置し、長径2.2 m、短径1.75 m、深さ0.17 mを測り、平面は不整形な倒卵形を呈する。滓類や炉壁片なども出土しているが少量であり、遺構の床面などに被熱の痕跡は確認できない。中央付近から幾つかの石材が出土しており、二石ある大型石材のうちの南側の一石は上面が少し窪んでおり、表面も平滑になっており、何らかの使用痕跡を示すものと考えられる。この石材については次年度の続刊において報告を行いたい。なお、周囲の地山が白色を呈する層まで削平を受けていることを考えると、本来の遺構の深さは少なくとも0.3 m以上であったと考えられる。

出土土器 (第8図)

22は土師器碗の底部片である。高台は接合面で剥離しており、全体的に磨滅している。底部の調整は不明瞭ながら、ナデで仕上げている。

8号土坑（第21図）

5号炉前面に広がる狭い傾斜地に営まれている。長径 1.28 m、短径 0.86 m、深さ 0.16 m を測り、平面は倒卵形を呈する。床面は中央部が若干窪む。埋土には滓類や炉壁片も混じるが、



第21図 2・8号土坑実測図 (1/30)

基本的には埋没段階での混入であろう。むしろ土坑の南寄りの床面にある花崗岩の存在が注意される。この花崗岩は、長軸 0.46 m、短軸 0.36 m、厚さ 0.1 m 程度の大きさで、現状では三分割になっているが一石である。上面の中央部が緩やかに窪み、この位置に滓が付着しているが台石等の機能が想定される。石材の詳細については続刊にて報告を行う。

出土土器（第 8 図）

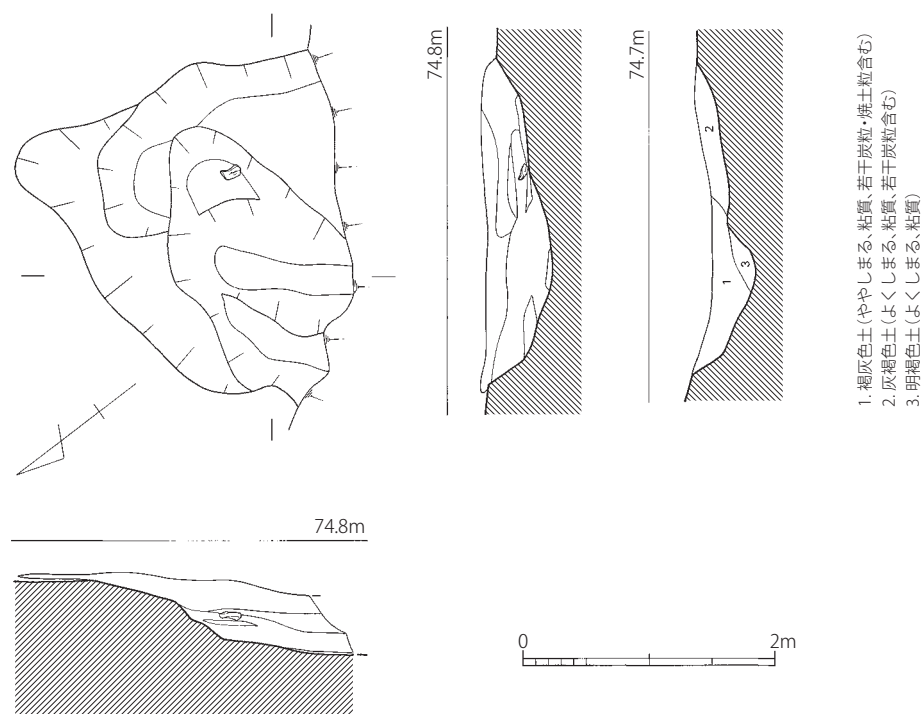
23 は土師器碗の口縁部片である。内外とも回転ナデで成形するが、とくに外面はナデによる痕跡が明瞭に残る。

1 号溝（第 22 図）

中段の西端に位置し、西側は後世の造成時に大きく削りとられ、造成の崖面に遺構の断面が露出している状況であった。先に報告した 2 号溝にくらべると非常に不整形で、床面は多くの段構造になっている。ただ、遺構全体としてみた場合には一連の溝状を呈することから、「溝」として報告する。

前面での幅は 2.7 m、奥行きは 2.6 m を測り、北東から南西に向かって段を下るように深くなっていく。埋土は粘質土が主体で、砂質土などがみられないことから、流水等に起因する堆積層ではない。北東側の遺構検出面は黄白色～灰白色を呈する地山土で、北 1.5 m ほどにある 3 号テラスの状況から、遺構の上部は大きく削平されてしまっていることが窺え、本来はさらに 0.5 m 以上深かった可能性が考えられる。

なお、今回は遺構の形態から溝として報告したが、底面が不整形ながら階段状を呈することから、中段部に入るための通路としての機能があった可能性も否定できない。遺構の性格については、なお検討の余地がある。



第 22 図 1 号溝実測図 (1/60)

3号ピット（第16図）

特段目立った遺構ではないが、遺物の出土もあったので報告しておく。4号炉の東側に位置するピット群のうちの、最も東側に位置する。長径0.2m、短径0.15m、深さ0.18mを測る。遺構の性格は不明であるが、4号炉前面でみつかったピット（P1）を含めて何らかの覆い屋等に関連する可能性も否定できない。

出土遺物（第8図）

24は土師器坏の小片である。全体に磨滅気味であるが、わずかに残る底部には糸切り痕が残る。内外とも回転ナデで整形する。

（3）下段・谷部の遺構と出土土器（第25・29図）

下段は西側から調査を進めたため、既に後世の造成が激しく遺構は失われていると考えていた。ところが、表土と覆土を除去すると、調査区南側は造成面よりもさらに下位にまで堆積層が残っていることが判明した。この堆積層の深さを確認するために、「下段トレンチ」を調査区西端に設定し、深い場所で1m以上の堆積が存在することを確認した。堆積層は鉄滓や炉壁などが多量に含まれていたが、大きな単位での分層が可能で、谷部全体を層位的に掘り下げていく方法が適用できると判断した。

そこで、改めて中段から下段を貫く「横断トレンチ」を設定し、谷部全体の堆積状況を把握し、このトレンチでの分層をもとに層位的・面的に掘削を実施した。

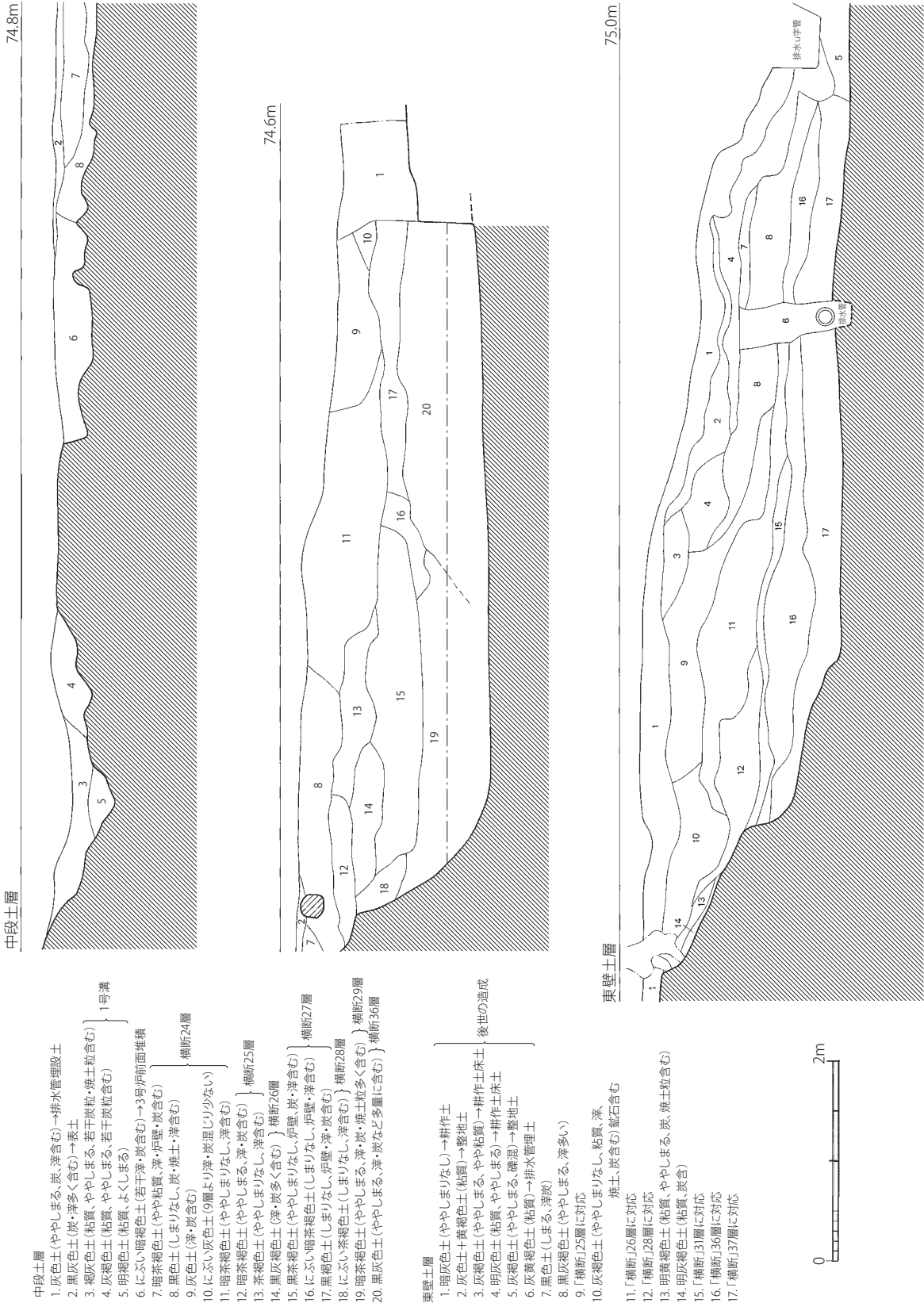
下段で確認した堆積層は、中段に存在する製鉄炉から生じた排滓・廃材で「排滓場」を形成しているものと考えられるが、今回調査した3基の炉だけで生じた遺物量とは到底考えられず、既に削平を受けている中段部分あるいは調査区外にも炉が存在するものと想定される。堆積状況については以下のように整理される。

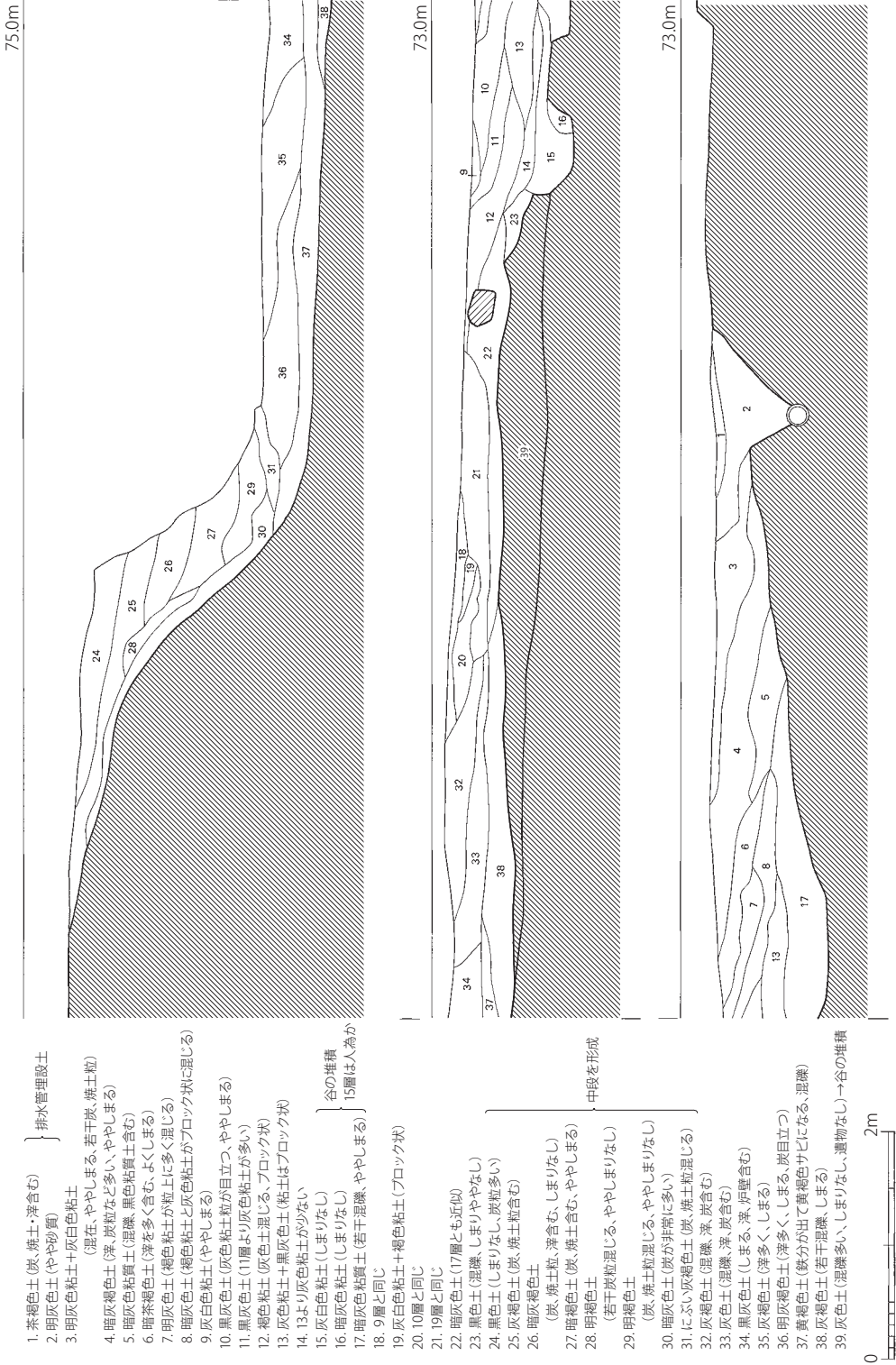
1・2層については現代における耕作地の造成に伴って埋設された配水管の設置による攪乱で、配管は調査区東壁の土層の観察でも谷部堆積層を全て掘り込んで設置したことが窺える。3～17層については滓類の堆積層や、地山に由来するとみられる粘質土を主体とする層が混在している。とくに粘質土を含む層は遺構のある北側の堆積層には確認できず、新たな造成に伴う整地層と考えられる。とくに中段の西側は段造成によって遺構面も含めて大きく削り取られており、本来の堆積層とともに谷部へと押し出され整地に利用されたものと考えられる。なお、遺跡全体を通じて近世・近代の遺物は皆無であり、整地については戦後になってから行われたものと推測される。このことは、調査前の中段にあった植林がいずれも30～40年程度と若く、地権者からもこれに類した情報が得られたことから、間違いのないであろう。このように3～17層については遺跡の形成当初の状況を保っている可能性は低いと考えられるが、新しい時期の遺物を全く含まず、後世の造成としての物証を得るには至っていない。そのため、今後の検証に備えて出土土器については層位に基づく報告を行っておく。

また、18～21層については比較的面的な広がり限定され、土層からも部分的な掘り込みであることから何らかの攪乱層と考えられる。

22・23層は粘質土の混じりがほとんどなく、本来の廃滓場としての堆積状況を保っている可能性がある。

24～38層については、基本的に炉壁や滓類と主体とした堆積層で、包含される木炭や鉄





第 24 図 横断トレンチ土層実測図 (1/60)

分の量比によって層ごとに色調が少しずつ異なり、ある程度の分層が可能であった。また、この間の層については地山由来の粘質土をほとんど含まないことから、廃滓場としての堆積であったものと理解される。段造成の際に谷側の堆積層を大きく削り取られているために、厳密には24～27層までの堆積と32～35層の堆積については先後関係が不明で、本来継続した層が含まれる可能性もある。しかし、全体の堆積状況の観察からは同一層としての根拠を見出せる層はなく、現地では山側に堆積している24～27層が新しいと判断した。したがって、調査時には1層を最終堆積層とみなし、概ね層位名称に付した数字が大きくなる順に古くなるよう設定している。この点は、一部を除き基本的に後述する出土土器の様相とも大きな齟齬はないと考える。なお、37・38層については谷底に近いこともあって、水分を多く含み、ミネラル分の析出により堆積層そのものが黄橙～褐色を呈している。

38層の下位には黄白色～白色の砂が混じる灰色混礫土(39層)が広がり、本来の川岸を形成している。また、谷部中央付近には堆積層下に上端幅4.4～10.0mの流路があり、現在はさらに南側に水路が設けられているが、本来はもう少し北側に川筋があったものと考えられる。流路は少し蛇行しており、常に水が染み出してくることから、現在の水路を流れる水量も含めれば、常時一定の流水があったものと推測できる。河床の傾斜は約5～6°である。ちなみに、3～21層までを後世の造成に伴う層と判断すれば、基本的には廃滓場としての利用は流路から北側におおよそ限定されていたことになり、当時の空間利用の一面を窺い知ることができる。

なお、下段西側の削平された平坦地についても検出作業を実施したが、後世の攪乱と断続的な滞水等による変色箇所を確認しただけで、遺構も遺物も皆無であったことから排土置き場として利用した。ちなみに、造成によって頁岩の岩盤が露出していたが、発掘道具で容易に削りとれるほど軟弱であった。

出土土器

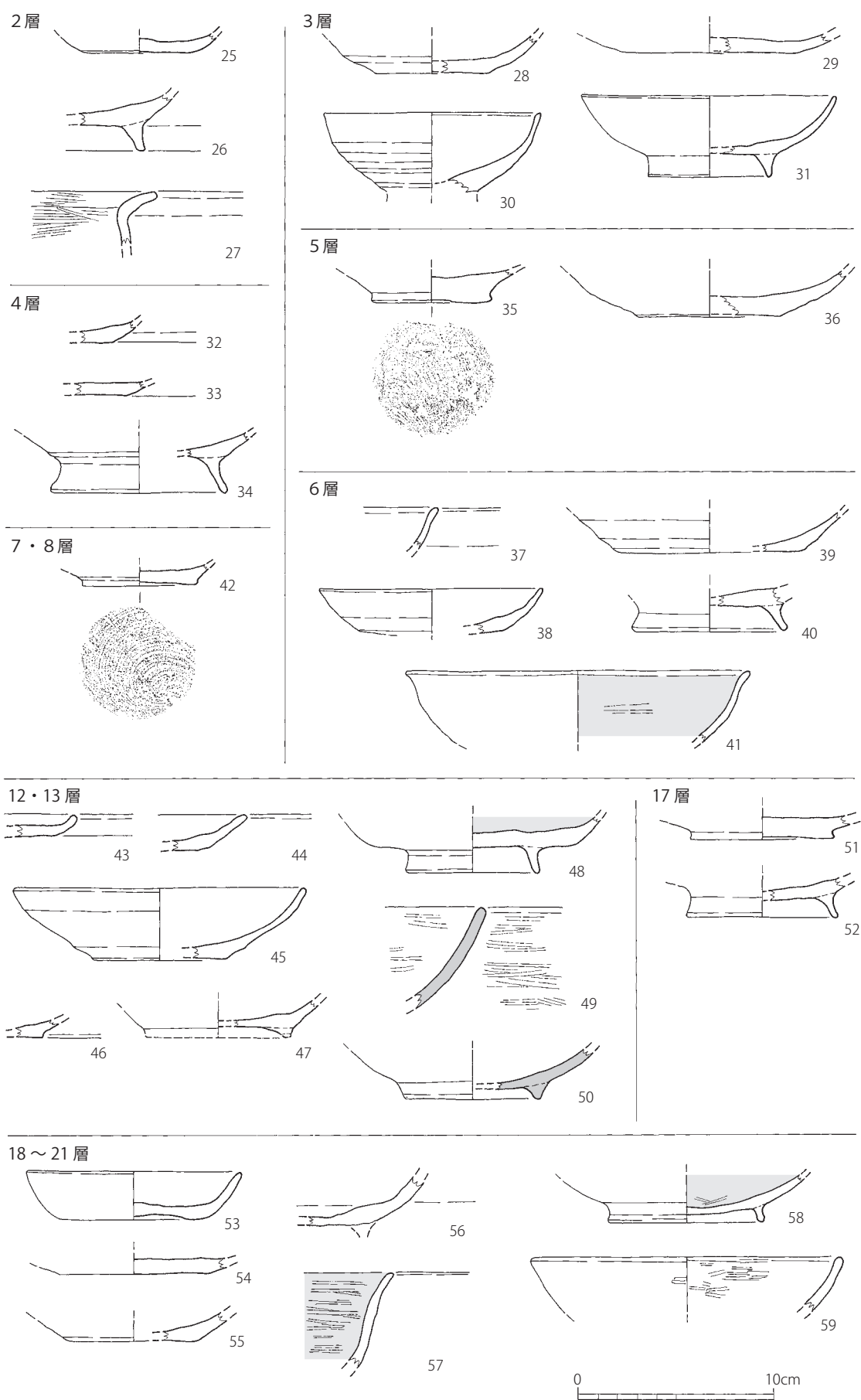
谷部の調査では総重量10tを超える鉄滓・炉壁等が出土した。それら製鉄関連遺物については、続刊にて正式報告を行う予定で、ここでは土器類のみを報告する。また、報告に際しては調査段階に設定した層序に基づき、上層から下層へ、新しい堆積層から古い堆積層へという順序で行うこととする。なお、1～21層については前述のように後世の攪乱や整地層の可能性があるが、ここでは層位に基づく遺物提示を行い、将来的な検証への利便性を図りたい。

2層出土土器（第25図）

25は土師器皿の底部である。底部は糸切り未調整で、口縁部は緩く内湾しながら立ち上がる。26は土師器碗の底部小片である。高さ1.3cmほどの比較的高めの高台を有する。底部の調整は不明瞭であるが、高台が剥離した部分の観察からヘラ切り未調整の可能性がある。27は土師器甕の口縁部片である。全体的に比較的薄いつくりで、口縁部はほぼ垂直の体部から強く曲げられる。内面には粗いハケ調整を行う。

3層出土土器（第25図）

28・29は土師器坏である。28は底部糸切り未調整で、口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる。29は底部糸切り未調整であるが、29と異なり口縁部が低平に広がる形態をなす。内底面は中央部のみ不定方向のナデで仕上げる。



第25図 谷部出土土器実測図① (1/3)

30・31は土師器碗である。30は口径11.2cmの小型品で、高台は接合面で剥離している。内外とも回転ナデで整形する。31は内外とも磨滅しており、調整は不明瞭である。ただし、底部はヘラ切り未調整の可能性がある。外面に黒斑がみられる。

4層出土土器（第25図）

32は土師器坏底部片である。底部は糸切り未調整で、内外とも回転ナデで仕上げる。33も土師器坏の底部片であるが、内面にはヨコナデ後に粗いミガキを施している。底部は糸切り未調整である。34は土師器碗の底部で、高さ1.8cmの高台を有する。底部調整は残存部位が少なく不明である。

5層出土土器（第25図）

35・36は土師器坏の底部である。35は底部糸切り未調整で、切り離し時に粘土柱を多めに切り取っていることから、突出した底部となる。胎土は粗い。36は底部糸切り未調整であるが、突出はしない。口縁部は大きな弧を描き緩やかに立ち上がる。胎土は精良である。

6層出土土器（第25図）

37～39は土師器坏である。37は口縁部小片で、厚さは均一で端部が少し外反する。胎土・焼成等から39と同一個体の可能性もあるが、確証がない。38は口径11.4cm・残存高2.3cmを測り、小型の坏であろう。底部はヘラ切り未調整である。39は底部片で、底面は糸切り未調整で、内外とも回転ナデによる調整である。口縁部は底端から比較的角度を持って立ち上がる。

40は土師器碗である。高さ1.4cmほどの高台を有し、端部が若干外反するため端部は内接する。剥離や磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、底面はナデ調整の前にヘラ切りを行っている可能性がある。

41は黒色土器碗のA類（内黒）である。内面は黒色を呈し、横方向のミガキの痕跡がわずかに確認できる。外面はやや磨滅しているため、ミガキの痕跡は不明である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部付近で外反する。

7・8層出土土器（第25図）

42は土師器坏の底部である。底部は糸切り未調整で、口縁部は底部端から若干高めの位置に取り付くため、突出気味の底部をなす。内面は全体に回転ナデで調整する。

12・13層出土土器（第25図）

43は土師器皿の小片である。底部は糸切り未調整で、口縁部は内湾しながら短く立ち上がる。口縁部は回転ナデ、内底面はナデによる調整である。

44～46は土師器坏である。44は小片ながら小型の坏とみられる。底部はヘラ切り未調整で、板目痕が少しみられる。口縁部は直線的に外上方へのびる。45は全体が復元できる破片である。底部は糸切り未調整で、口縁部は大きくひろがりながら立ち上がり、端部付近は回転ナデの際に少し強めに内湾させている。46は底部小片である。底部は糸切り未調整で、内面に工具による回転調整が行われカキメ状の痕跡が残る。

47 は土師器碗の底部である。高台は外側に偏る断面台形状を呈する。底部はナデにより平滑になっているが、高台剥離面に糸切り痕が残っている。

48 は黒色土器碗の A 類である。内面は黒色を呈し、ごく一部であるが粗いミガキの痕跡が認められる。底部の調整は不鮮明であるが、ヘラ切り未調整と考えられる。高台は細く高くのびている。

49・50 は瓦器碗である。49 は口縁部片で、内外とも横方向のミガキが認められ、外面下半はハケ状工具による調整痕が残る。重ね焼きの痕跡が残る。50 は底部片で、内外とも磨滅が著しい。高台はやや高めの逆台形状を呈し、端部は若干丸みを帯びる。底部の調整は不明である。

17 層出土土器（第 25 図）

51 は土師器杯の底部片である。底部は糸切り未調整で、口縁部との接点から 4 mm ほど突出する。内外とも回転ナデで仕上げる。

52 は土師器碗の底部片である。内外とも磨滅しており、底部の調整は不明である。高台は細めで、端部は丸みを帯びる。

18～21 層出土土器（第 25 図）

53～55 は土師器杯である。53 は 2 分の 1 ほどが残っており、全形が復元できる。底部はヘラ切り未調整で、内外とも回転ナデ、内底面はナデによる調整である。54 は底部小片である。底部は糸切り未調整で、口縁部は低平に広がるようである。55 も底部片であるが、口縁部はある程度の角度を保ってのびる。全体に磨滅気味で調整は不鮮明であるが、底部は糸切り未調整である。

56 は土師器碗の小片である。高台は接合面で剥離しているが、比較的高めであったと推測される。底面は糸切り未調整で、板目痕が残る。内外とも磨滅が著しい。

57・58 は黒色土器碗の A 類である。57 は内面に横方向のミガキが確認できるが、外面は磨滅のため調整は不明瞭である。口縁端部付近を外反させる。58 は底部片で、内面にわずかながらミガキの痕跡が窺える。底部調整は不明瞭であるが、板目の圧痕が残る。高台はまだ高さを残しているが、細く端部付近が若干丸く肥厚する。

59 は瓦器碗の口縁部片である。内外にわずかに横方向のミガキが認められる。厚さはほとんど均一で、緩やかに内湾する。

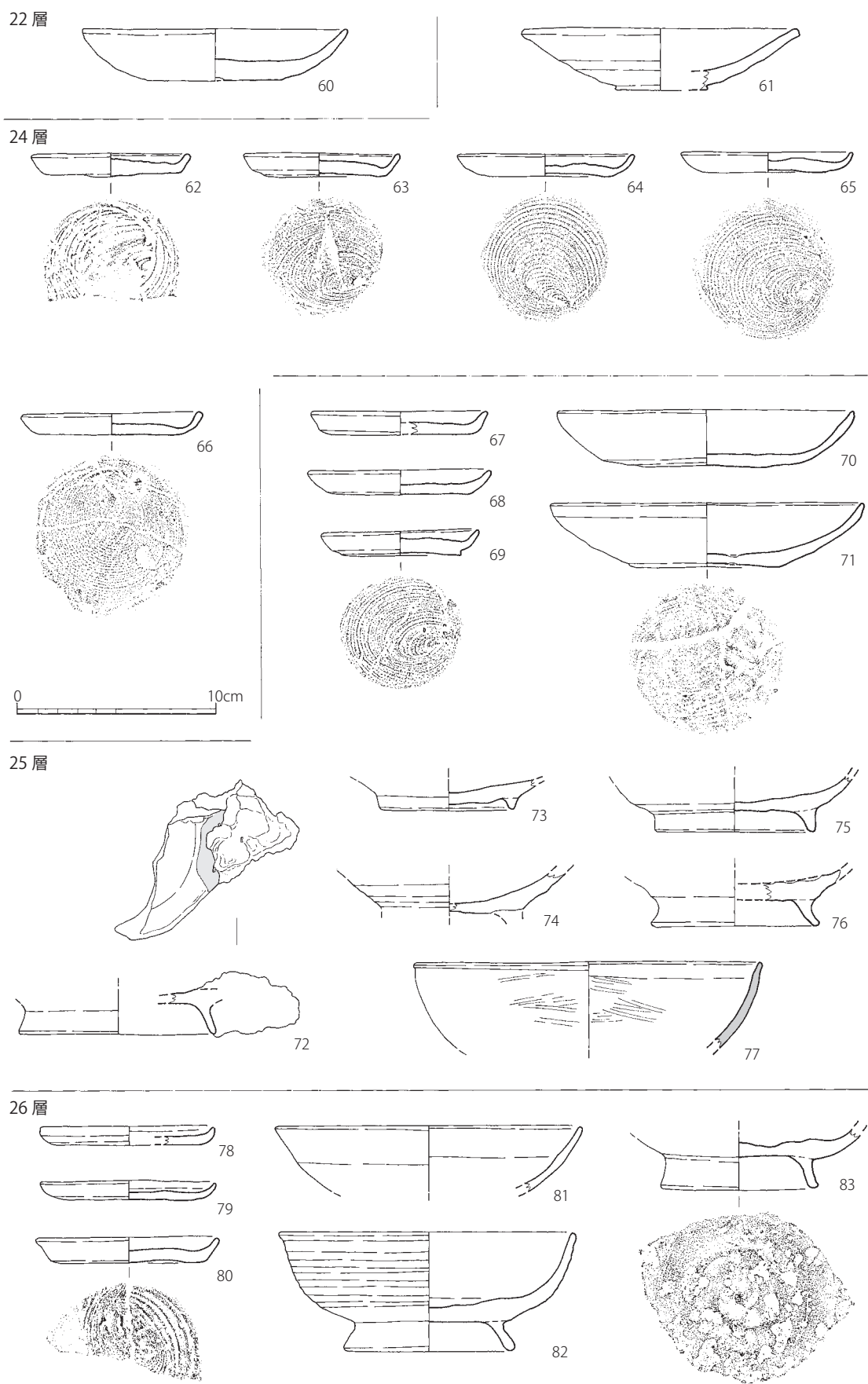
22 層出土土器（第 26 図）

60 は土師器杯である。全体的に磨滅しており調整は不明瞭ながら、底部は糸切りの痕跡をわずかに認めることができる。内外とも回転ナデ、内底面は不定方向のナデで仕上げる。

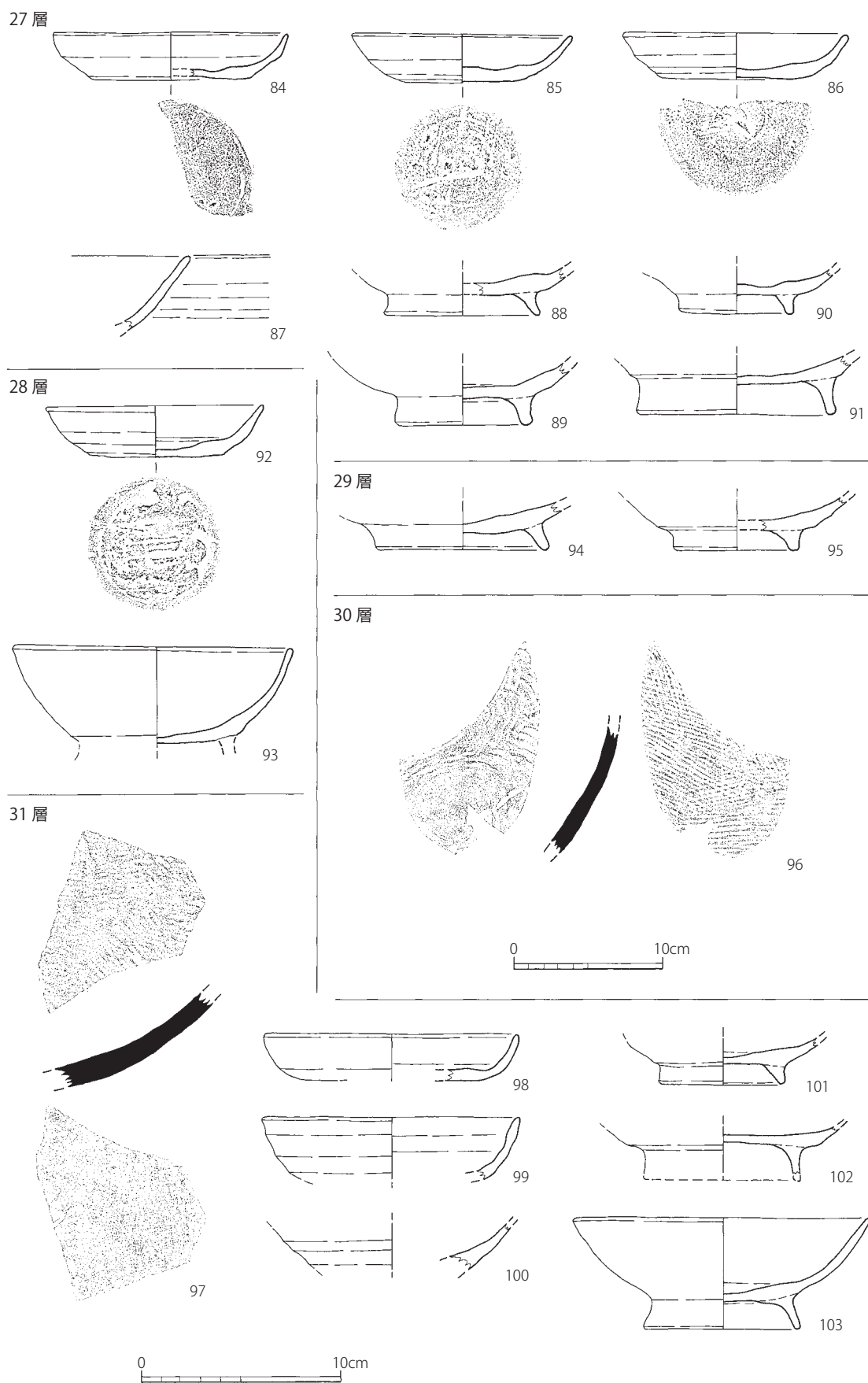
24 層出土土器（第 26 図）

61 は土師器杯である。底部はほとんど残っていないが、糸切り未調整である。内外とも回転ナデによる調整で、口縁部は強いナデによる凹凸が少しみられ、底端から直線的にのびる。口縁端部は丸みを持ちつつも、方形を呈する。復元径に少し不安を残す。

62～66 は土師器皿で、全て底部は糸切り未調整である。62 は径が小さい割には底部の厚み



第 26 図 谷部出土土器実測図② (1/3)



第 27 図 谷部出土土器実測図③ (1/3・96 は 1/4)

があり、口縁部は短く急角度に立ち上がる。内外とも少し煤けている。63は底面が少しへこみ気味で、口縁部は比較的短く立ち上がる。底面には板目痕がみられる。64は径に対する器高が小さいためか低平な印象を受ける。全体に薄手で、内面は回転ナデによる凹凸が顕著に残り、口縁部は短く内湾しながら立ち上がる。65も口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。66は腰部が最も薄いため、口縁部が肥厚したような形態をなす。ただし、回転ナデ調整はそれほど強くないためか、全体に平滑に仕上がっている。

25 層出土土器（第 26 図）

67～69は土師器皿で、全て底部は糸切り未調整である。67は3分の1ほどの小片で、口縁部は直線的に短く立ち上がる。68は全体に磨滅気味であるが、底部は糸切り痕の後から板目痕が付いている。口縁部はごくわずかであるが内湾気味である。内面中央のみ不定方向のナデを行う。69は切り離し時に多めに粘土を切っているため、厚底状になっている。口縁部は一度外側に広げたのちに上方へ屈曲させる。

70・71は土師器坏である。70は全体に磨滅しているが、底部は糸切り未調整であることは確認できる。底部から口縁部へは比較的スムーズに接続し、緩やかに内湾しながら広めに立ち上がる。71も口縁部は広めにのびるが、端部付近を摘み上げるため、外面に緩やかな稜線がみられる。

72～76は土師器碗の底部である。72は底部片であるが、土器を覆うように滓が付着している。磨滅もあって底部の調整は不明である。高台は細く長い。滓はメタル度がL（◎）以上で、表面に2～5mm程度の微細な木炭片が確認できる。73は小さな高台を貼り付けており、端部はやや角張っている。内外とも磨滅が著しいが、内面は本来ミガキを施している可能性がある。また、底部も板目痕らしきものもみえるが、磨滅のため定かではない。74は高台を欠損しているが、底部はヘラ切り調整とみられ、口縁部は厚みを保ったまま内湾気味にのびている。内面中央部のみ不定方向のナデである。75はやや太めの高台を有する。底部はヘラ切り後にナデで仕上げる。76は内外とも5mm大の円形の剥離が顕著にみられる。高台はやや高めで外反する。

77は瓦器碗の口縁部片である。緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部のみ外反させる。内外とも横方向の粗いミガキを施している。

26 層出土土器（第 26 図）

78～80は土師器皿である。78は小片で、全体に磨滅している。底部は板目痕跡が残っているが、糸切りの痕跡は確認できない。口縁部はごくわずかに上方へ折り曲げる程度である。79は全体に薄手で、底部は糸切り未調整で板目痕も認められる。口縁部は緩やかに内湾して短く立ち上がる。80は底部糸切り未調整で、やや厚めの底部から外上方へ短く口縁部がのびる。81～83は土師器碗である。81は口縁部片で、非常に薄いつくりである。内面の一部が剥離している。82は略完形で、口縁部は強い回転ナデによって意図的に稜線を残している。内底面のみナデである。底部はヘラ切り未調整であるが、腰部外面はヘラ削り気味の調整となっている。高台は高めで直線的に開き、端部には板目痕が残る。83は全体に少し厚手で、磨滅している。底部はヘラ切り調整で、わずかに外反する高台の端部には板目痕が残る。

27 層出土土器（第 27 図）

84～86 は土師器皿で、いずれも底部はヘラ切り調整である。84 は底部ヘラ切り後、ナデにより仕上げており、内底面のみ不定方向のナデを行う。口縁部は口縁部付近のみ上方へ屈曲させるため、外面に比較的明瞭な稜線が認められる。85 は底部ヘラ切り後に板目痕が付いている。口縁部は緩やかに内湾しながら広がり外上方へとびる。内底面は粗いナデを行っている。86 は底部ヘラ切り後に板目痕が付いており、内底面のみ不定方向のナデを行う。口縁部は少し厚手で、内湾しながら立ち上がる。腰部はヘラ削り気味の調整を行っている。

87 は土師器の坏ないし壺の口縁部である。全体に均一の厚さで外上方へ直線的にのびる。

88～91 は土師器壺の底部である。88 は全体に磨滅しており調整は不明瞭で、底部調整も不明である。高台は比較的高さを保って外反する。89 は全体に厚いつくりで、底部はナデで仕上げているため、ヘラ切りか糸切りかの判断は困難である。高台も厚く、端部は丸みを帯びる。内面に鉄分が付着している。90 も磨滅が著しく、底部の調整はナデで仕上げているものの切り離しの状況までは確認できない。高台は端部に板目痕が認められ、部分的に鉄分が付着する。91 は高台が高いのが特徴である。底部に板目痕が残るが、ヘラ切り調整を行っている可能性がある。高台の端部にも板目痕が確認できる。内底面のみナデ調整を行い、内面には鉄分が付着している。

28 層出土土器（第 27 図）

93 は土師器壺である。高台は接合面で欠損しており、底部はナデ調整のため切り離し調整は不明である。また内外とも磨滅が著しい。

29 層出土土器（第 27 図）

94・95 は土師器壺の底部である。94 は比較的高い高台を有し、底部はヘラ切りによる。高台端部には板目痕が確認できる。95 は底端部から少し内側の位置にやや太めの高台を貼り付ける。底部の調整は不明瞭ながら、糸切り痕跡らしきものを確認できる。

30 層出土土器（第 27 図）

96 は須恵器甕の底部付近の破片である。外面は平行タタキ、内面は同心円あて具の痕跡が残る。傾きにやや不安がある。

31 層出土土器（第 27 図）

97 は須恵器甕の底部付近の破片である。厚手で、外面は不明瞭ながら長方形のタタキ痕、内面は同心円のあて具痕が残る。外面に薄く灰かぶりがみられるが、内面の下半にも灰かぶりがみられることも考えると、底部付近の破片とみて間違いないだろう。

98・99 は土師器坏である。98 は破片資料であるが、底部はヘラ切りの可能性があり、内底面の中央寄りをナデ調整する。比較的浅めである。99 は口縁部片で、口縁部はやや丸みを帯びた腰部から上方へとびる。強い回転ナデのため凹凸がみられる。

100 は坏ないし壺の破片であるが、底部を欠損しているものの高台が剥離した痕跡等が確認できないことから坏の可能性が高いと考える。内外とも回転ナデによる調整である。

101 ～ 103 は土師器碗である。101 は高台片で、底部は磨滅により判然としないが糸切り離しの可能性がある。高台はやや太めで短く開く。102 は薄手で、底端部から少し内側に高めの高台を接合する。底部には板目痕が確認できるが、ナデ調整を行っているため切り離しの状況については不明である。内底面のみ不定方向のナデで仕上げる。103 は2分の1ほどが残っている。全体に薄いつくりで、底部はヘラ切り未調整である。高台は接合面だけ広く本体は細くのびる。高台端部は丸くおさめられ、一部に板目痕が確認できる。口縁部は一定の厚さを保って内湾して開く。外面の一部に煤が付着する。

32 層出土土器（第28図）

104・105 は土師器坏である。104 は底部糸切り未調整で、口縁部は内湾しながら大きく開き、端部を強くなでるため稜線が残る。105 も底部糸切り未調整で、口縁部は底端部からわずかに内湾しながら大きく開く。

106・107 は黒色土器碗の底部である。106 は内面が黒色を呈するA類で、内面には粗いミガキが施されている。外面は下半部に削り気味の工具調整を行い、底部はヘラ削りを行う。そのためか全体的に薄手である。高台は細く、端部は丸みを帯びる。107 は内外両面が黒色を呈するB類である。106 に対して厚手で、内外に粗い横方向のミガキが施される。底部にもミガキが施されるため、底部の調整については不明瞭である。高台は太く端部付近を外反させる。108 は瓦器碗の底部片である。内面は粗いミガキを施しており、外面の下半には工具ナデを行う。高台は端部を丸くおさめる。

33 層出土土器（第28図）

109・110 は土師器坏で、ともに底部は糸切り未調整である。

111 ～ 113 は土師器碗である。111 は口縁部小片で、上方へ直線的にのびる形態をなす。112 は断面逆台形状を呈する高台を貼り付け、底部は糸切り未調整である。高台の端部にも板目痕が認められる。113 は高台が接合面で欠損している。全体に厚いつくりで、口縁部外面を断面三角形状に肥厚させており、定窯系白磁碗の玉縁を模倣した形態とみられる。底部は糸切り未調整である。

114 は瓦器碗である。内面は磨滅しているが、外面には横方向の粗いミガキが全体に施されている。底部の調整は不明瞭である。口縁部は内湾しながら広がり端部をわずかに外反させる。高台は歪な三角形状を呈し、貼り付け後に内側に向かって摘んでおり、嘴状を呈している。

34 層出土土器（第28図）

115・116 は土師器坏である。115 は口縁部の小片であるが、底部付近にヘラ状工具による調整の痕跡がみられ、底部はヘラ切りの可能性もある。腰部は丸みを帯び、口縁端部付近のみ少し外反する。外面の一部に黒斑がある。116 は底部小片で、底部はヘラ切り未調整である。内外とも磨滅しているが回転ナデであろう。

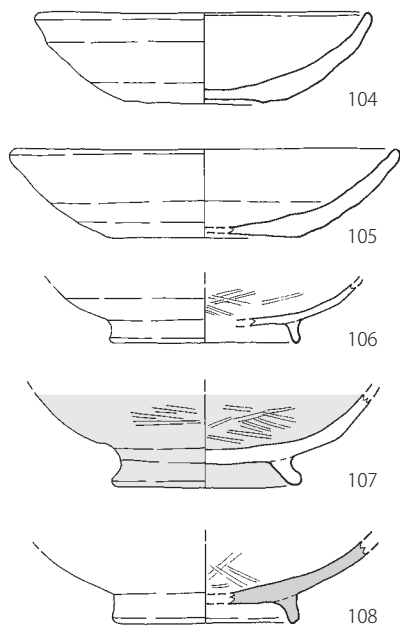
117 は土師器甕の胴部片である。全体的に厚手で、内面は工具によるナデ調整、外面は粗い平行タタキを施す。外面全体が少し煤けており、内面下半にも煤の付着がみられ、煮炊きの痕跡が認められる。

35 層出土土器（第 28 図）

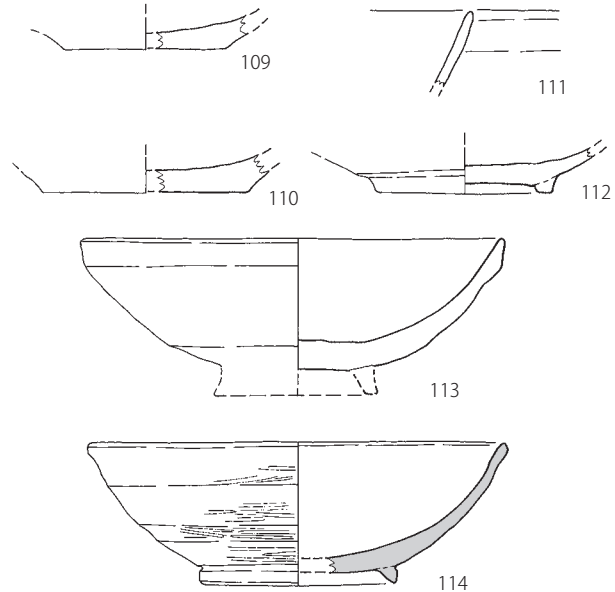
118 は土師器坏である。全体的に磨滅しており、底部の調整は不明であるが板目痕が確認できる。口縁部は内湾しながら短く立ち上がる。

119 は土師器坏の底部である。底部は糸切り未調整で、やや突出した形態を呈する。口縁部

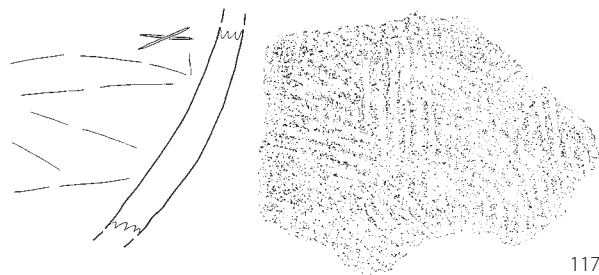
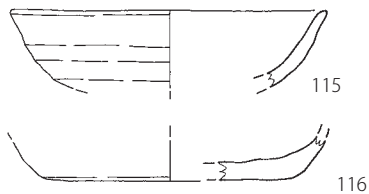
32 層



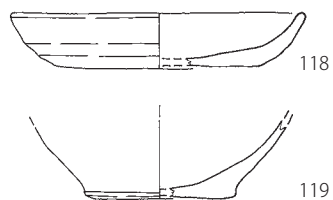
33 層



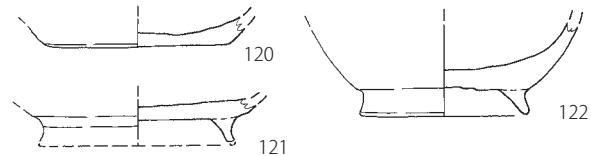
34 層



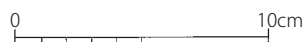
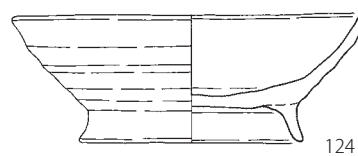
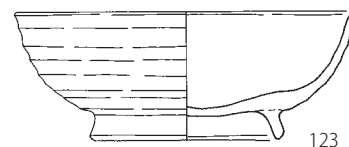
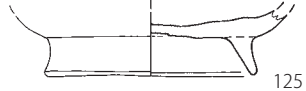
35 層



37 層



38 層



第 28 図 谷部出土土器実測図④（1/3）

は内湾しながら、角度を持って立ち上がる。

36 層出土土器（第 29 図）

126 ～ 131 は土師器坏で、小型品である。126 はおおよそ完形で、底部はヘラ切り離しである。腰部はヘラ状工具による削り気味の調整を行い、口縁端部のみ少し外反させる。127 は底部片で、底部は糸切り未調整である。内外とも回転ナデを行う。128 は底部糸切り未調整で、内底面にハケ調整を行う。口縁部は内湾しながら立ち上がる。129 は底部糸切り未調整で、口縁部は外方へ開いた後に上方へ屈曲させる。内面は回転ナデによる痕跡が明瞭に残る。130 は底部片で、内外とも磨滅しているが、底部はヘラ切り離しの可能性がある。131 は全体に薄手で、底部はヘラ切り離し後に板目痕が付いている。口縁部はほぼ直線的にのびる。

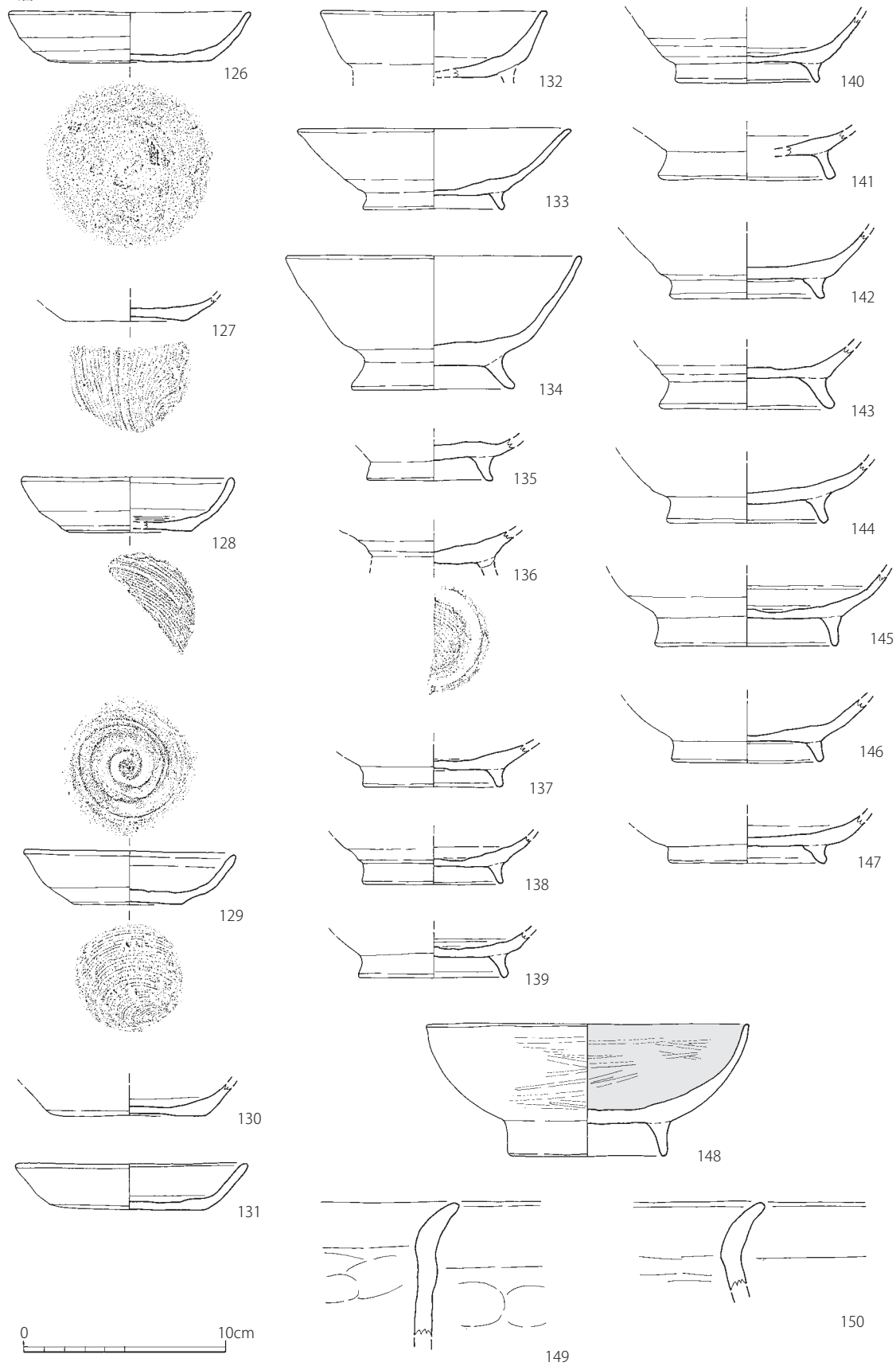
132 ～ 147 は土師器碗である。

132 は他に比べると小型であり、高台付きの坏とすべきか。高台は接合面で剥離しており、底部の調整は不明である。口縁端部はわずかに外反する。133 全体に薄いつくりで、底部の調整は不明である。口縁部は直線的に大きく広がり、端部のみ外反させる。136 は 3 分の 2 ほどが残存し、底部付近のみ厚手である。口縁部は丸みもつ腰部からほぼ直線的に上方へのびる。底部は糸切り離した後ナデ調整を行ったとみられるが、磨滅のためやや不安がある。内底面はハケ状工具によるカキメ状の調整を行う。高台は高めで少し外反し、端部は丸みを帯びるが板目痕が確認できる。135 は底部片で、底部は糸切り後に板目痕が付いている。内底面中央のみナデ調整を行う。136 も底部糸切り離しで、内底面中央のみナデ調整を行う。外面に微細な滓が付着している。137 は底部に板目痕が確認できる。切り離しの状況等の確認は困難であるが、ヘラ切り離しの可能性がある。内外ともに黒斑を有する。138 は薄いつくりで、底部はナデ調整で仕上げているが、ヘラ切り離しの可能性がある。高台の端部に板目痕が残る。口縁部は内湾しながらのびている。内底面のみナデ調整を行う。

139 も 138 と同様の調整で、底部はナデによる仕上げであるが、ヘラ切り離しの可能性がある。140 は底部片で、口縁部は強い回転ナデにより凹凸が残る。内底面のみナデ調整を行う。底部はナデ調整による仕上げであるが、糸切り離しの痕跡らしきものが確認できる。141 は比較的高めの高台を有し、高台端部は少し丸みを帯びるが部分的に板目痕が確認できる。底部の調整は不明である。内底面のみナデ調整を行う。142 は底端部から若干内側の位置に高台を貼り付けている。底部は不明瞭ながらヘラ切り離しの可能性がある。内底面のみナデ調整を行う。143 は比較的高めの高台を有し、底部はナデ調整で仕上げており、切り離し等は確認できない。内底面のみナデ調整を行う。144 は比較的均一な厚さで仕上げられている。端部は少し外反させる。底部はナデ調整を行っており、切り離し等の痕跡は確認できない。145 は比較的高めの高台を有するが、全体的に磨滅が著しく調整は不鮮明である。ただし内底面のみナデ調整を行っている。146 は内外とも磨滅が顕著で、調整は不明である。147 は底部端から少し内側に高台を貼り付ける。底部は板目痕が確認できるが、切り離し等の痕跡は不明である。内面は工具によるナデ調整を行っている。

148 は黒色土器碗の A 類である。全体に丸みを帯びた碗部で、口縁端部は若干外方へ曲げる。高台は比較的高く、端部は少し丸みを帯びる。底部はやや不確定ながら、ヘラ切り未調整と考えられる。内面は黒色を呈し、内外とも横方向のミガキを施す。

36層



第29図 谷部出土土器実測図⑤ (1/3)

149・150 は土師器甕の口縁部である。149 は比較的均一な厚さで、口縁部は緩やかに折り曲げる。内外ともナデ調整で、外面は部分的に煤が付着する。150 は体部内面に削り調整を行う。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。外面にはわずかに煤がみられる。

37 層出土土器（第 28 図）

120 は土師器坏の底部である。底部はヘラ切り後ナデ調整を行い、その後板目痕が付いている。内底面のみナデ調整を行う。

121 ～ 124 は土師器碗である。121 は腕部底端から若干内側に高台を貼り付けている。底部はナデ調整で仕上げているが、ヘラ切り離しであった可能性がある。断面部分を含め全体的に鉄分が付着している。122 は全体に厚手で、口縁部は底端部から内湾しながら、急角度に立ち上がる。高台は直線的に開く。底部は強いナデで仕上げており、切り離しの痕跡は確認できない。123 は比較的薄いつくりで、口縁部は内湾して丸みを帯び、口縁端部のみ少し外反させる。高台は細く高めである。底部はヘラ切り後に板目痕が付いている。内底面のみナデ調整を行う。124 は浅い碗部、高い高台が特徴である。全体に磨滅しており、底部を含めた調整は不明瞭である。口縁部は強い回転ナデを行っており凹凸が残る。

38 層出土土器（第 28 図）

125 は土師器碗の底部片である。高台は高めで、わずかながら外反する。底部はヘラ切り後にナデ調整で仕上げる。内底面のみナデ調整を行う。腰部は丸みを帯びる。

3 その他の出土土器および石器

本項では、上記以外の古代・中世の土器・陶磁器や、縄文・弥生土器、石器について報告を行う。

中段上層黒色土出土土器（第 30 図）

表土及び耕作土を除去した後に採集した資料で、層位的には中段部分の谷部堆積層の最上層に位置する 24 層に該当する可能性が高い。ただ、検出前の段階で採集しているため、若干混じり込みが存在する可能性もあり、24 層とは分けて報告する。

151 ～ 153 は土師器皿で、すべて底部は糸切り未調整である。151 は少し厚手で、口縁部は太く短くのびる。内底面中央のみをナデで調整する。152 もやや厚手で、調整は 151 と同じである。胎土中に雲母が少し目立つ。153 は少し薄手で、口径に対して器高が低く、低平な印象を受ける。口縁部は少し内湾しながら立ち上がる。全体に磨滅が著しい。

154 ～ 156 は土師器碗である。154 は口縁部片で、均一な厚みで緩やかに内湾しながら立ち上がる。内外とも横方向のミガキが施されている。155 は底部片で、底端部からわずかに内側に断面三角形に近い高台を貼り付ける。高台は外側に広げつつも端部を少し下方へ曲げている。底部はナデで仕上げる。156 は底部片で、丸みを帯びた腕部に断面台形状を呈する小さな高台を付加する。底部はナデ調整で仕上げるが、ヘラ切り離しの可能性がある。内底面のみナデ調整を行う。

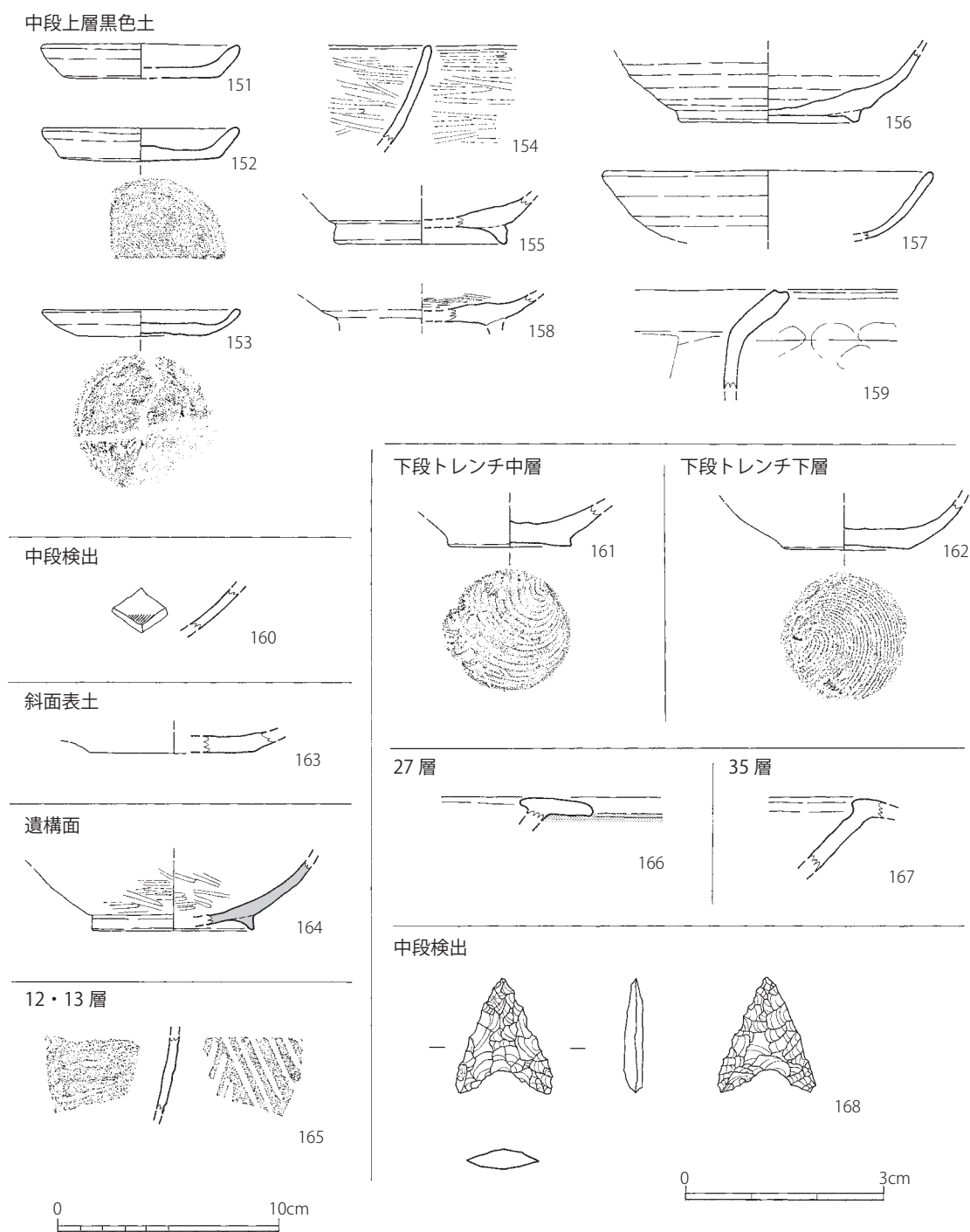
157 は土師器坏の口縁部片である。復元径に少し不安を残すが、丸みを帯びた腰部からわずかに内湾しながら上方へ開く。

158 は黒色土器碗 A 類の底部片で、内面が黒色を呈する。高台は接合面で剥離している。内面は横方向のミガキが施されており、底部は糸切り未調整である。

159 は土師器甕である。口縁部は少し肥厚しており、端部はナデにより凹線状を呈する。外面はナデ、内面は工具による調整痕が認められ、外面には煤が付着している。

中段検出時出土土器（第 30 図）

160 は白磁碗の小片である。内外とも薄く釉薬がかかり、淡い緑色に近い白色を呈する。内面には劃花文の一部がみえることから、大宰府分類による白磁碗Ⅳ類に相当すると考えられ



第 30 図 その他の出土土器・石器実測図（168 は 1/1・1/3）

る。この資料は3号炉周辺の検出時に採集したもので、当遺跡では唯一の輸入陶磁器片である。

下段トレンチ中層・下層出土土器（第30図）

161は下段トレンチ中層から出土した土師器坏である。底部はやや突出するような形態をなし、底面には糸切り痕が明瞭に残る。やや厳密性を欠くが、谷部堆積層の33・34層に相当するものと推測される。

162は下段トレンチ下層から出土した土師器坏である。底部の突出はなく、緩やかに内湾しながら口縁部へ向かう形態をなす。底部は糸切り未調整である。谷部堆積層の35～38層に相当するものと推測される。

斜面表土出土土器（第30図）

163は土師器坏の底部片である。底部は糸切り未調整である。

遺構面出土土器（第30図）

164は瓦器碗の底部片である。内外とも横方向のミガキを施し、底部には断面三角形の高台を貼り付ける。

縄文・弥生時代の土器・石器（第30図）

165は縄文時代の曾畑式土器の小片である。内面は横方向のケズリ調整で、外面は棒状工具によって山形文を施している。胎土に滑石が目立つ。谷部堆積層の12・13層からの出土。

166・167は弥生土器である。166は中期前半の須玖式土器の高坏口縁部片である。ほとんど原形をとどめていないが、内外ともヨコナデ調整を行い、外面には部分的に丹塗りの痕跡が認められる。167も須玖式土器の高坏口縁部片であろう。磨滅・剥離により調整は不明瞭であるが、外面の全体に丹塗りの痕跡が窺える。

168は黒曜石製の打製石鏃である。長さ1.7cm・幅1.5cm・厚さ0.25cmを測り、重量は0.5gである。

IV 小 結

宮原金山遺跡は斜面側の平坦地に営まれた炉跡や谷部に形成された廃滓場の存在から製鉄遺跡であることが判明した。また、廃滓場から出土した膨大な製鉄関連遺物は、生産規模の大きさを十分に物語る。九州では古代から中世にかけての製鉄遺跡がほとんど知られておらず、発掘調査が実施されている遺跡もごくわずかで、当遺跡の発見は極めて重要な成果といえる。さらに、鉄鉱石を原料とする製鉄遺跡であることも判明し、検討すべき課題も多い。

製鉄の詳細は続刊にて報告することとし、ここでは出土土器について若干のまとめを行いたい。ただ、土器の評価についても本来は製鉄関連遺物を含めた総体的な検討を経る必要があり、ここで述べる内容も今後の整理過程において修正が生じる場合もあることを断っておく。

1 出土土器の年代的位置

本項では、先学における土器研究を参考に当遺跡出土資料の年代的な位置づけを行いたい。なお、各土器の検討に際しては文末に掲げた先行研究を参照しており、それらと齟齬のある結論に至っている場合はすべて執筆者に責がある。

谷部出土土器の時期

谷部の最下部に位置する 37・38 層は、最も古い段階の廃滓層である。38 層では土師器碗が 1 点、37 層では土師器碗 4 点・坏 1 点があり、いずれもヘラ切り底である。37 層出土の碗 123・124 は口径に対する底径の割合がそれほど小さくなく、高台も比較的高さを保ち 10 世紀後半を中心とする時期が推定される。土師器碗 122 は小碗か。

35・36 層は堆積状況から一連の廃滓段階が推定される。35 層は坏 2 点のみの出土で明確な時期は不明であるが、坏 118 は大宰府編年 X～XI 期ごろにみられる体部屈曲坏とほぼ同時期か。36 層からは多量の土師器が出土し、1 点のみ黒色土器碗 A 類である。坏は体部が屈曲するものと直線的にのびるものがあり、126・131 はヘラ切り底、127～129 は糸切り底である。碗は全体的に高台が高めで、全般的に口径と底形の差は大きくないと推定される。碗 133・134 は直線的に開く口縁部が前時代的であるが、豊前では 11 世紀ごろまで残るため、他の土器と同一時期の所産とみられる。133 は高台付皿との中間的形態をなす。甕は内外をナデ調整しており、10 世紀代に特徴的な外面タタキ甕の口縁部と考えられる。以上から、35・36 層の土器は総体的に 10 世紀後半～11 世紀前半の幅であろうか。

33・34 層は調査時の所見から同一段階の廃滓層であろう。34 層は土師器の坏と甕しかない。坏 115 は 12 世紀代を特徴づける豊前型坏に近いが、口径が 13.5cm 程度であることから、11 世紀代の範疇と推測される。甕 117 は外面に粗いタタキを施し、10 世紀代の甕で混入品か。33 層は土師器坏・碗、瓦器碗が出土した。注目されるのは土師器碗 113 で、玉縁を有する大宰府分類白磁碗 IV 類の模倣とみられ、11 世紀末～12 世紀前半の時期か。瓦器碗 114 は外面のミガキが粗いながらも丁寧で、高台も低い台形状ではなく、12 世紀前半ごろであろう。以上から、33・34 層の土器は 11 世紀後半～12 世紀前半ごろの時期が推定される。

32 層は種類が豊富である。土師器坏 105・106 は豊前型坏で、大小があり糸切り底である。105 は口径から 12 世紀前半ごろか。黒色土器 107 は当遺跡唯一の B 類で、全体に厚手だが高めの高台を有し、11 世紀代と推定される。A 類の 106 は薄手で、高めの高台から 107 と同時

期と考える。瓦器碗 108 の高台は遺跡内で出土した瓦器碗の中で最も高く、磨滅しつつもミガキも認められ、12 世紀前半ごろと推定する。以上から、32 層の土器は 12 世紀前半ごろであろう。

31 層は土師器碗・坏と須恵器甕があり、図示していないが黒色土器 A 類の小片もある。土師器碗は高台の高い 102・103 と低めの 101 があり、前者は 10 世紀後半～11 世紀前半ごろ、後者は 11 世紀後半ごろか。土師器坏 98・99 は丸みを持つ体部が若干屈曲し、98 はヘラ切りであることから 11 世紀後半ごろか。以上から 11 世紀後半を中心とする時期と推定される。なお、30 層で出土した須恵器甕 96 は、出土位置も近く本来同一個体であった可能性が高い。

29 層は土師器碗と瓦器がある。土師器碗 94 はやや高めの高台でヘラ切り底であるが、95 は少し高さを残した断面台形状の高台で糸切り底の可能性はある。前者は 11 世紀後半、後者は 12 世紀まで下るとみられる。以上から、29 層の土器は 11 世紀後半～12 世紀前半の幅をみたい。

28 層は土師器坏・碗である。坏 92 は体部が屈曲し、ヘラ切り底で 11 世紀前半を中心とする時期とみられる。碗 93 もヘラ切り底の可能性があり、口径と高台径の差が大きいことから 11 世紀代と推定される。28 層の土器相は後述する 27 層と近似し、一連の堆積か。

27 層は土師器坏・碗がある。坏 84～86 はいずれも体部が屈曲しヘラ切り底で、10 世紀末～11 世紀前半ごろと推定される。碗はいずれも高めの高台を有する。88 と 91 はヘラ切り底、その他は不明で、11 世紀前半ごろに位置付けられようか。87 は直線的な口縁部が古相を呈する。以上から、27 層の土器は 11 世紀前半を中心とする時期か。

26 層は土師器碗と皿である。碗 82・83 は高い高台や体部の屈曲などから 10 世紀後半～11 世紀前半と推定され、81 は低平に開く形態から 12 世紀前半ごろか。皿 78～80 は口径 12cm 程度、全て糸切り底で、12 世紀前半～中頃と推定される。26 層出土土器は全体的には 12 世紀前半ごろか。図示していないが瓦器碗小片も出土しており、土師器の年代とも齟齬はない。

25 層は土師器碗・坏・皿、瓦器碗がある。土師器の碗は高めの高台を有する 72・75・76 もあるが、低い断面台形状の高台を有する 73 もあり、後者を採るならば时期的には 12 世紀に下るだろう。坏は豊前型の丸型坏で、口径 15～16cm ほどで 12 世紀前半に位置付けられる。皿は全て糸切り底で、口径は 69 が 8cm ほど、67・68 は 9cm ほどで、12 世紀前半～中頃の幅をみておきたい。瓦器碗 77 は内外ともミガキがみられ、12 世紀代であろう。以上から、25 層出土土器は 12 世紀前半～中頃と推定される。

24 層は土師器坏と皿である。皿は全て糸切り底だが、法量的には口径 8cm と 9cm に分かれる。小型化を重視すれば 12 世紀後半頃といえよう。坏 61 は直線的な体部を特徴とし糸切り底で、14 世紀前半以降に出現する坏とみられ混入品であろう。24 層出土土器は、図示していないが瓦器碗小片もあることから、土師器皿が示す 12 世紀後半ごろと考えたい。

22 層は土師器坏のみである。糸切り底だが、体部が屈曲する形態に近いことや法量などから 11 世紀後半ごろか。

18～21 層は基本的に後世の掘り込みとみられる。土器は土師器碗・坏、黒色土器 A 類碗、瓦器碗がある。土師器は坏 53 が 11 世紀前半ごろ、54・55 は 12 世紀に下ると推測される。土師器碗 56 は 11 世紀ごろか。黒色土器はともに 11 世紀代、瓦器は 12 世紀代か。

次に述べる 17 層からは後世の造成により攪乱を受けていると考えられることから、それぞれ出土土器の時期について簡単に触れる程度とする。17 層は土師器碗と坏のみである。坏 51 は時期の特定が難しいが、碗 52 は比較的高い高台から 11 世紀ごろと推定される。

12・13層は堆積状況から一連の堆積と考えられる。土師器碗・坏・皿、黒色土器A類碗、瓦器碗がある。このうち土師器坏45・碗47は12世紀中頃か。黒色土器48は高めの高台と深くなる体部と推定されることから11世紀前半ごろであろう。瓦器碗49・50はミガキの状況や断面台形の高台などから12世紀中頃～後半と推測される。

7・8層は土師器坏1点を図示しているが、この他黒色土器A類碗や瓦器碗とみられる小片もある。土師器坏42は時期不明である。瓦器碗小片は他の出土例と同じ12世紀代か。6層は土師器碗・坏、黒色土器A類碗がある。土師器坏38はヘラ切り底で11世紀前半～中頃、39は12世紀前半に下る。土師器碗40は高めの高台から10世紀後半に遡る可能性がある。黒色土器41は丸い体部に屈曲する口縁部から11世紀代と推定される。5層は土師器坏だけ図示しているが、黒色土器A類碗や瓦器碗とみられる小片もある。土師器坏はともに糸切り底で、35は時期不明だが、36は12世紀前半ごろと考えられる。4層は土師器碗・坏がある。坏32・33は時期比定が困難だが、碗34は高い高台から10世紀後半に遡るとみられる。3層は土師器碗と坏がある。碗は低平ながら高めの高台で、11世紀と推定される。坏28・29は豊前型の坏で、12世紀前半ごろであろうか。

2層は現代の攪乱層である。土師器碗・坏・甕が出土している。碗26と坏25はともに11世紀代と推定される。甕は内面をハケ調整することから鍋の可能性があり、11世紀以降か。

各遺構出土土器の時期

1号テラスからは土師器碗1が出土し、高台の形態から11世紀代か。2号テラスでは土師器碗5と豊前型坏4が出土している。12世紀前半ごろか。3号テラスでは、12世紀前半ごろの土師器豊前型坏10と12世紀後半まで下るとみられる土師器碗11がある。

製鉄炉からの出土土器は皆無に等しい。3号炉は土師器の小片のみで、皿16は器高0.7cmと非常に低平で後述する4号炉周辺出土の皿と類似し、12世紀後半～13世紀前半ごろか。4号炉周辺出土の土師器皿18～21は、口径8.0～8.5cm程度で12世紀後半ごろと推定され、器高1.0cm未満の低平な一群もあり、13世紀前半までの幅が穏当か。

土坑からも出土は稀である。1号土坑では豊前型の坏とみられる小片があり、12世紀代か。2号土坑は土師器碗があるが、時期は不明である。3号土坑は土墳墓とみられ、土師器坏7と皿6が出土した。坏は直線的にのびる体部に糸切り底で24層の土師器坏61と同様14世紀前半以降であろう。皿は口径8.3cm・器高0.8cmと小さく、坏と同時期の所産か。5号土坑では土師器坏・碗があり、坏は糸切り底の豊前型で12世紀代、碗は高めの高台から11世紀まで遡る可能性がある。7号土坑は土師器坏と瓦器碗があり、前者は12世紀前半、後者は12世紀中頃～後半とみられる。8号土坑の土師器碗は時期推定が困難だが、11～12世紀ごろであろう。

2号溝では豊前型とみられる土師器坏底部片が出土し、12世紀代であろう。

2 出土土器からみた遺跡の形成過程

当遺跡における生産活動の年代観を直接物語る資料は谷部堆積層出土の土器群である。そこで、谷部堆積層の整理を中心に整理を行い、遺跡の形成過程について少しまとめておきたい。谷部における廃滓行為は堆積状況と出土土器から以下に述べる6つの段階（時期）に区分できる（第31図）。ただし、各段階は時期的に厳然と区別できるわけではなく、多少前後の時期

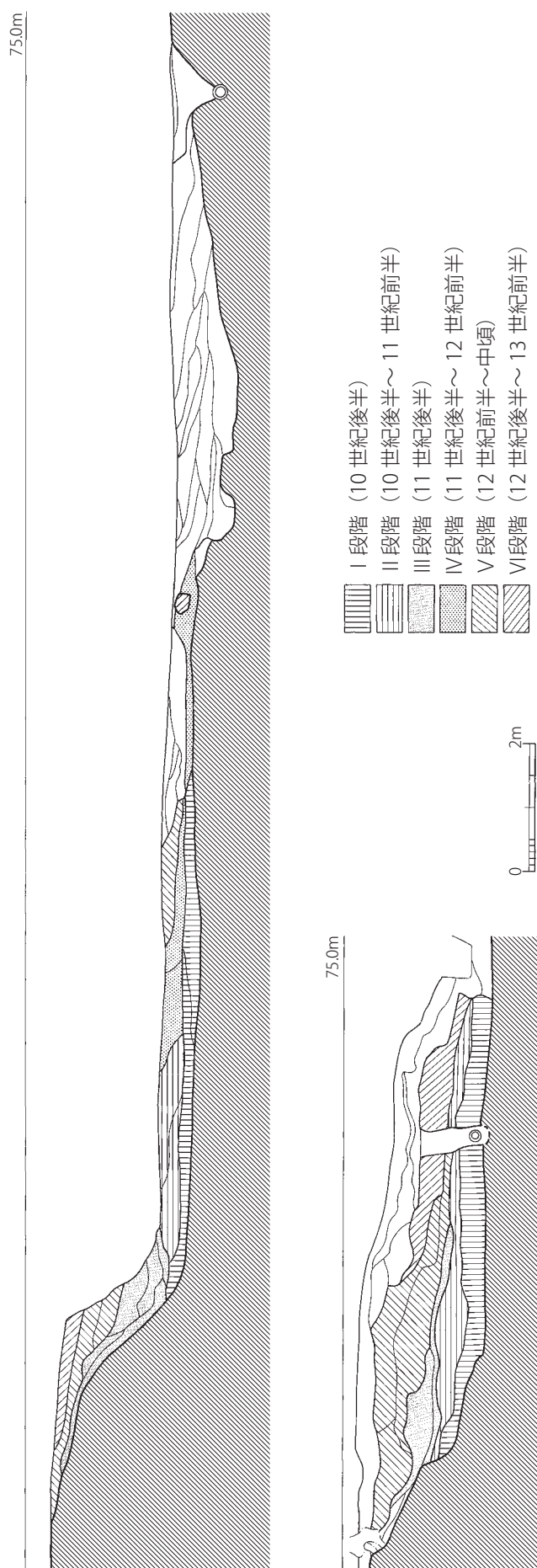
を含むものと考えられる。将来的には画期の設定による大区分・小区分が必要であろうが、そのためには製鉄関連遺物を含めた様相把握が必要であることから、今後に譲りたい。

I 段階（10 世紀後半） 37・38 層が該当。谷部最下層に位置し、谷部を平面的に埋め尽くすような堆積状況を示す。ただし、流路に近い部分にまで堆積は及ばない。しかし、当初から大規模な操業を行っていたと推定される。

II 段階（10 世紀後半～11 世紀前半） 35・36 層が該当。土層上はあまり広がりを見せないが、実際には広範囲に分布し、I 段階と同程度の操業であったと推測される。なお、調査区東壁でも確認できるが、II 段階の堆積が終了した段階に 1 つの平坦面が形成されている。この面は 8 号炉（鍛冶炉）や 8 号土坑の掘削段階の作業面と推定され、5 号炉の操業時にもこの面が作業面であった可能性がある。

III 段階（11 世紀後半） 29・30・31 層が該当。土層にも表れているように量的にはそれほど多くない。

IV 段階（11 世紀後半～） 22・33・34 層が該当。段造成により明確ではないが、33・34 層は II・III 段階の廃滓層を覆うように谷側へ廃棄されている。22 層はわずか 1 点の土器だけであるが 33・34 層と同時期で、堆積範囲からも一連の堆



第31図 出土土器からみた廃滓層の区分 (1/100)

積の可能性があり、Ⅳ段階に含めた。

V 段階（12 世紀中頃～後半） 25・26・32 層が該当。25・26 層は斜面側に厚く堆積し、大規模な操業によるとみられる。5 号炉の前面はⅤ段階には完全に埋まっており、Ⅴ段階の堆積が下限といえる。なお、32 層も層序と出土土器を考えると、同一時期の廃滓層と考えられる。

Ⅵ段階（12 世紀後半～13 世紀前半） 24 層が該当。中段部分では最上層に位置し、少なくとも 4 号炉については堆積状況からⅥ段階の堆積が始まる以前であろう。なお、Ⅵ段階と同時期の土器は 12・13 層でも出土するが、3～17 層は後世の整地土であろう。したがって、廃滓行為はⅥ段階目をもって終了したと考えられる。その後、一定の空白期をおいて 3 号土坑（土墳墓）が 14 世紀前半に造営され、「生産の場」から「葬送の場」へと移ったことが窺える。

以上から、遺跡における製鉄は少なくとも 300 年近くに及ぶことが判明した。年代推定資料としては等級の低い材料をもとに、少量の出土土器からやや強引に時期推定を行った部分もあるが、基本的にはほぼ中断のない操業と推定される。なお、調査区内の廃滓層だけで 11 t 近くの製鉄関連遺物が出土しているが、長期に及ぶ操業と造成による掘削量を考慮すると、調査区内だけでも 20 t ほど、遺跡全体ではその倍ほどの量になると考えられる。製鉄炉本体は 3 基しか確認できないが、造成により削平された西側や未調査の東側にも製鉄炉が多数分布すると考えるのが自然であろう。

なお、設定した 6 つの段階に対して各遺構がどのように位置づけられるかは明確ではない。ただ、5 号炉は前面の作業空間の確保のためにはⅡ段階目までの堆積が完了する必要がある、Ⅴ段階の堆積以前に操業を終えている。4 号炉は少なくともⅥ段階の堆積以前に操業している。したがって、5 号炉が 11 世紀後半ごろ、4 号炉が 12 世紀前半以前に位置づけられる可能性がある。この他、上段テラスや土坑等の存続時期は不明であるが、基本的には遺跡の形成当初に大枠は完成しており、その後操業が続く中で細かな推移がみられたと推測する。

3 宮原金山遺跡における土器相

最後に当遺跡における土器相について簡単に触れておこう。

まず、出土土器類の種類をみると土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・陶磁器などがある。このうち量的には土師器が大半を占めており、これに黒色土器や瓦器が続く。須恵器は若干含まれる程度で、陶磁器については白磁碗小片が 1 点（第 29 図 161）出土したに過ぎない。土師器の破片などに焼成不良の瓦器が含まれる可能性もあるが、基本的な構成比に影響はないだろう。

そうした量的な多寡を表現すれば、「土師器≫黒色土器≧瓦器>須恵器>陶磁器」となるが、Ⅰ段階やⅡ段階ではまだ瓦器は出現しておらず、白磁もこれ以後であるため当初は「土師器≫黒色土器>須恵器」であった。

次に、器種別にみてみよう。

土師器は、埴・坏・皿・甕で、埴や坏が半数以上を占め、これに皿が続く、甕は極少量である。今回埴として報告した中には破片資料も多く含まれるため、高台を有する皿を誤認している可能性も否定できないが、わずかながら遺存する体部の形態が椀形に近いものが多いことから基本的には高台付皿はほとんど含まれていなかったと推測する。

黒色土器は全て埴であるが、内黒と呼ばれる内面を黒色に仕上げる A 類が主体で、内外両

面を黒色に仕上げるB類は32層で出土している1点のみである。B類の低割合については既に先学の指摘するところで（佐藤1991、中島1988）、豊前における地域的様相がそのまま表出したといえ、さらには中国西北部から西部瀬戸内にかけての様相と合致する（中島1988）。瓦器は椀のみで小皿はない。須恵器は甕のみである。陶磁器は白磁碗1点のみである。

以上から、一定の年代幅を有するものの、基本的には土器の種類を問わず椀形態が中核をなし、これに土師器杯・皿が加わって食器相をなし、煮沸具としての土師器甕、貯蔵具としての須恵器甕を伴うことで、当遺跡の土器相を形成していたとみられる。また、黒色土器椀や瓦器椀などは数量的には限定されるが、瓦器椀については瓦器の生産が盛行する頃には遺跡が終焉に向っていることも一つの要因であろう。そうした土器相からは、鉄生産遺跡という特殊な環境の中で、必要にして最低限の食膳具・煮沸具・貯蔵具だけが常備されていた情景が浮かんでくる。さらには、33層出土の白磁模倣土師器碗の存在は生産に従事した人々の階層的な位置づけを反映するものではないだろうか。

なお、土師器の色調については、古代から中世にかけて赤味の強いものから白味の強いものへという変化が指摘されているが、豊前地方では赤味の強いものが残る傾向がある。当遺跡においても大半は橙褐色や赤橙色といった赤味の強い土師器で、先の指摘を補強する様相である。

4 おわりに

宮原金山遺跡は、主に廃滓層出土土器から10世紀後半～13世紀前半のおよそ300年間に及ぶ大規模な製鉄遺跡と推測される。しかし、遺跡全体に調査が及んだわけではなく、あくまで現状の見解である。本書では遺構と土器について報告を行ってきたが、10tを越える量の製鉄・鍛冶関連遺物のもつ情報量は膨大で、続刊報告書ではそれらの整理作業で得られた知見を元に、ここでの検討の検証を行い、少しでも生産活動の実態を明らかにできればと思う。

参考文献

- ・佐藤浩司 1991「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ
- ・佐藤浩司 1997「土器様相から見た大宰府と地方—中世前期の資料を中心として—」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅡ 日本中世土器研究会
- ・佐藤浩司 1997「12世紀の食膳具」『北九州埋蔵文化財調査室研究紀要』第11号（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- ・柴尾俊介 1984「北九州市域の瓦器椀について」『古文化談叢』第14集 九州古文化研究会
- ・谷口俊治 1987「豊前国企救郡における中世土器成立の契機について」『東アジアの考古と歴史』下岡崎敬先生退官記念事業会
- ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・中島恒次郎 1998「西北九州からみた豊前国の食器相—古代から中世前期—」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅢ 日本中世土器研究会
- ・森隆 1993「北部九州の瓦器生産」『古文化談叢』第30集（中）九州古文化研究会
- ・山本信夫 1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州古代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
- ・山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館

表1 宮原金山遺跡出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構・層位	焼成	器種	法量(cm)		焼成	胎土	色 調	調 整	備 考	登録 番号
						①口径 ③底径	②器高 ④最大径						
8	1		1号テラス	土師器	碗	②残1.15③(9.4)		良	良	赤褐～茶褐	内外ヨコナデ		144
8	2		1号土坑	土師器	坏?	②残3.1		良	良	明赤橙	内外ヨコナデ		153
8	3		1号土坑	土師器	坏	②残1.05		良	良	明赤橙	体部ヨコナデ→底部系切→内底面ナデ		154
8	4		2号テラス	土師器	坏	①(17.1)②残3.05		良	普通	淡橙	内外ヨコナデ	外上半煤	146
8	5		2号テラス	土師器	碗	②残5.25		良	良	淡灰褐～灰	外面ナデ→口縁部ヨコナデ		145
8	6		3号土坑	土師器	皿	①(8.3)②0.8③(6.6)		良	普通	茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部系切→板目		103
8	7	14	3号土坑	土師器	坏	①(15.6)②3.9③7.8		良	僅粗	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部系切	外面煤	104
8	8		7号土坑⑥	土師器	坏	②残2.2③(7.3)		普通	良	淡橙褐	内外ヨコナデ→底部系切		175
8	9		7号土坑	瓦器	碗	②残1.85③6.7		良	良	明灰	内面ミガキ、外面ヨコナデ、底部系切		105
8	10		3号テラス覆土	土師器	坏	①(14.7)②(4.2)③(8.3)		良	良	明橙	内外ヨコナデ→底部系切		147
8	11		3号テラス床直上	土師器	碗	②残1.65③6.2		良	良	黄白	内外ミガキ、底部不明	内外剥離	88
8	12		5号土坑西側	土師器	坏	②残0.8③(6.6)		良	僅粗	明褐	内外ヨコナデ		150
8	13		5号土坑西側	土師器	坏	②残2.3		良	良	明褐	内外ヨコナデ		151
8	14		5号土坑西側	土師器	碗	②残1.4		良	良	明橙	内外ヨコナデ		152
8	15		2号溝拡張部	土師器	坏	②残1.0③(6.0)		良	精良	淡橙～明橙	内外ヨコナデ→底部系切		157
8	16		3号炉	土師器	皿	②0.7		良	良	明橙	内外ヨコナデ→底部系切		155
8	17		3号炉1層	土師器	碗	②残1.9		良	良	淡褐	内外ヨコナデ		156
8	18	14	4号炉周辺	土師器	皿	①(8.2)②1.05③6.2		良	良	黄白	内外ヨコナデ、底部系切		102
8	19		4号炉周辺No.5	土師器	皿	①(8.8)②0.6③(6.8)		良	良	明橙	内外ヨコナデ→底部系切		148
8	20	14	4号炉周辺	土師器	皿	①(8.5)②0.85③6.6		良	良	橙褐	内外ヨコナデ、底部系切		101
8	21	14	4号炉周辺	土師器	皿	①(8.8)②1.2③7.35		良	良	黄白	内外ヨコナデ、底部系切	略完形	100
8	22		2号土坑	土師器	碗	②残1.05		僅不良	普通	淡褐	内外ヨコナデ、底部不明		149
8	23		8号土坑	土師器	碗	①(15.4)②残3.85		良	普通	橙褐	内外ヨコナデ		106
8	24		ビット3	土師器	坏	②4.2		良	良	明赤橙	内外ヨコナデ→底部系切		159
25	25		2層	土師器	坏	②残1.1③(5.9)		良	良	灰褐～褐	内外ヨコナデ→底部系切		140
25	26		2層	土師器	碗	②残2.85		良	普通	明橙褐	内外ヨコナデ→底部ヘラ切?	内外磨減	139
25	27		2層	土師器	甕	②残2.8		良	普通	明茶褐	内面ヨコハケ、外面ナデ→口縁ヨコナデ		1
25	28		3層	土師器	坏	②残1.85③(5.7)		良	良	橙褐	内外ヨコナデ→底部系切		142
25	29		3層	土師器	坏	②残1.05③(8.85)		良	良	淡灰褐	内外ヨコナデ→底部系切→内底面ナデ		141
25	30		3層	土師器	碗	①(11.2)②残4.05		良	普通	灰黄褐	内外ヨコナデ	内面摩減	2
25	31	14	3層	土師器	碗	①13.0②4.15③6.3		良	普通	茶褐～黒	内外ヨコナデ、底部ヘラ切?	外面黒斑	3
25	32		4層	土師器	坏	②残1.1		良	良	淡灰褐～灰褐	内外ヨコナデ→底部系切		137
25	33		4層	土師器	坏	②残0.7		良	良	明褐	内外ヨコナデ→底部系切→内面粗いミガキ		138
25	34		4層	土師器	碗	②残3.1③(9.0)		良	普通	灰黄	内外ヨコナデ、底部不明		4
25	35		5層	土師器	坏	②残1.7③(6.1)		良	粗	灰黄褐	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部系切		7
25	36		5層	土師器	坏	②残2.35③(7.2)		良	精良	褐	内外ヨコナデ、底部系切		6
25	37		6層	土師器	坏	②残2.2		良	普通	明橙	内外ヨコナデ		162
25	38		6層	土師器	坏	①(11.4)②残2.3③(7.5)		良	良	明橙	内外ヨコナデ→底部ヘラ切		136
25	39		6層	土師器	坏	②残2.15③(9.9)		良	普通	明橙	内外ヨコナデ→底部系切		161
25	40		6層	土師器	碗	②残2.2③(7.95)		良	良	橙褐	内面ナデ、底部不明(ヘラ切?)		12
25	41		6層	黒色土器	碗?	①(17.6)②残3.65		良	良	内:黒、外:灰	内面ヨコナデ→ミガキ、外面ヨコナデ	A類(内黒)、48と同一か?	11
25	42		7・8層	土師器	坏	②残1.1③5.7		良	普通	明橙～赤橙	内外ヨコナデ→底部系切		163
25	43		13層	土師器	皿	②1.15		良	良	明灰褐	内外ヨコナデ→底部系切→内底面ナデ		133
25	44		13層	土師器	坏	②1.85		良	良	明灰褐	内外ヨコナデ→底部ヘラ切のち板目		132
25	45		12・13層	土師器	坏	①(15.0)②3.7③(7.0)		良	良	橙褐	内外ヨコナデ、底部系切		10
25	46		12層	土師器	坏	②残0.95		良	良	明橙褐	外面ヨコナデ・内面工具によるカキメ状ナデ→底部系切		135
25	47		12層	土師器	碗	②残2.0③(7.4)		良	普通	橙褐	内外ヨコナデ、底部系切		13
25	48		12・13層	黒色土器	碗	②残2.85③(6.8)		良	良	内:黒、外:灰黄	内面ナデ→ミガキ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?	A類(内黒)、41と同一か?	8
25	49		13層	瓦器	碗	②残5.2		良	良	灰白～黒灰	内外ナデ→ミガキ、外面下半ハケ状工具調整		14
25	50		12・13層	瓦器	碗	②残2.55③(7.0)		良	良	内:灰黒、外:白灰	不明	内外摩減	9
25	51		17層	土師器	坏	②残1.2③(7.3)		良	普通	明褐～橙褐	内外ヨコナデ→底部系切		164
25	52		17層	土師器	碗	②残2.05③(7.7)		良	良	明橙褐	内外ヨコナデ→底部不明→内底面ナデ?		131
25	53	14	18～21層	土師器	坏	①(11.0)②2.5③7.35		僅不良	普通	淡褐～赤褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切		17
25	54		18～21層	土師器	坏	②残0.8③(7.6)		良	良	淡灰白	内外ヨコナデ→底部系切		129
25	55		19層	土師器	坏	②残1.5③(6.6)		良	良	明橙	内外ヨコナデ→底部系切		167
25	56		18～21層	土師器	碗	②残2.6		良	普通	内:明橙褐、外:暗灰褐	内外ヨコナデ→底部系切のち板目		130
25	57		18層	黒色土器	碗	②残4.9		良	良	内:黒、外:淡灰褐～黒灰	内外ヨコナデ→内面ミガキ	A類(内黒)	165
25	58		18～21層	黒色土器	碗	②残2.4③(8.0)		良	良	内:黒、外:灰黄	内面ミガキ、外面ナデ、底部板目	A類(内黒)、外面摩減	16
25	59		18～21層	瓦器	碗	①(16.0)②残2.8		良	良	灰黒	内外ヨコナデ→ミガキ	口径不安	15
26	60		22層	土師器	坏	①(13.2)②2.6③(6.7)		普通	良	明橙	内外ヨコナデ→底部系切→内底面ナデ	磨減	160
26	61		24層	土師器	坏	①(14.0)②3.1③(4.7)		良	良	灰黄褐	内外ヨコナデ、底部系切		21
26	62		24層	土師器	皿	①(8.0)②1.15③(6.6)		良	良	灰茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部系切		20
26	63		24層	土師器	皿	①(7.9)②1.15③5.75		良	普通	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部系切→板目		19

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構・層位	焼成	器種	法量(cm)		焼成	胎土	色 調	調 整	備 考	登録 番号
						①口径 ③底径	②器高 ④最大径						
26	64		24層	土師器	皿	①(8.9)②1.15③6.0		良	良	灰黄	内外ヨコナデ、底部糸切		18
26	65		24層	土師器	皿	①8.65②1.0③6.2		良	普通	淡褐～褐	内外ヨコナデ→底部糸切		174
26	66		24層	土師器	皿	①9.15②1.15③7.3		良	精良	明灰褐～淡褐	内外ヨコナデ→底部糸切	外面滓付着	173
26	67		25層	土師器	皿	①(8.9)②1.2③(8.0)		良	普通	淡黄褐～淡赤褐	内外ヨコナデ→底部糸切	磨滅・剥離	128
26	68		25層	土師器	皿	①(9.2)②1.2③7.2		良	普通	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部糸切→板目		26
26	69		25層	土師器	皿	①(8.0)②1.35③6.1		良	良	明橙褐	内外ヨコナデ、底部糸切		27
26	70	14	25層	土師器	坏	①(15.0)②2.8③6.45		普通	良	灰～灰黄褐	内外ヨコナデ、底部糸切		30
26	71		25層	土師器	坏	①(15.8)②3.2③7.3		僅不良	普通	橙褐	内外ヨコナデ、底部糸切	内外磨滅	23
26	72		25層	土師器	埴	②残2.3③(9.9)		良	良	明橙	内外ヨコナデ→底部不明	滓付着	176
26	73		25層	土師器	埴	②残1.6③6.9		不良	普通	黄白	不明	内外磨滅	24
26	74		25層	土師器	埴			良	普通	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?		22
26	75		25層	土師器	埴	②残2.8③(8.1)		良	普通	橙褐	内外ヨコナデ、底部ヘラ切→ナデ		25
26	76		中段2	土師器	埴	②残2.8③(8.5)		良	普通	茶褐	内面ナデ?、外面ヨコナデ、底部不明	小円剥離目立つ	96
26	77		25層	瓦器	椀	①(17.5)②残4.35		良	良	灰黒	内外ミガキ	口径不安	28
26	78		26層	土師器	皿	①(8.8)②0.9③8.0		良	良	橙褐	内外ヨコナデ、底部板目	底部磨滅	32
26	79		26層	土師器	皿	①(8.8)②0.9③7.8		良	普通	橙褐	内外ヨコナデ、底部糸切→板目	全体磨滅	33
26	80		26層	土師器	皿	①(9.2)②1.25③(8.0)		僅不良	良	淡褐	内外ヨコナデ、底部糸切	内面磨滅	34
26	81	14	26層	土師器	埴	①(15.4)②残3.4		良	良	茶褐	内外ヨコナデ	内面剥離	31
26	82	14	26層	土師器	埴	①(14.9)②6.05③8.6		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ→下半ヘラ削り?、底部ヘラ切→ナデ、高台端部板目	略完形	36
26	83		26層	土師器	埴	②残3.1③7.9		良	良	赤橙	内外ヨコナデ、底部ヘラ切、高台端部板目	内面小円形剥離目立つ	35
27	84		27層	土師器	坏	①(11.8)②2.3③(8.2)		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切→ナデ		41
27	85	14	27層	土師器	坏	①(11.05)②2.5③6.5		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切→板目		43
27	86	14	27層	土師器	坏	①(11.25)②2.35③7.6		良	良	茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切→板目		42
27	87		27層	土師器	坏or埴	②残3.8		良	良	橙褐	内外ヨコナデ	小片	40
27	88		27層	土師器	埴	②残2.45③(7.8)		良	良	明灰褐～明黄褐	内外ヨコナデ→底部不明	磨滅	127
27	89		27層	土師器	埴	②残3.2③6.9		良	普通	茶褐	内外ヨコナデ?、底部不明	底部磨滅	37
27	90		27層	土師器	埴	②残2.35③5.8		良	良	橙褐	内外ヨコナデ、底部不明、高台端部板目		39
27	91		27層	土師器	埴	②残3.0③10.0		良	良	黄橙褐	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?→板目、高台端部板目		38
27	92	14	28層	土師器	坏	①(11.0)②2.65③6.7		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切→板目		44
27	93		28層	土師器	埴	①(14.1)②残4.95③坏部8.2		普通	良	黄褐	内外ヨコナデ、底部不明	全体磨滅	45
27	94		29層	土師器	埴	②残2.5③8.8		良	良	赤橙褐	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切、高台端部板目		46
27	95		29層	土師器	埴	②残2.65③(6.3)		良	良	明赤橙	内外ヨコナデ→底部糸切?		124
27	96		30層	須恵器	甕	②残9.0		良	良	内:灰、外:暗灰	外面平行タタキ、内面同心円あて具痕		125
27	97		31層	須恵器	甕	②残6.4		良	良	内:灰、外:灰～黒灰	外面長方形格子タタキ、内面平行文あて具	内外灰かぶり	123
27	98		31層	土師器	坏	①(12.8)②2.3③(9.05)		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→不定ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?		50
27	99		31層	土師器	坏	①(13.0)②残3.1		僅不良	良	灰黄褐～淡褐	内外ヨコナデ		52
27	100		31層	土師器	坏?			良	良	黄橙褐	内外ヨコナデ		51
27	101		31層	土師器	埴	②残2.4③(3.15)		僅不良	良	灰褐	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ?、底部糸切?	全体磨滅	49
27	102		31層	土師器	埴	②残2.75③(7.8)		良	普通	灰黄褐	内面ヨコナデ→不定ナデ、外面ヨコナデ、底部板目		48
27	103	15	31層	土師器	埴	①(14.9)②5.6③7.85		良	良	茶褐～赤茶褐	内外ヨコナデ、底部ヘラ切、高台端部板目	内外煤	47
28	104	15	32層	土師器	坏	①(13.4)②3.6③4.65		良	良	茶褐	内外ヨコナデ、底部糸切		57
28	105		32層	土師器	坏	①(15.4)②3.5③(7.6)		良	良	灰黄褐	内外ヨコナデ、底部糸切		53
28	106		32層	黒色土器	埴	②残2.35③7.5		良	良	内:黒、外:淡褐	外面工具調整、内面粗ミガキ、底部ヘラケズリ	A類(内黒)	122
28	107	15	32層	黒色土器	埴	②残3.75③7.5		良	良	黒色	内外ヨコナデ→ミガキ、底部ミガキ	B類(両黒)	56
28	108		32層	瓦器	椀	②残3.35③(7.4)		良	良	暗灰褐	内面ヨコナデ→ミガキ、外面ヨコナデ→工具ナデ、底部ナデ		55
28	109		33層	土師器	坏	②残1.4③(6.3)		良	良	明茶褐	内外ヨコナデ→底部糸切		120
28	110		33層	土師器	坏	②残1.55③(8.1)		良	普通	内:明橙、外:淡灰褐	内外ヨコナデ→底部糸切		121
28	111		33層	土師器	埴	②残3.3		良	良	明橙	内外ヨコナデ		166
28	112		33層	土師器	埴	②残1.8③7.0		良	良	黄褐	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部糸切、高台端部板目		59
28	113		33層	土師器	埴	①(16.8)②残5.2		良	良	黄褐	内外ヨコナデ?、底部糸切	玉縁状	58
28	114		33層	瓦器	椀	①(16.6)②5.6③(7.8)		僅不良	良	灰褐～灰	外面ミガキ	内面磨滅	60
28	115		34層	土師器	坏	①(12.5)②残3.05		良	良	明橙～暗灰褐	内外ヨコナデ→底部ヘラ切?・腰部工具調整	外面黒斑	112
28	116		34層	土師器	坏	②残1.7③(10.0)		良	普通	明橙褐	内外ヨコナデ→底部ヘラ切		113
28	117		34層	土師器	甕	②残8.4		良	粗	内:灰褐～黒褐、外:灰褐	外面平行タタキ、内面工具ナデ	内面煤	114
28	118		35層	土師器	坏	①(11.6)②2.15③(8.0)		良	良	橙褐	内外ヨコナデ、底部板目?	全体磨滅	62
28	119		35層	土師器	坏	②残3.15③(6.0)		良	良	茶褐	外面ヨコナデ、底部糸切	内面磨滅	61
28	120		37層	土師器	坏	②残1.25③(7.3)		良	良	明橙褐	外面工具痕跡、内面ヨコナデ→底部ヘラ切、内底面ナデ→底部板目		116

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構・層位	焼成	器種	法量(cm)		焼成	胎土	色 調	調 整	備 考	登録 番号
						①口径 ③底径	②器高 ④最大径						
28	121		中段10	土師器	埴	②残1.85③(7.8)		良	良	茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?→ナデ		97
28	122		中段10	土師器	埴	②残3.75③6.7		良	普通	茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部強いナデ		98
28	123		37層	土師器	埴	①(13.5)②5.1③7.6		良	良	黄茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切→板目		86
28	124		中段10	土師器	埴	①(14.0)②5.1③(8.85)		僅不良	良	暗黄茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ?、底部不明	内外摩滅・剥離	94
28	125		38層	土師器	埴	②残2.5③(8.2)		良	良	茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切		87
29	126	15	36層	土師器	坏	①(12.0)②2.5③8.0		良	良	橙褐	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ→下半ヘラ削り、底部ヘラ切	略完形	69
29	127		36層	土師器	坏	②残1.25③(6.2)		良	良	橙褐	内外ヨコナデ→底部糸切		119
29	128		36層	土師器	坏	①(10.3)②2.7③(5.9)		良	普通	灰黄褐～黒灰	内面ヨコナデ→底面ハケ、外面ヨコナデ、底部糸切		83
29	129	15	36層	土師器	坏	①(10.6)②2.75③5.4		良	普通	灰黄褐	内外ヨコナデ、底部糸切		67
29	130		36層	土師器	坏	②残1.6③7.7		良	普通	橙褐	内外ヨコナデ?、底部ヘラ切?	内外摩滅	75
29	131		36層	土師器	坏	①(11.6)②2.3③7.6		良	普通	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?→板目		82
29	132	15	36層	土師器	埴	①(11.2)②残3.3		良	普通	黄茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ナデ、底部不明	外面摩滅	68
29	133	15	36層	土師器	埴	①(13.5)②4.0③7.0		良	良	茶褐	内外ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部不明	内外摩滅	65
29	134	16	36層	土師器	埴	①(14.7)②6.65③8.2		良	普通	淡黄褐	内面ヨコナデ→底面ハケ、外面ヨコナデ、底部不明、高台端部板目		66
29	135		36層	土師器	埴	②残2.15③6.35		良	良	内：暗灰褐、外：明褐	内外ヨコナデ→底部糸切→内底面ナデ→底部板目→高台接合		118
29	136		36層	土師器	埴	②残1.8		良	良	橙褐	内外ヨコナデ→底部糸切→内底面ナデ		117
29	137		36層	土師器	埴	②残2.1③6.6		良	良	茶褐	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?→板目	内外摩滅	76
29	138		36層	土師器	埴	②残2.45③6.7		良	普通	明橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?、高台端部板目		71
29	139	16	36層	土師器	埴	②残2.3③7.2		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?→ナデ		77
29	140		36層	土師器	埴	②残3.2③6.8		良	良	灰褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部糸切?	内外摩滅	72
29	141		36層	土師器	埴	②残2.4③(8.4)		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部不明、高台端部板目		81
29	142		36層	土師器	埴	②残3.3③7.4		良	良	内：黄茶褐、外：茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?		80
29	143		36層	土師器	埴	②残3.1③8.7		良	普通	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部不明	外面摩滅	79
29	144		36層	土師器	埴	②残3.0③8.0		良	良	橙褐～茶褐	内面ナデ→ミガキ?、外面ヨコナデ、底部ヘラ切		78
29	145		36層	土師器	埴	②残3.6③8.8		良	良	橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部不明	外面摩滅	70
29	146		36層	土師器	埴	②残3.2③7.2		僅不良	普通	橙褐	内外ヨコナデ?、底部不明	内外摩滅	74
29	147		36層	土師器	埴	②残2.35③7.5		良	普通	淡褐	内面皮革?ナデ、外面ヨコナデ?、底部板目		73
29	148	16	36層	黒色土器	埴	①(16.0)②6.5③8.0		良	良	内：黒、外：淡黄白	内面ミガキ、外面ヨコナデ→ミガキ、底部ヘラ切?	A類(内黒)、内外摩滅	64
29	149	16	36層	土師器	甕	②残6.8		良	僅粗	明灰褐～灰褐	内面胴部ナデ→口縁ヨコナデ、外面胴部ナデ→口縁ヨコナデ	外面煤	85
29	150		36層	土師器	甕	②残4.2		良	普通	暗黄褐	内面胴部削り→口縁ヨコナデ、外面ナデ→口縁ヨコナデ	外面煤	84
30	151		中段谷上層	土師器	皿	①(9.0)②1.55③(7.2)		良	良	明茶褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部糸切		95
30	152		中段上層	土師器	皿	①(9.0)②1.5③(7.25)		良	良	明褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部糸切		92
30	153		中段上層	土師器	皿	①(8.9)②1.2③5.95		僅不良	普通	灰黄白	内外ヨコナデ、底部糸切	内外摩滅	91
30	155		中段上層黒色土	土師器	埴	②残2.05③(7.8)		良	普通	淡褐	内外ヨコナデ→底部不明		170
30	154		中段上層黒色土	土師器	埴	②残4.55		良	良	淡褐	内外ヨコナデ→ミガキ		169
30	156		中段上層	土師器	埴	②残3.2③8.2		良	普通	明橙褐	内面ヨコナデ→ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラ切?→ナデ		90
30	157		中段上層黒色土	土師器	坏	①(15.0)②残3.1		良	良	淡褐	内外ヨコナデ	口径不安	93
30	158		中段谷上層	黒色土器	埴	②残1.3		良	良	内：黒、外：褐～灰褐	内外ヨコナデ→底部糸切→内面ミガキ	A類(内黒)	168
30	159		中段上層	土師器	甕	②残4.45		良	普通	内：明褐、外：暗黄茶褐	内面工具調整→口縁ヨコナデ、外面ナデ→口縁ヨコナデ	外面煤	89
30	160		中段検出	白磁	碗	②残2.0		良	密	灰白	内外回転ナデ		158
30	161		下段トレンチ中層	土師器	坏	②残1.95③5.6		良	普通	明茶褐	内外ヨコナデ、底部糸切		99
30	162		下段トレンチ下層	土師器	坏	②残2.2③5.75		良	良	淡褐	内外ヨコナデ→底部糸切		171
30	163		斜面表土	土師器	坏	②残0.95③(7.4)		良	良	淡橙褐	内外ヨコナデ→底部糸切		143
30	164		遺構面	瓦器	碗	②残3.3③(7.4)		良	良	灰黄	内外ミガキ、底部ナデ		5
30	165	16	12・13層	縄文土器	鉢	②残3.5		良	良	内：暗灰、外：明褐～暗灰褐	内面ケズリ調整、外面沈線文	曾畑式	134
30	166		27層	弥生土器	高坏	②残1.05		良	普通	淡褐～赤褐	内外ヨコナデ	内外丹塗	126
30	167		35層	弥生土器	高坏	②残3.4		良	僅粗	明灰褐	内外ヨコナデ	外面丹塗	115
30	168	16	中段検出	石器	石鏃	長さ1.7、幅1.5、厚さ0.25		一	一	黒色	打製	黒曜石	172

※法量が復元値の場合は括弧をつけている。

表2 宮原金山遺跡遺構一覧

遺 構 名 称			性 格	遺 構 先 後 関 係 (先 → 後)	挿図番号
調 査 時 遺 構 名		報 告 名 称			
上段	テラス1	1号テラス	作業場?		第6図
		土坑1	1号土坑		第7図
		土坑6	6号土坑		第7図
	テラス2	2号テラス	作業場?	2号テラス→3号土坑	第9図
		土坑3	3号土坑	土壙墓	第11図
		土坑7	7号土坑	採土遺構?	第12図
		土坑9	9号土坑		第11図
		炉1	1号炉	炉跡?	第10図
		炉6	6号炉	鍛冶炉	第10図
		炉7	7号炉	鍛冶炉	第10図
		ピット5	ピット5		第9図
		ピット6	ピット6		第9図
		ピット7	ピット7		第9図
	テラス3	3号テラス	作業場?		第6図
		土坑4	4号土坑	5号土坑→4号土坑	第13図
		土坑5	5号土坑	10号土坑→5号土坑→4号土坑	第14図
		土坑10	10号土坑	10号土坑→5号土坑	第14図
		ピット4	ピット4		第6図
	溝2		2号溝	区画溝?	第15図
中段	炉3		3号炉	製鉄炉	第17図
	炉4		4号炉	製鉄炉	第18図
	炉5		5号炉	製鉄炉	第19図
	土坑2		2号土坑		第21図
	土坑8		8号土坑		第21図
	溝1		1号溝	溝状	第22図
	ピット1		8号炉	鍛冶炉	第20図
	ピット2		ピット2		第16図
	ピット3		ピット3		第16図
下段	谷部・堆積層		1～38層	廃滓場	第5図

図 版



1. 調査区全景 (南から)



2. 調査区北側全景
(南から)



3. 中段土層検出時
(南から)



図版 2



1. 横断トレンチ土層①
(南から)



2. 横断トレンチ土層②
(南から)



3. 谷部掘削状況①
(南西から)

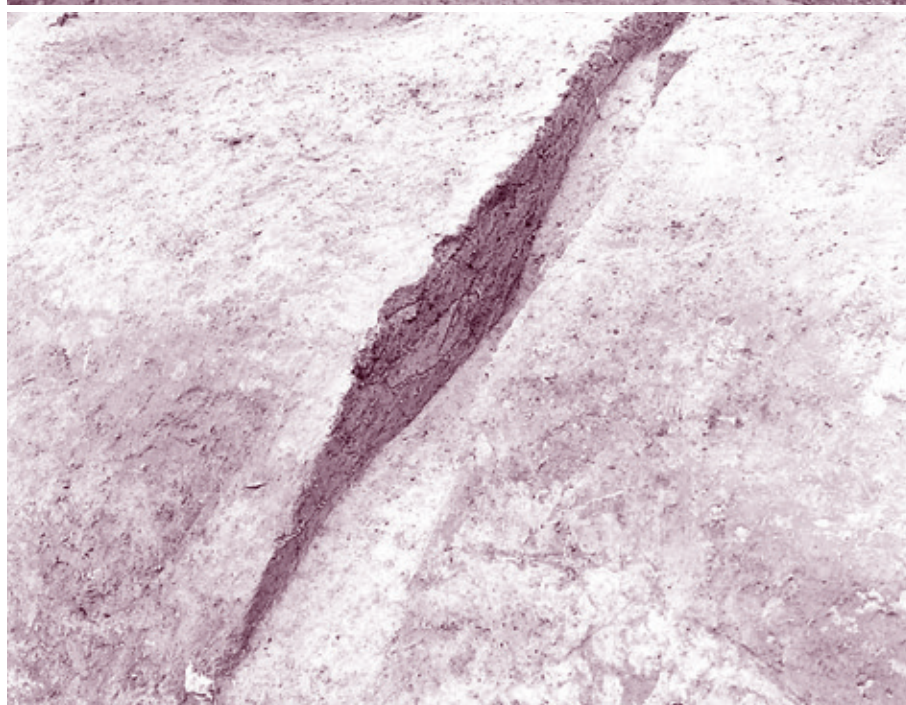
1. 谷部掘削状況②
(南西から)



2. 調査区東壁土層
(西から)



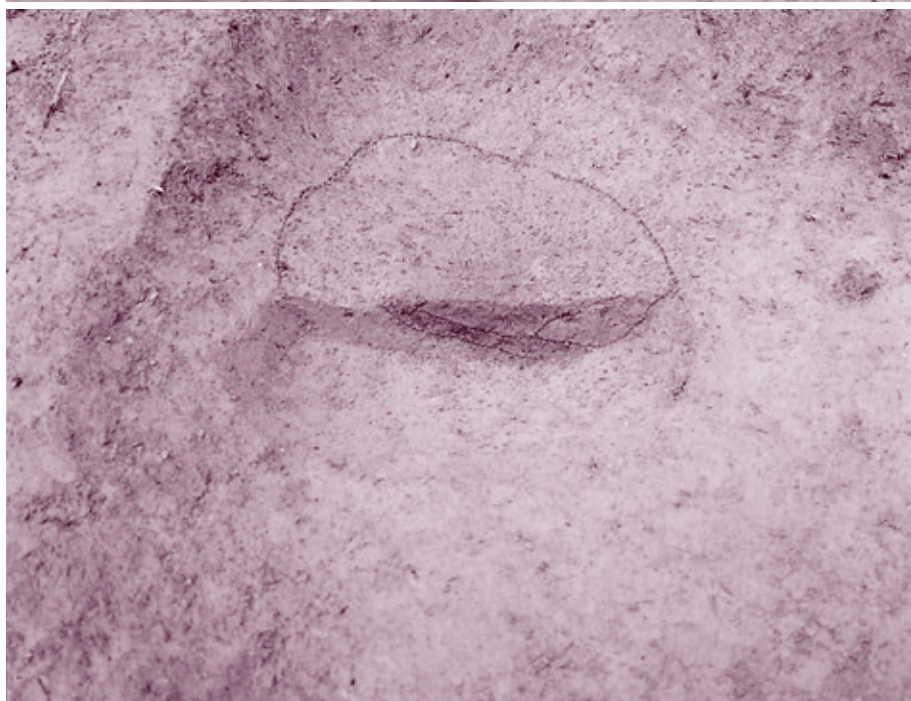
3. 上段トレンチ土層
(南東から)



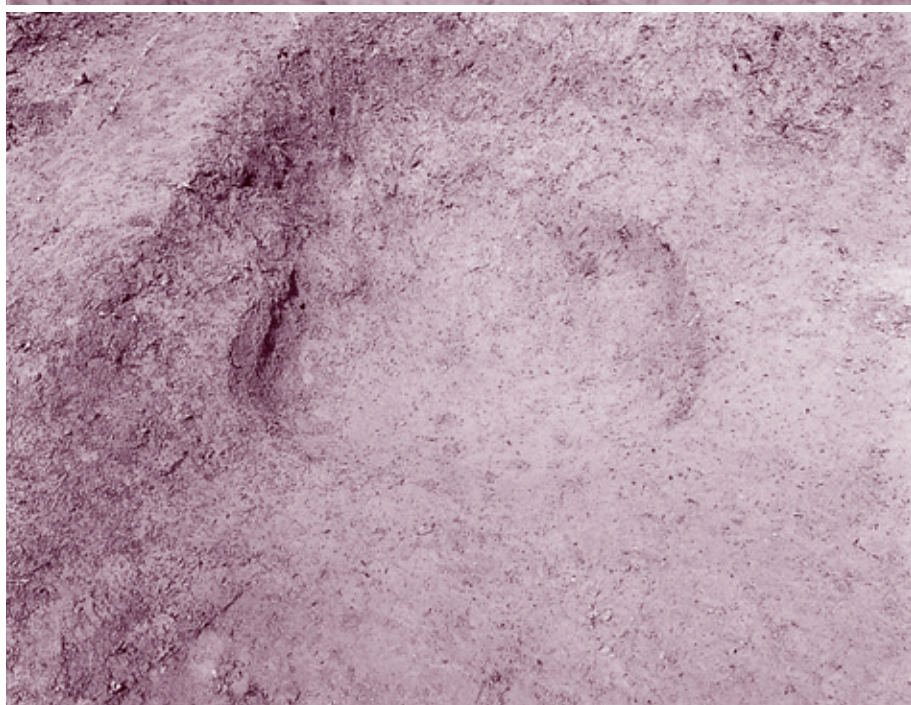
図版 4



1. 上段テラス完掘状況
(西から)



2. 1号土坑土層
(南から)

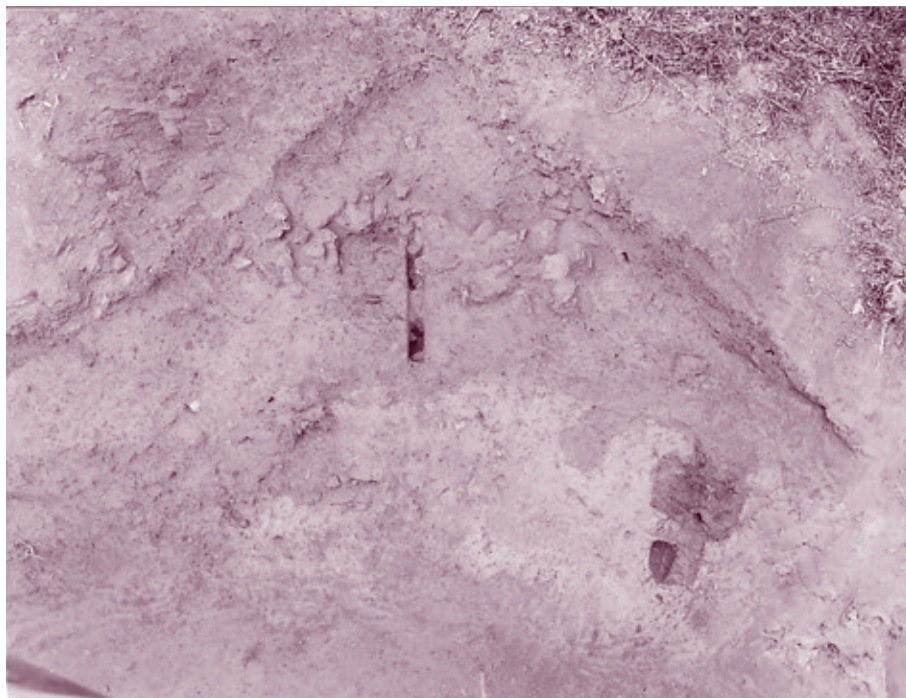


3. 1号土坑完掘状況
(南から)

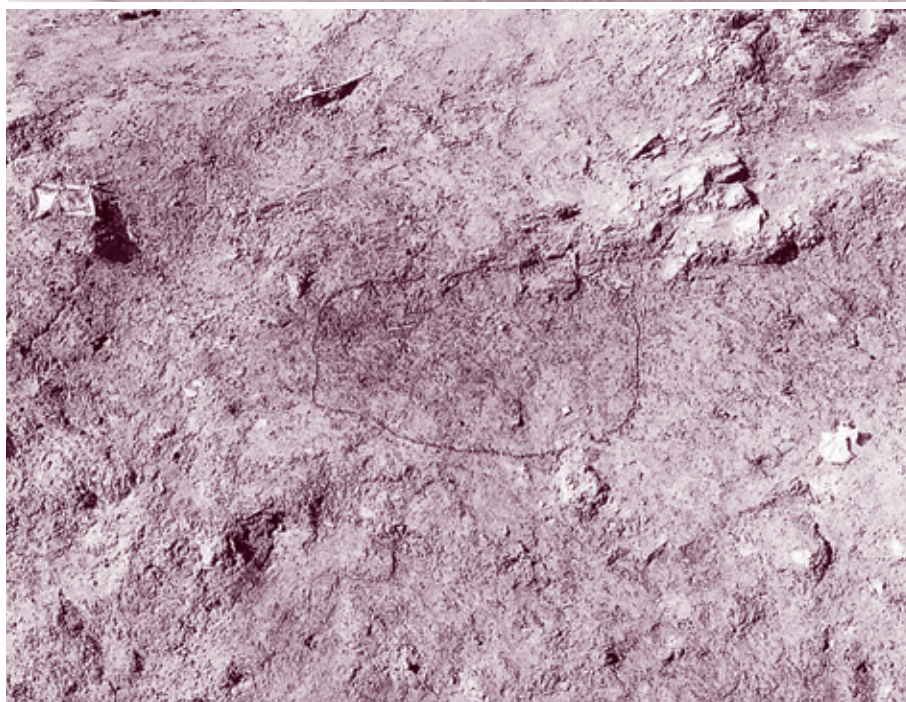
1. 6号土坑掘削状況
(西から)

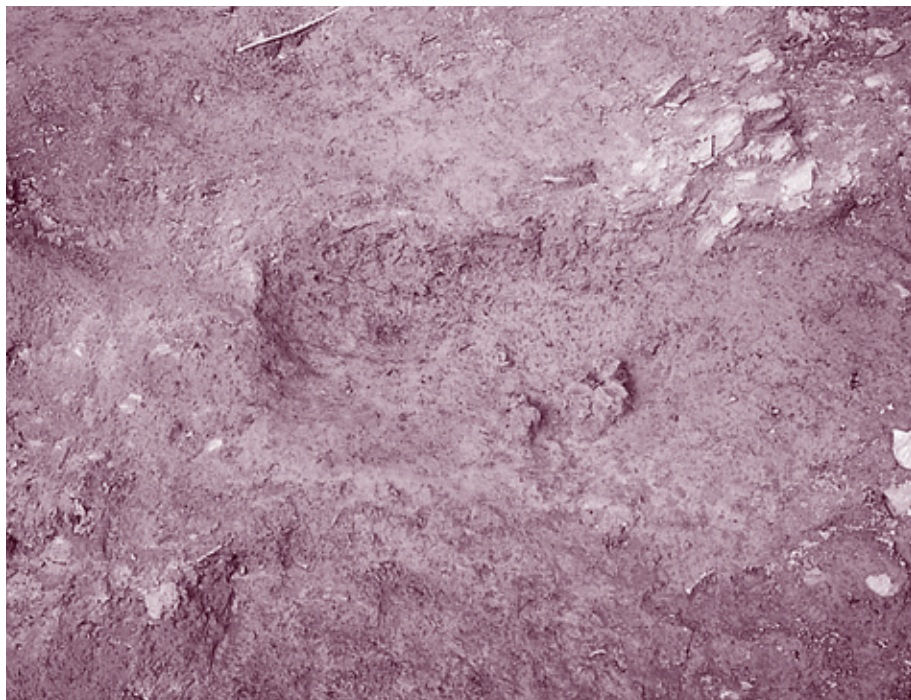


2. 2号テラス表土掘削状況
(南から)



3. 3号土坑検出状況
(南から)





1. 3号土坑完掘状況
(南から)

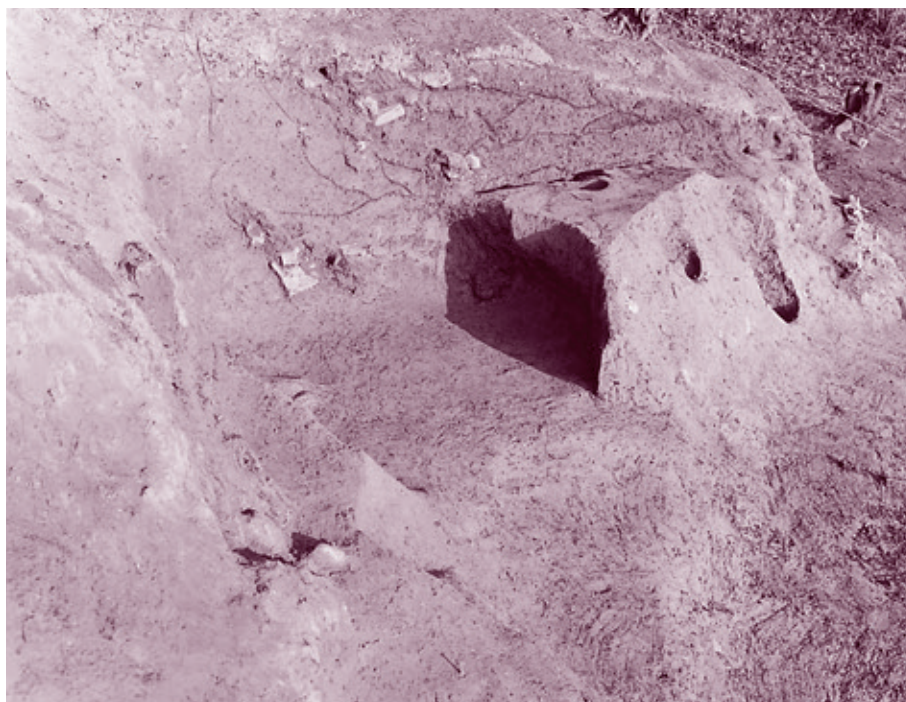


2. 7号土坑半截状況
(東から)

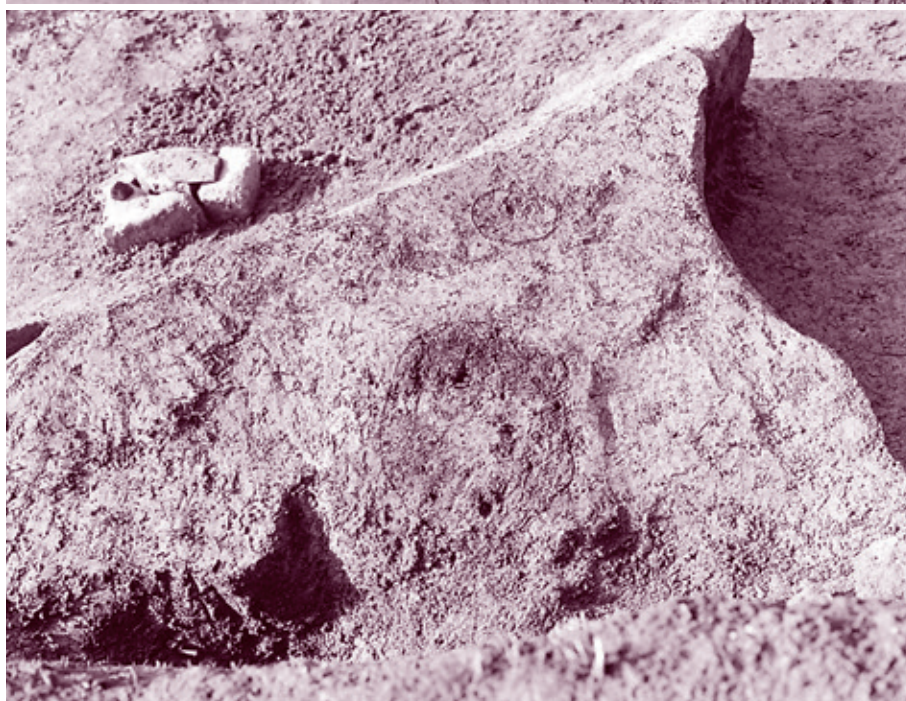


3. 2号テラス東壁土層
(西から)

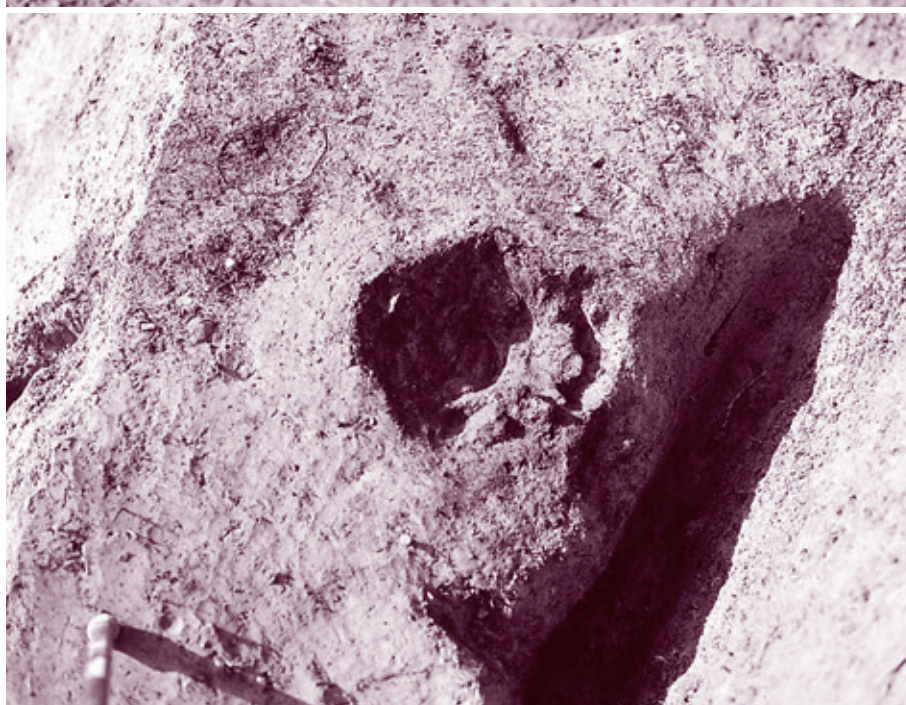
1. 7号土坑完掘状況
(西から)

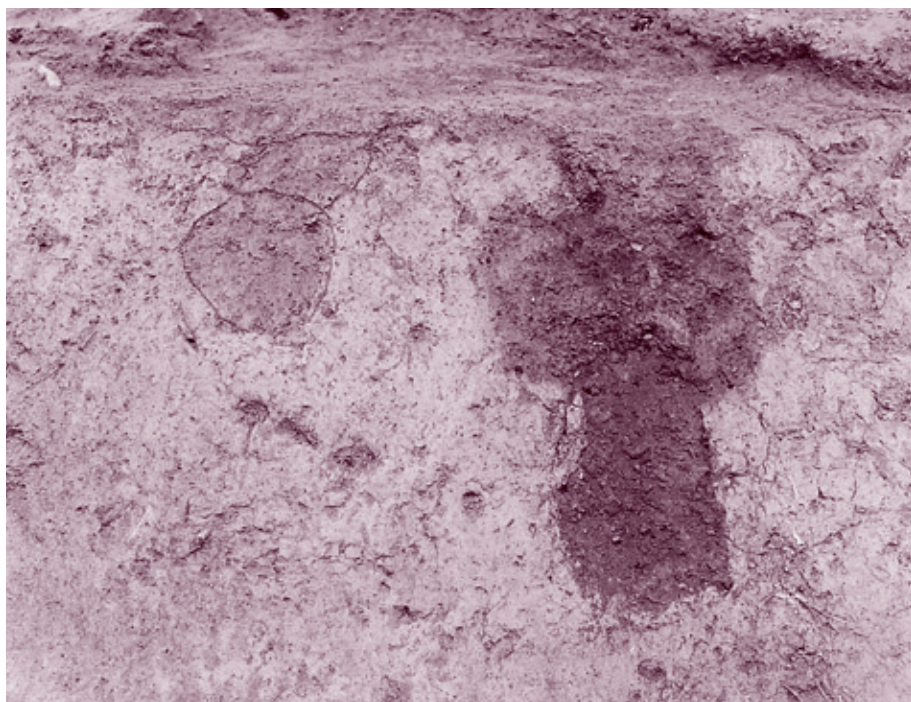


2. 6・7号炉検出状況
(東から)

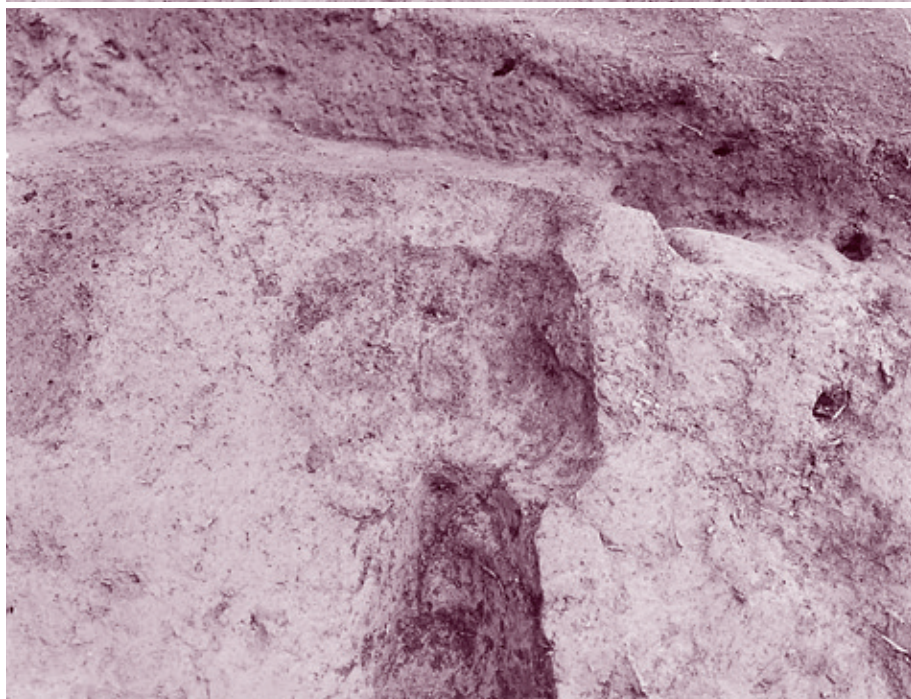


3. 6・7号炉掘削状況
(南東から)

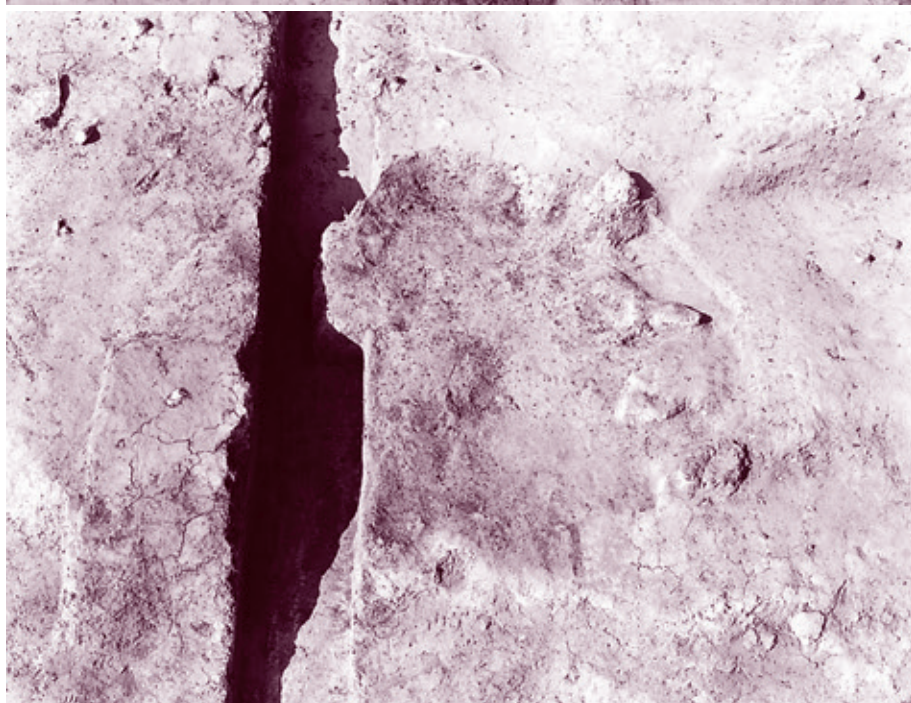




1. 1号炉・ピット5・6検出時
(南から)



2. 1号炉完掘状況
(南から)



3. 5号土坑完掘状況
(南から)

1. 10号土坑完掘状況
(西から)



2. 2号溝掘削状況
(南から)



3. 2号溝土層 (南から)





1. 2号土坑完掘状況
(東から)



2. 1号溝土層
(南西から)

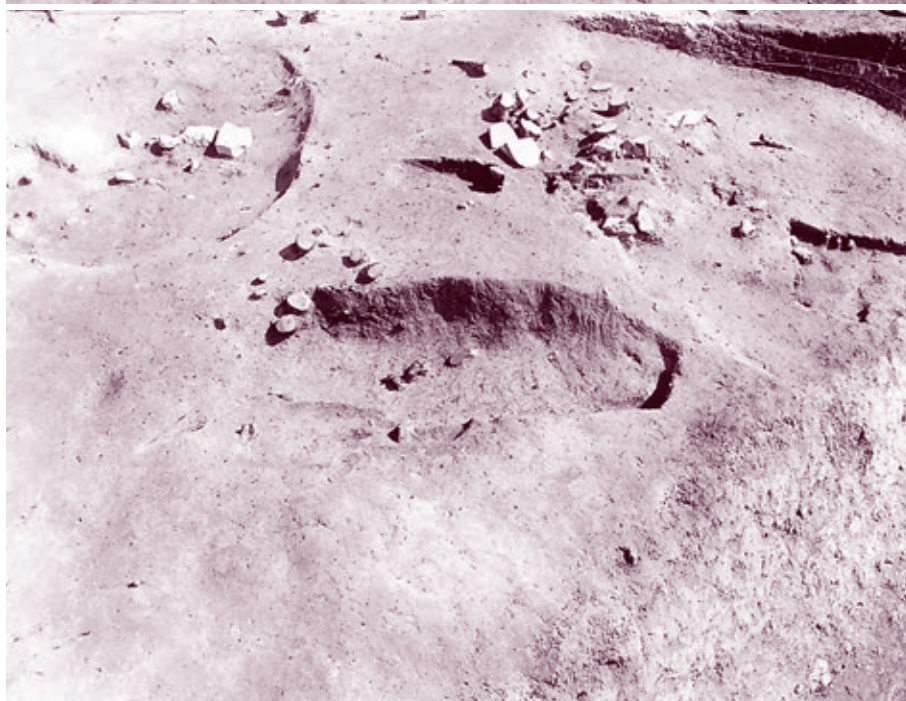


3. 3・4号炉検出状況
(東から)

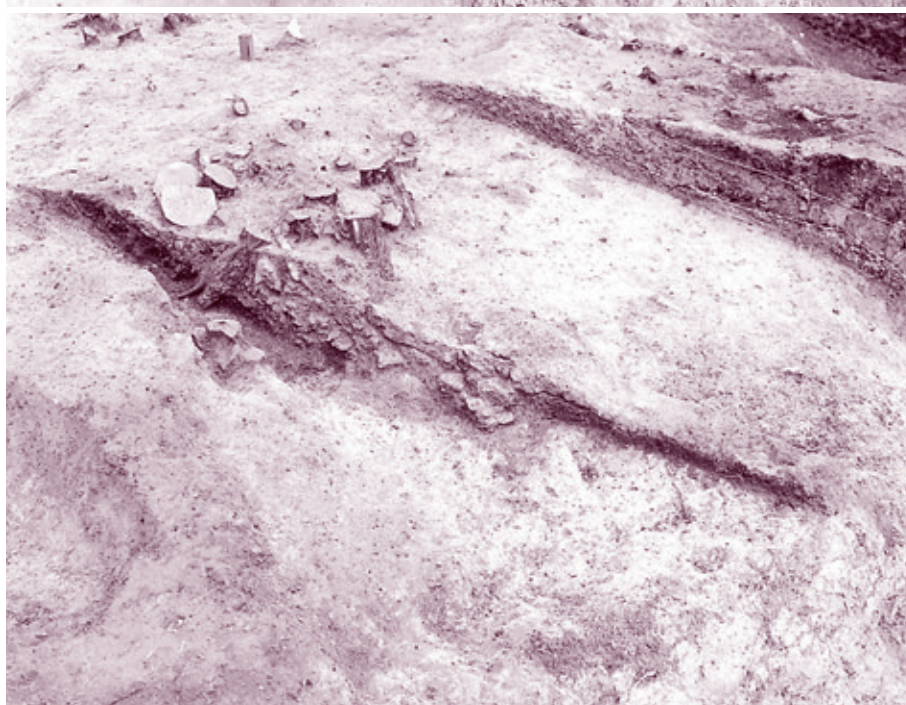
1. 3号炉土層（西から）



2. 3号炉完掘状況
（西から）

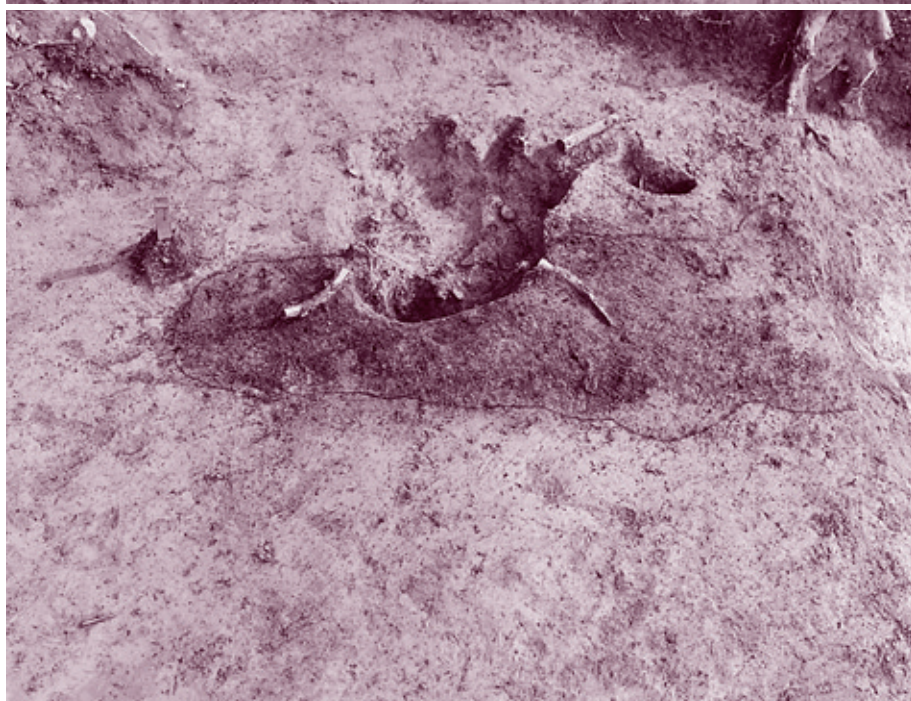


3. 4号炉土層
（南西から）

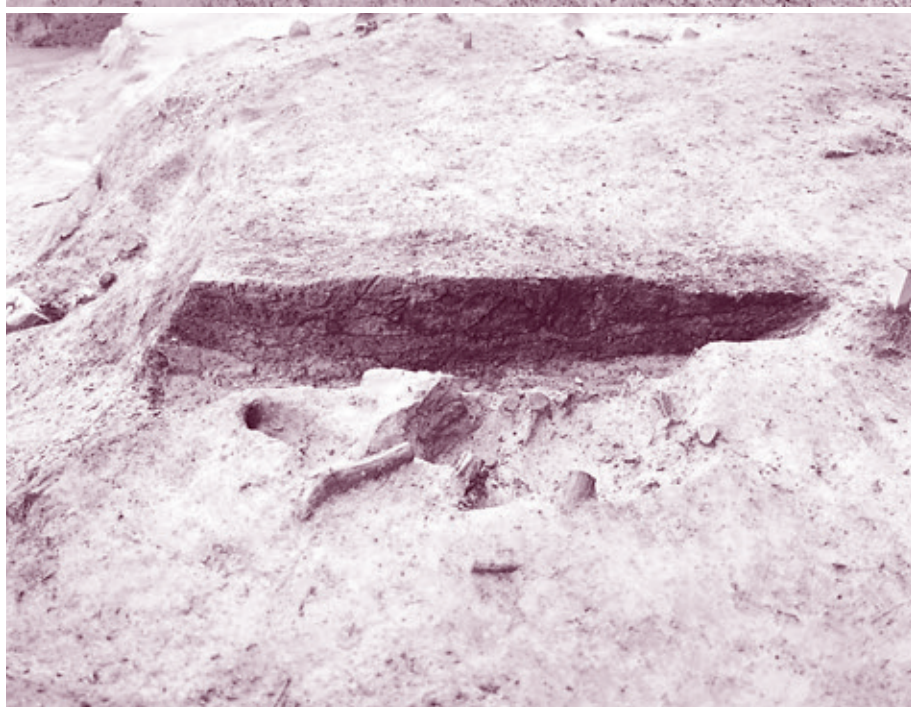




1. 3・4号炉完掘状況
(南から)



2. 5号炉検出状況
(西から)



3. 5号炉土層
(東から)

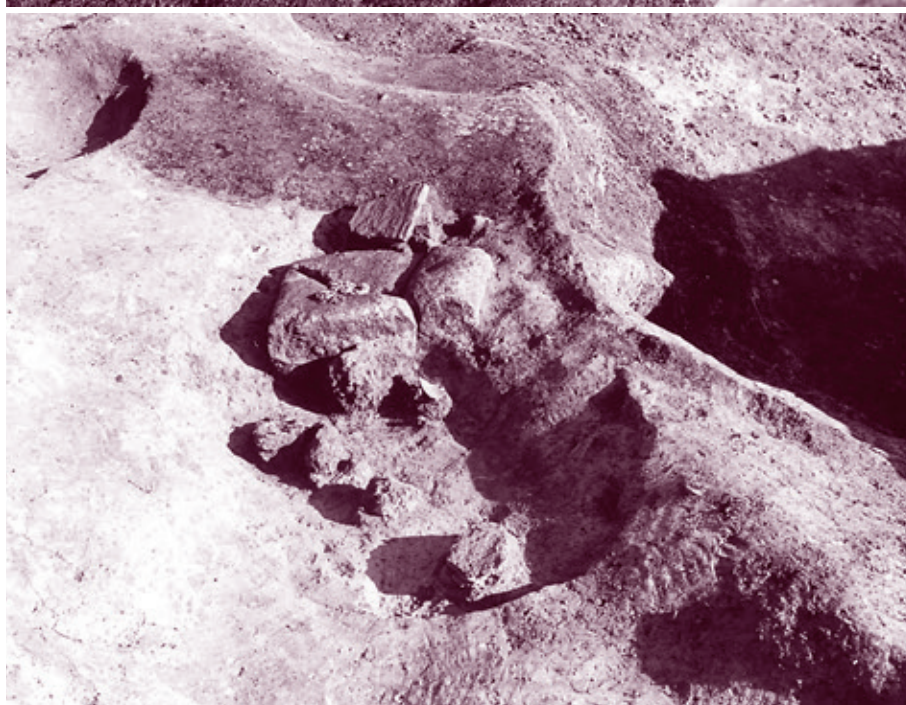
1. 5号炉完掘状況
(南から)

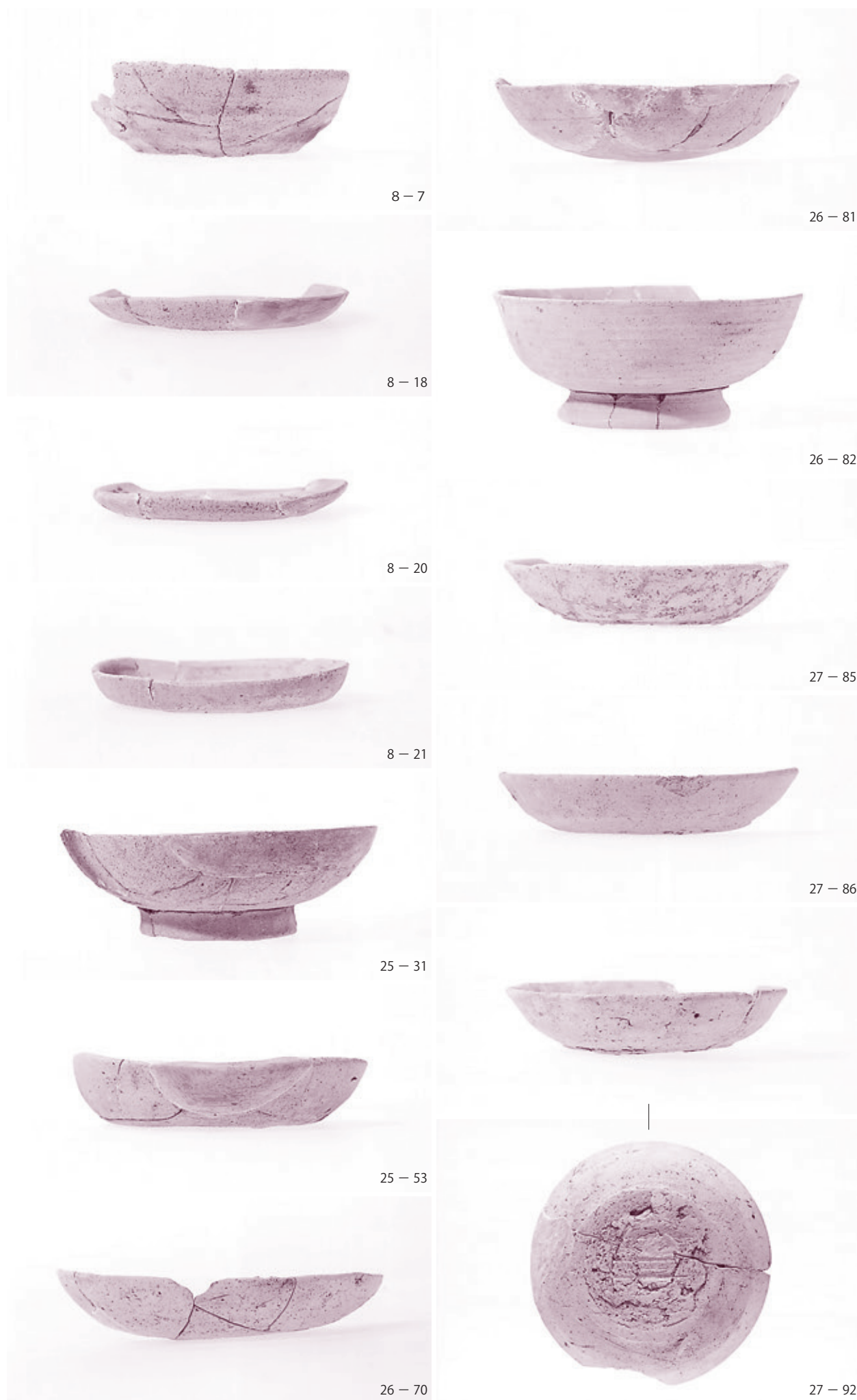


2. 中段斜面検出状況
(南から)

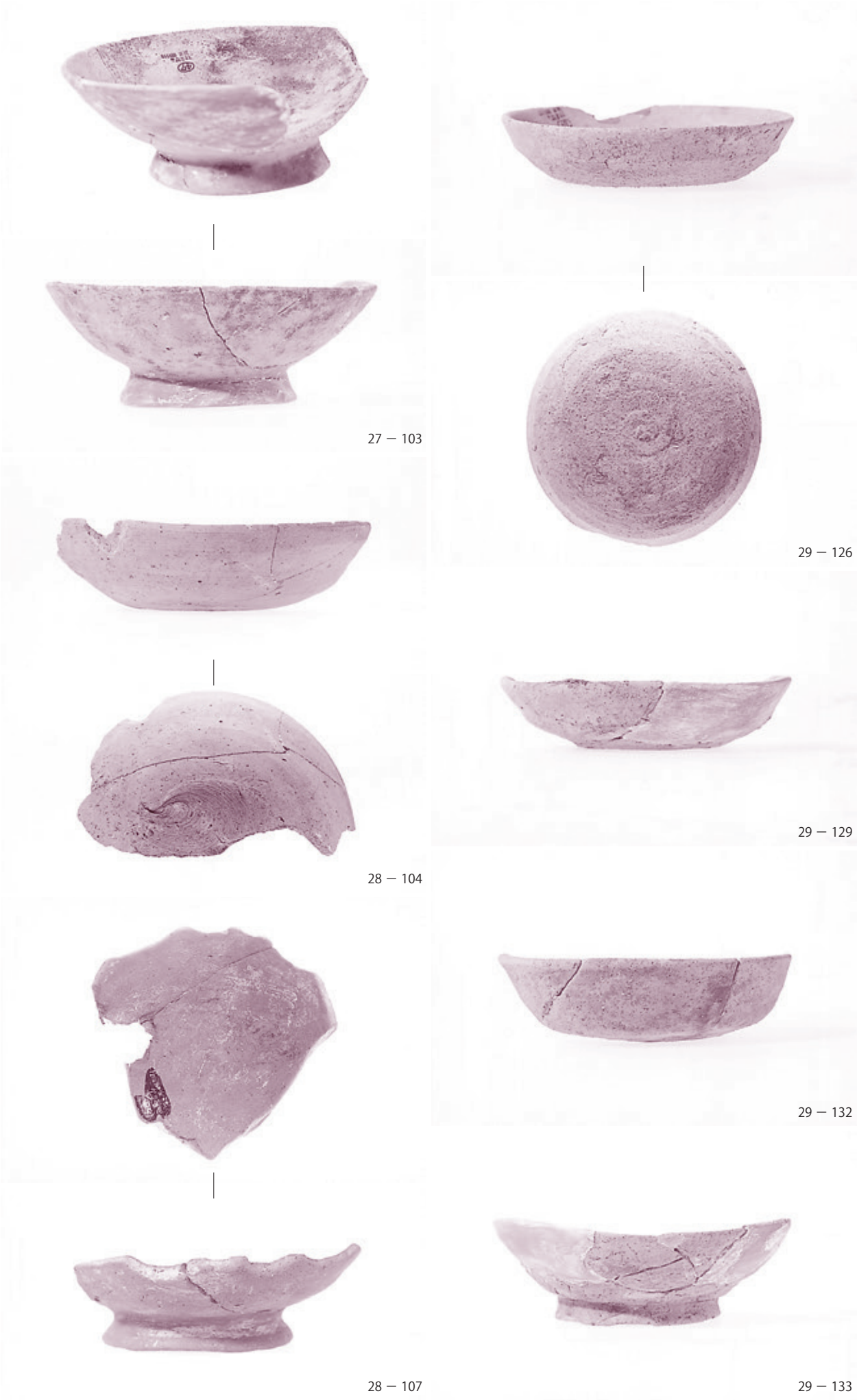


3. 8号土坑完掘状況
(北西から)





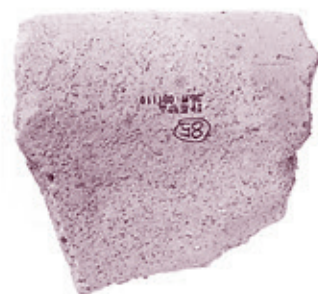
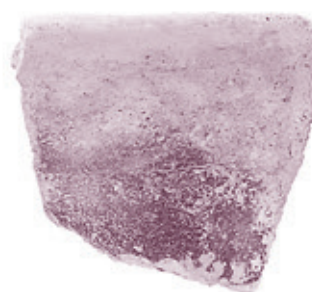
出土遺物①



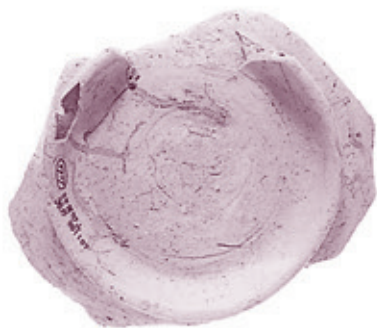
出土遺物②



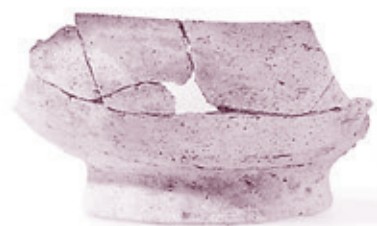
29 - 134



29 - 149



29 - 139



30 - 165



29 - 148



30 - 168

出土遺物③

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みやばるかなやまいせき								
書 名	宮原金山遺跡								
副 書 名	一般国道322号香春大任バイパス関係埋蔵文化財調査報告								
巻 次	第5集								
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書								
シリーズ番号	第235集								
編 著 者 名	下原 幸裕								
編 集 機 関	九州歴史資料館								
所 在 地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208－3								
発行年月日	平成24（2012）年3月31日								
ふ り が な	ふ り が な		コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地		市町村	遺跡番号	。 , ′ ″	。 , ′ ″		m ²	
みやばるかなやまいせき	ふくおかけんたがわぐんかわらまちおおあざさいどうしょ				33°	130°	2008.07.22	770	道路建設
宮原金山遺跡	福岡県田川郡香春町大字採銅所字金山4863-3、6443、6445-4				41′	51′	～		
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮原金山遺跡	生産遺跡	古代・中世		製鉄炉・鍛冶炉・土坑・溝		炉壁・炉床土・鉄滓類・鍛冶滓・羽口・鉄鉱石・土器類		鉄鉱石原料による製鉄	
概 要	平安時代中期から鎌倉時代にかけての製鉄遺跡で、鉄鉱石を原料とする製鉄炉や鍛冶炉などを発見した。確認できた製鉄炉3基はいずれも竪型炉で、このうちの1基は炉門部の両側に石材を立てる構造である。 調査区内の廃滓場を中心に総重量10 t を超える多量の鉄滓や炉壁などの製鉄関連遺物が出土したほか、椀形鍛冶滓も多数出土したことから、製錬から精錬にいたる工程が遺跡内で行われていたものと考えられる。香春岳周辺における鉱物資源開発の歴史を解明するうえで極めて重要な資料であるとともに、わが国の製鉄史を研究するうえでも大きな成果が得られた。								

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 23	登録番号 0009

一般国道322号香春大任バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

宮原金山遺跡

—遺構・土器篇—

福岡県文化財調査報告書 第235集

平成24（2012）年3月31日発行

発 行 九州歴史資料館
〒838-0106 小郡市三沢5208-3
電話0942-75-9501

印 刷 片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園1丁目 8-15

